

1.psd

(空白)

3.psd

4.psd

5.psd

## Track.4 There Is A Light That Never Goes Out

大勢の人間が行き交う場所。ここは空港だ。しかし、彼らの多くは肌が白く、髪も金や茶。明らかに欧米人の割合が多い。

そう、ここは日本ではない。フランス—パリ＝シャルル・ド・ゴール国際空港だ。

「……よりによって、何でフランスなんだ」

馴染みの茶色の鞄を片手に、青年、赤城周は入国ゲートを出ると深いため息をついた。しかし、彼も内心は非常に心浮き足立っている。外国人の友人は多少なりともいる赤城だが、彼にとつてこれは初めての海外旅行だった。いや、旅行とは少し違う。そもそも赤城はこのように海外に行く予定もなかつた。彼にとつて、この冬は就職活動のために色々と準備をする予定だつたのだが。

「ちよつと、ここ行つて来て」

まるで近所へお遣いを頼むかのような調子で魔女は彼に言つた。赤城自身、初めは気乗りしなかつたが、旅費もビザも手配してもらえると言うなら話は別である。きっと良い経験になる。そう肯定的に捉えて彼は日本から出てきた。

—空気が違う。

赤城がフランスに到着後、一番はじめに抱いた感想がこれだ。空気。というよりは匂いの  
ようなものだろうか。明らかに、日本とは違う異国の雰囲気が空港からは漂っていた。  
赤城は鼻歌を歌いながら出口へと向かう。少しづつ身体の中から空気が入れ替わっていく、  
そんな気分を彼は感じていた。

「お、これは、これは!!」

突然、赤城の姿を見た男は『英語』で彼に声をかけてきた。

—英語?  
?

フランスで英語。どこか妙な感じを胸に抱きながら、赤城は声のする方へ振り返った。

「—アンダーソン!! 久しぶりだな!!」

男は赤城の友人だった。アンダーソン・カイル。彼も魔法使いである。事件当時、研究所の襲来を防ぎ、日本で赤城たちと共に戦つた数少ない外国人戦闘員の一人であり、事件後は欧洲に戻つた男である。細身で身長もあまり高くない赤城に対し、アンダーソンはかなりがっしりとした体型。初めての海外に緊張をしていた赤城も、彼の姿を目にして多少の落ち着きを取り戻したようだつた。

「三年ぶりじゃないか？まさか君が迎えに来てくれるとは思わなかつたよ!!」「お前が来るのに俺が迎えに行かないわけがないだろ。それでも……何でフランスなんだ？俺はてつきり英國に派遣されると思つていたが？」

「ああ……実は……」

陽気に笑いながら問いかけるアンダーソンに対し、赤城は淡々とした表情で返答しようと  
するが、そんな彼の言葉を遮るように、

「全部知つている。だから俺が迎えに来たんだ」

アンダーソンは豪快に笑いながら、赤城の背中を叩いた。景気づけのようなものだつたの  
だろ。彼の気遣いに、赤城は人知れず小さくため息をついたのだつた。  
「とにかく。今から軽く一杯でもどうだ？久しぶりの再会だ、色々と話したい事がたくさんあるんだ!!」

アンダーソンが赤城の肩に手を置き、そのまま出口へと向かおうとした瞬間――、

「ちよつと？私もいるんだけど!!」

遠ざかっていく二人の背に女の声が響いた。彼らが振り返つた先には、一人の女がこちらをじとりと睨んでいた。訳がわからず困惑した表情で赤城を見返すアンダーソン。一方の赤城は、深いため息をついての方へと向き直つた。

「紹介するよ、アンダーソン。こちらは俺の……」

「妻です。天城遊幽と申します。以後お見知りおきを」

「は……はあ」

赤城の言葉を遮り、とても上品な笑みを浮かべる女、天城遊幽。先ほどの冷ややかな視線

を寄こした人間とは正反対にも思える態度だ。流されるように、彼女と挨拶を交わしたアンダーソンは、こつそりと隣の友人へと耳打ちをした。

「つまり……恋人か？」

「ああ……一応は」

「ちよつと、何が一応なの？はつきり言いなさいよ!!」

男二人は小さな声で会話をしていたが、どうやら彼女の耳にははつきりと届いていたようだ。顔を真っ赤にして赤城に詰め寄る遊幽の姿を見て、アンダーソンは彼に同情にも似た憐れみの視線を向けた。

そして、一通り文句を言い終わったのか、女は一息つくと再びアンダーソンへと向き直つた。

「ところで周ちゃん、何で私だけ紹介されているのよ。彼は誰？」

「ああ、こちらはアンダーソンカイル。あの事件の時、一緒に戦った仲間であり大事な友人だ」

——【あの事件】。

遊幽はその単語を聞くや否や、大きく目を見開くと静かに口を開いた。

「……何で」「ん？」

俯く遊幽を赤城は不思議そうに眺めていた。すると突然、彼女は顔を上げ、まるで銃弾のごとき勢いで彼を問い合わせ始めた。

「何で話してくれなかつたの!? 私たち三年前から付き合つていたじやない!! ううん、それよりもつと前から仲良かつたはずでしょ? それなのに……こういう友人いるなんて知りもしなかつた。私たち付き合つているのに……将来も約束したのに……三年前の事件のこと、もつとちゃんと詳しく述べよ」

赤城の胸に顔を埋め、大声で喚き立てる女を見て、アンダーソンは再び憐れみの目を向けた。一方の赤城は、彼女の頭を優しく撫でて笑つてゐる。とても彼らしい対応だ。この赤城周という青年はめつたな事でもない限り笑顔を絶やさない好青年である。それ故、このような面倒臭い対応にもきちんと答えてくれるのだ。

「ええと……ほら、あの時俺たち二人とも色々と忙しかつたじやない。遊幽は先生に魔法習つてたし、俺は俺で仕事してたし。遊幽が聞いたら俺はいつでも答えるつもりだつたよ」  
「確かにあの時は忙しかつた。それじやあ仕方なかつたかも」

「……それにわざわざ他人に話す様なことでもなかつたし」

そう言つた後で、赤城は「しまつた」と片手で口をつぐんだ。だが時既に遅し。今のは完全に失言であり、予想通り遊幽の顔は再び怒りを露わにしていく。

「……他人。そう、私は周ちやんの他人だつたのね」

「いや、その……他人つていつても色々と意味があつて……」

「じゃあ、どういう意味の他人?」

「えつと……それは」

再び目の前で始まる痴話喧嘩を前に、アンダーソンはそれが終わるのを待つしかなかつたのだ。

\*\*\*

「ところで、何でまたこんな遠くまで來たの？」

やつと気持ちも落ち着いたところで、遊幽は当然の質問を赤城へと問いかける。しかし当の彼女は彼の返答も聞かずに一人楽しそうに辺りを見回し始めた。

「私、海外旅行なんて初めてなのよね。楽しみだな!! まさか姉さんがこんな風に気を遣つてくれるなんて思いもしなかつた!! 妹と妹の旦那の分の旅費まで手配してくれるなんて!!」

「旦那って……まだ結婚もしてないの……」

ぼそりと呟くが、どうやら今の赤城の発言は彼女には聞こえなかつたようだ。ほつと一息をつくと、赤城はアンダーソンへと向き直つた。

「さて、俺もここに來た理由を聞いてないんだ。なんとなく予想はついてるけど、きちんと教えてくれ」

「たぶんその予想で当たつてていると思うぞ」

「……何か起きるのか?」

「おそらく……な」

「でも何で俺なんだ?」

「俺の口添えのせいでもあるな。知つての通り、俺たち協会連中の活動領域は歐州全域だ。ただ去年、協会長が変わつてアルゼンチン人になつただろ？だから協会本部も南米に移つて、こつちは勢力が弱まつてゐるんだ。それで歐州側の勢力を増強しときたくてな」

「なるほど」

「それにここは前の協会長がいた国だ。拠点にするには色々と設備が残つていて勝手が良い」

説明を聞き終えると、赤城は長いため息をついてうなだれた。

「やつぱり海外旅行気分なんて味わえなさそうだ……」

その瞬間。今までキラキラと目を輝かせていた遊幽が物凄い早さで赤城の言葉に反応した。

「ちよつと!!私たち、ここに旅行しに来たんじやないの!?」

「……そのつもりだつたけどね」

純粹に海外旅行だと思つていた遊幽は、自嘲氣味に笑う恋人を見て、全てを察してしまつたようだ。そしてふらふらと二、三歩ほど赤城から遠ざかると、彼女は周囲の目も気にせず大声で宙に向かつて叫び声を上げた。

「騙された……また騙された……お姉ちゃんあああああああん!!」

行き場の怒りにただただ地面を踏み続ける遊幽。そんな彼女をなだめるはずの赤城は傍観を決め込んでいた。仕方がなく、アンダーソンが遊幽へと声をかけようとするが、今度こそ彼女は絶望を顔に浮かべたまま、下を向いてぶつぶつと呟き始めていた。

「あーあ、何だこれ。せつかく二人きりで優雅に海外旅行だつて聞いて色々と準備してきただのにさ、まさか仕事で派遣されてるなんて。また働かないといけないの？ていうか、そ

そもそも私たちはいつ……

「おい……いいのか？ 彼女」

「今はほつといた方がいいよ」

赤城たちがこそそと話し合っていると、突然、遊幽は彼の右腕を掴んだ。そして今までの鬱々としていた彼女の声色が一気に変わった。

「ねえ。私たち、もう全部辞めて普通に旅行楽しも？ ね？」

「え……いや。でも」

急に愛嬌たっぷりとなつた鼻声に、思わず赤城も動搖を隠せずにいた。これをチャンスだと思ったのか、遊幽は更に言葉を続ける。

「ねえ、優雅に海外旅行しようよ。とりあえず、何も起きてないんだからいいじやない。

私たちは、綺麗な街並みにおいしい料理に素敵なホテル……姉さんのお金でフランスを満喫しよ？ せつかくの初海外だよ？」

両手を握りしめ、甘い鼻声を滑らせながら彼女は徐々に赤城との距離を狭めていく。

「こんな無料で行ける海外予行なんてめつたないよ？ どうせ、姉さんのことだからまた大変な仕事押し付けてきてるだろうし、疲れちゃうじやない。観光なんてしてる暇無くなるよ。だったら、もう全部忘れて素敵な海外旅行にしようよ」

悪魔の囁きをしばらく黙つて聞いていた赤城は、ついに決心したように顔を上げた。そして彼女に笑いかける。

「うん、やっぱり俺には無理だよ。先生が俺たちを信用してくれたからこそ、旅費も全部出してくれたんだ。だから遊幽ちゃん、さっさと仕事終わらせて、旅行楽しもう？」

14.psd

「……」

「遊幽ちゃん？」

「…………この、気の利かない奴!!」

「痛ツ!!」

「女がここまでアプローチしてるんだから、ちよつとは妥協しなさいよ」

遊幽は思いきり赤城の足を蹴飛ばすと、小言を言いながら足早に出口の方へと歩きはじめた。そんな彼女の背を追いながら、赤城は再び先ほどの話を続ける。

「ところでアンダーソン、研究所の動きはどうなつてているんだ?」

「あ……あ、最新の情報では、Mr.Modification が日本で事件を起こしたと聞いたな。解決はしたと時宮葵から連絡を受けている。どうやらマエストロが処理したらしい」

「とりあえずは安全か。問題はその次だろうね。研究所の連中が、本格的に動き出したっていう証拠だからな」

赤城の見解にアンダーソンも深く頷き返す。

「……三年前のような事件がまた起きないといいな」

「組織の半分が飛んだんだ。そんな状況下でできるか?」

疑問符を浮かべる赤城に対し、アンダーソンは鋭い視線で前を見据えたまま静かに呟いた。  
「奴らに頭はない。が、たつた一人残つたとしても研究所は研究所という【勢力】だ。何を仕出かすか知れない」

「……そうだな」

瞬間、赤城はいつのまにか自身の顔から笑みが消えていることに気付いた。

「……どうやら随分と重い話をしていたみたいだね」

緊張の糸がほぐれたかのように、ふわりと柔らかい笑みを浮かべる赤城に、アンダーソンも釣られて乗つかつた。

「もつと楽しい話題でもするか？」

「何かネタがあるのか？アンダーソン」

すると、彼は先頭を行く遊幽を見つめたまま、にたりと笑みを浮かべた。

「実は最近、俺にも彼女ができるんだ」

その発言を聞くや否や、赤城は大きな声で笑い始めた。

「はははっ、本当かよ、アンダーソン!! 突拍子もないな!!」

「何がおかしいんだ!!」

「いや、悪い悪い。びっくりして……で、どんな女性なんだ？」

赤城の問いかけに、アンダーソンは急に頬を搔いて恥ずかしそうに視線を横にずらした。  
「……少し前に会った女性なんだ。なんかとても落ち着いていてさっぱりした女性だ」

「そうか、それは良かつたな」

「ああ、いつかお前にも紹介する。お前は両親の次に大事な友人の一人だからな」  
そういうと、アンダーソンは財布から一枚の写真を取り出した。そこに映っていたのは本当に美人な女性。ブロンドの髪の毛にブルーの瞳。どこか物憂げな表情が印象的な顔をしていた。

「綺麗な人だな」

「ああ、俺もそう思う」

写真を見つめたまま微笑むアンダーソン。そんな純粹な彼を横目に、ふと、赤城にも悪戯心が芽生えてきた。

「……本当に付き合っているのか？」

「もちろんだ!!俺は嘘を言わない」

互いに笑い合うと、アンダーソンは密かに彼の耳元へと囁いた。

「これは真面目な話だが、ああいう女性は避けた方がいいぞ?一度目をつけられると中々離してもらえなくなるからな」

おそらく遊幽のことだろう。そう察した赤城は再び前を行く彼女を眺めて、困ったような笑みをアンダーソンに返した。

「わかつてゐるよ。でも既に捕まっちゃつたし。それに俺ももう慣れたよ」

「周……」

「大丈夫だよ、無理してないって」

「そうか」

いつも通りの笑みを浮かべる友人に對し、アンダーソンも安心したように、そして激励をするかのように彼の背中を叩いた。

「……そういうえば、そんな美人とどこで知り合つたんだ?」

「周、それは飲んでから話そう!!」

豪快に笑いながら、アンダーソンは彼の首に手を回して歩くーしかし、彼らの目の前には警備員に取り押さえられている遊幽の姿があつた。どうやら物珍しき故に、何か迷惑を起こしたのだろう。

「娘ちゃん、そんな所でもたもたしてると置いてくぞ!!」

「ちよつ……待つて!! 助けてよ」

「ほら、早く来ないと、こいは俺が連れて行つちまうぞ」

「ちよつと!! 誰か助けてよ!! 周ちゃん!!」

アンダーソンは楽しそうに笑いながら、遊幽の横を通り過ぎていく。

一方、赤城の方も面倒事には慣れているのか、ため息をついて遊幽の元へと戻つていった。

赤城周、天城遊幽、そしてアンダーソン・カイル。この三人にもまた重大な事件が待ち受けていた。それはいずれ彼らの日常にも、そして今後の勢力関係にも大きな影響を与えることになるのであつた。

\*\*\*

「やつぱりこの店が一番だな」

そう言いながら、アンダーソンは慣れた仕草でカウンターの席へと腰かけた。かなり上品な雰囲気が漂う店内。客の数はまばらであるが、それすらも店のオブジェクトであるかのように静かな空間が出来上がつていた。カウンター越しの店員もあえて客に声を掛けることもない。黙々と自身の作業を行い、あくまでも受け身の姿勢でいるようだ。店内の雰囲気に気後れしつつ、赤城たちもアンダーソンの隣へと腰かけた。

一かなり古い店だな。

店内を見回していた赤城は、ふと、匂いでそれを感じ取った。新しい店内に漂う匂いと、老舗の店内に漂う匂いは明らかに違うと彼は感じている。これは彼の特技であり、癖のようなものだった。

「二人は何を飲むんだ？」

座るや否や、真っ先にビールを注文していたアンダーソンは、彼らに声を掛けた。

「ああ……じゃあ俺も同じやつを」

ちらりと赤城は、何気なく隣に座る彼女の様子を窺つた。明らかに不満げな表情を浮かべている遊幽。しばらく赤城を見据えていた彼女は、諦めたかのようにため息をついてメニュー表に視線をずらした。

「マンハッタンを一つ」

薄暗い照明、店内の雰囲気のせいもあり、彼女は普段より大人びて見えた。しかし、初めての海外旅行。明らかに不安な様子も見て取れる。そんな遊幽の姿に、赤城は思わず笑みを零してしまった。

「……何？」

「ん？」

「何でじろじろ見てるのよ」

「いや、ただ、綺麗だなって思つて」

「……意味分かんない」

そう言うと彼女はそっぽを向いてしまった。

初対面の人間からは素つ気ない態度に思われるが、赤城にはわかっていた。これは彼女の照れ隠しのようなものである。彼のガールフレンドある天城遊幽は『好意』を表現する方法が非常に下手なのだ。彼女は幼少期から親の愛情を受けてはいたが、愛情表現を受け取ることは滅多になかった。『愛している』、『大好きだ』等の言葉を聞いて成長してこなかつた彼女にとって、それは『言わなくとも良い事』のように捉えているのだろう。現に彼女は初めて会った瞬間から、赤城に迫つていった。一目惚れだったのか、すぐに遊幽は彼に『付き合つてほしい』と告げた。初対面の女性にいきなり交際を求められる機会なんて殆どなかつた赤城にとって、そんな彼女はとても魅力的に映つたのである。

—明らかに他とは違う。におい。雰囲気。

そして四年もの月日が彼らを過ぎて行く。魔女に出会つた時も、友人が消えた時も、天城遊幽は彼の隣にいた。

「おい」

アンダーソンの呼び掛けに、やつと赤城は意識を取り戻した。

「周、もう酔つたのか？」

「いや、ちょっと考え方していただけだよ」

「そうか」

訳知り顔でアンダーソンは笑う。赤城もいつも通りの微笑を浮かべた顔を返した。

「さてと……普段なら気持ちよく幹杯するところだが、まずは先に逝つちまつた友人にこの酒を捧げよう」

「ああ」

「そうね」

アンダーソンの提案に彼らも頷いた。  
そして三人は互いの杯をぶつけず、虚空で杯を交わしてから、それを口に含んだ。

\*\*\*

店内に流れる古いポップミュージックのせいか、どこか懐しい心地のまま、しばらく沈黙が続いていた。

「ここはBARなのか？それともPUBか？」

唐突に口を開いた俺の質問に、アンダーソンは豪快に笑いながら答える。

「俺はPUBだと思うな何故なら俺がビールを飲んでいるからだ!!」

「なにそれ」

いつもより上機嫌なアンダーソンに対し、冷静な反応をする遊幽ちゃん。そんな二人の会話に、俺は思わず笑ってしまう。

ふと、呆れた顔をしていた遊幽ちゃんがマンハッタンを一口飲んだ。一口、また一口。彼女がお酒を口にする姿から、何故か俺は目を離せずにいる。

瞬間、俺は顔が熱くなっているのを感じた。すぐにいつもの表情に戻すが、さすが、この気の利く友人にはバレていたようだ。

「奥さんが酒を飲む姿がそんなにいやらしかったのか？」

「直球か。

「いや、そうじやなくて。綺麗というか、美しく思つただけだよ」

俺が正直にそう答えると、アンダーソンは含みの無い、純粹な笑顔で笑い始めた。

「さつきからどうしたんだ？まるで映画の撮影でもしている気分だ！！本当にお前は面白いな」

目の前でからかう友人に、俺も少し恥ずかしくなってきた。

「……俺は思つた事をそのまま言つただけだ」

「周はロマンチストだな」

「別にロマンチストなんかじや……」

「ロマンチストよ!! 美しいとか綺麗だと普通に言うんだもの」

俺が否定しようとしたところに、思わぬところから援護射撃が来た。そして遊幽ちゃんは楽しそうに笑いながら、再びマンハッタンを口にする。

「おいしい……良い店ですね、行きつけなんですか？」

すつかり店の雰囲気にも馴染んできたのか、遊幽ちゃんは親しげにアンダーソンへと問い合わせた。対する、アンダーソンも誇らしげに胸を張つて、それに答える。

「ああ!! 毎日さ!! ここは酒も安いしな!!」

すると、カウンター越しに立っていたバー・テンダーは威圧的な視線を彼に送った。それに気づいたアンダーソンも、思わず頭を小さく下げて愛想笑いを浮かべる。

「ま、まあ今はちょっととした冗談で……俺が初めてフランスに来た時な、あれこれと苦労が多かつたんだが。そんな心さびしい中、偶然この店を見つけたんだ。それ以来、俺はこの店の虜になつちまつたつてわけだ」

そして彼は、グラスの空いた俺の分も含めてビールを二つ注文した。

「ありがとな」

「いいつて、いいつて。せつかく友人と再会したんだ!! こんな素敵なお日に飲まないで、いつ飲むつて言うんだ!?」

「あら、おじさん。あなたも意外とロマンチストなのね」

「おじさん!? お……俺、君とそんなに歳変わらないはずなんだけど!?」

アンダーソンと遊幽ちゃんは中々、気が合ひそうである。俺はそんな二人の掛け合いについ声を出して笑ってしまっていた。

「ああ、平和だ。

\*\*\*

「ところで……俺たちだけこんなに騒いでいいのか?」

店内に響く自分たちの声が気になつた赤城は、そつとアンダーソンへと耳打ちをした。すると、彼は声量などちつとも気にする様子はなく、普段と同じように言葉を返す。

「ああ、平気さ。どうせここは馴染みの客しか来ない。いつも同じやつの顔しか見ないからな」

「それじゃあ、商売的には上手くいかないんじやないの？」

二人の会話を聞いていた遊幽が思わず口を挟むと、アンダーソンは付け加えるように答える。

「同じ客でも、毎日来るなら話は別だろ？」

「……なるほど」

「それより、最近どうなんだ？」

二杯目のビールを飲みながら、アンダーソンは赤城たちへと顔を向けた。

「あいつはまだぶつきらぼうな態度なのか？あとマエストロとかその子供は？元気か？」  
答えづらい質問が一度に飛び、赤城はひとまず頭の中で整理をした。そして彼も二杯目のビールを口にすると、ゆっくりとアンダーソンへ返答する。

「えつと、まずはそのぶつきらぼうな奴、葵ね。あいつは大学生になつたよ。著作権騒動以降、協会のバイトをしながら一生懸命学費を稼いでいるみたいだ。マエストロ……先生は、まあ普通に元気だね。それと奏ちゃんは」  
思わず赤城は押し黙つてしまつた。次に紡ぐべき言葉がうまく整理できないようだ。  
「奏ちゃんは……その……元気でいるといいな」  
「そうか」

アンダーソンの耳にも先日の一件が耳に届いているはずだ。彼はただ小さく相槌を打つた。  
「完全に解決したわけではないと思うんだ。奴は先生が処理したつて報告を受けているから大丈夫だとは思うけど……その背後がな」

「マエストロもついてる、きっと大丈夫だ」

アンダーソンは友人を安心させるかのように満面の笑みで笑うと、豪快にグラスを煽つた。  
そして、彼は思い出したかのように赤城へと振り返る。

「そういうえば、隣の彼女は俺たちの仕事について知っているのか？」

「ああ、言つていなかつたか？」

そういうと、赤城は少しだけ身を引いてアンダーソンから彼女の顔が見えるようにした。

「遊幽ちゃんは先生の妹だよ」

平然と答える赤城に、アンダーソンは息を飲む。

「なに!? マエストロの妹!? いや、ちよつと待て、マエストロは数百歳も超えてるはずだが……!?」

「体だよ、体」

「あ……ああ、そういうことか」

一人、混乱状態に陥る友人を前に、赤城は簡潔に誤解を解いていった。そして付け加える  
ように遊幽が身を乗り出して答える。

「マエストロだろうが、先生だろうが、金色の魔女だろうが、私にとつては今も昔もただ  
の私の姉よ」

ふと、彼女の言葉に、赤城はだいぶ前の会話を思い出した。

『魔女としての記憶と習慣、能力。そして天城柴乃としての記憶と習慣、特技。どっちもこの私に宿っている。なら、私は一体誰なのかしらね』

初めて魔女と会った時、彼女が赤城に投げかけた質問。それに答えたのは遊幽だつた。『姉さんの記憶も習慣も癖も特技も全部持つてあるんでしょう?なら、ただの私の姉さんじやない。大学で博士号まで取つて異例の出世ルートに乗つていたのに、突然仕事辞めて教師の資格取つた途端、行方不明になつた馬鹿な姉さん。妹の顔を忘れたなんて言つたら、承知しませんよ?』

一まつすぐで堂々としていて……変わらないな。

赤城は静かに笑みを零すと、再びグラスに口をつけた。

「それより俺たちの話ばかりじやなくて、お前の話も聞かせてくれ。こここの奴らはどうなんだ?」

赤城の言う『こここの奴ら』とは教会のことである。アンダーソンもすぐにそれを察し、慎重な声音で語り始めた。

『協会は以前とは違い、一種の企業のように表に顔を出してきたのは知つているな?今までの連中はそれぞれで生計を立てた上での所属だつた。まあ一部の裕福な協会員からの寄付もあつたが。だが、今回の教會長、アルゼンチン生まれの男が就任して、協会は、より

世間に對して露骨的に存在を示すようになった

「だいぶ複雑になつてきたようだね」

「ああ。俺たちの目標はあくまでも現状維持だ。改革なんかじやない。だが、俺にはどうもあの男が……いや、教会事態が、均衡を守るという俺たちの目標を壊していく気がしてならない」

アンダーソンの推察に、赤城も真剣な顔で相槌を打つ。そんな彼の反応を見ると、アンダーソンは更に鋭い視線で前を見据えた。

「おそらく研究所は以前のように、大量の人員を導入して世界規模の行動をすることはできない。奴らが目標を果たすために狙いを定めるのは二カ所だけだ」

「二カ所……？」

アンダーソンは指を出して、カウンターをたたいた。

「一つはパリ、もう一つは」

彼の指は天井を指していた。

「日本。マエストロがいるところだ」

アンダーソンの言葉に、彼らは息を飲む。薄々予想はついていたのか、驚いた様子はないものの赤城はつい疑問を口にした。

「ずっと気になつていたんだが、奴らが日本を狙うのはわかるが、でも、どうしてもう一つがパリなんだ? 今の本部はアルゼンチンだろ」「ああ、そうだな。でも十五年間も本部が置かれた地だ。数々のお宝が眠つているんだよ」「宝?」

「……etc についての資料とかな」

赤城は何も言い返さず、まっすぐとアンダーソンを見据えたまま、彼の言葉の続きを待つた。

「アルゼンチンに移せばいいんじやないかって思つただろ？それができないんだ」「できぬ？」

「見つからない、俺たちでもを探し出せないんだ」

「それを奴らは探し出したいわけか。けど、おかしくないか？研究所の連中は組織ではなはずだ。同じ所に狙いを定めて一緒に行動するとは考えにくいくと思うんだけど」

赤城の質問に対し、アンダーソンは呆れたような表情でため息をついた。

「奴らの本当の目的なんて誰も知らない。いや、俺たちには分かり得ないさ。同じ方向まで一緒に行って、途中で目的に相違が出たら、まるで分かれ道を進むかのように個人の道を行く。そういう奴らだ。まあ議会だか何だか知らないが、一応形だけでも奴らを束ねている人間がいるみたいだがな。本当に形だけだろ」

赤城も遊幽も黙つてグラスを見つめたまま、静かに彼の意見に聞き入つていた。そんな二人の様子を見て、アンダーソンは気を取り直すように赤城の背中を勢いよく叩く。

「いってえ」

「单なる俺の考え方だ!! そんな深刻に捉えないでくれ。そもそも etc についての資料自体、存在するかどうかともわからん代物だ」

背中を抑える赤城に対し、アンダーソンは店内に響き渡るような大声で彼を励ました。そしてもう一杯注文をしようとしたところで、アンダーソンの手が止まつた。

ふと、彼は自身の腕時計を確認した。現在の時刻は午後七時三十分。

すると、急にアンダーソンは身なりを整え始めた。

「おい、バーテンダー。マンハッタンを二つ頼む」

カウンター越しにちらりと彼へ視線を返すと、バーテンダーは慣れた手つきでグラスを用意し始めた。まるで赤城たちが消えてしまつたかのように、アンダーソンは一人そわそわと人を待つてゐる仕草を始める。赤城も遊幽も不思議に思いながら、しばらく彼の行動を見つめていると、

一ちりん

入口に掛けられた鈴が小さく音を鳴らした。

一あ。

店内に入ってきたのは一人の女だつた。綺麗なブロンドのロングヘアに茶色のコート、赤いハイヒールが物静かで上品な女性という印象である。

一写真に写つていた女性だ。

口には出さないものの、赤城には一目で彼女がアンダーソンの待ち人なのだとわかつた。

「綺麗な人……」

隣に座つてゐる遊幽も思わず感嘆を述べてしまふ程、彼女はどこからどう見ても美人だつた。

「あ、こんばんは。よく会いますね」  
まるで偶然会つたかのように、アンダーソンは彼女に近づいた。対する彼女もにつこりと笑いながら、彼の隣へと腰かけた。

「こんばんは。アンダーソンさん。今日もお元気そうですね」

彼女が席に着くや否や、バー・テンダーはとても自然な動きでマンハッタンを二人の前に置いた。

「……本当にいたのか」

「似合わないわね。一種の美女と野獸みたい」

「言われてみれば、そんな風に見えなくもない」

静かな雰囲気で飲み始める二人を横目に、赤城と遊幽は小声で自身の感想を述べ合う。しかし、隣に座るアンダーソンの耳には確実に聞こえていた。若干の戸惑いを顔に浮かべつつも、彼は改めて姿勢を正すと女の方へと向き直つた。

「えつと……今日は私にとつてとても素晴らしい日なんです。実は昔の友人が訪ねてきてくれて」

「あら! それは本当に素晴らしい日ですね!!」

嬉しそうな笑顔を浮かべる彼女に動搖しながら、アンダーソンは隣に座つていた彼らを紹

介し始めた。

「男の方が赤城周で、この間も話した私の友人です。それと、彼の隣に座っている女性は彼のガールフレンドです」

「こんばんは」

上品な仕草で挨拶をする女性に、思わず赤城も遊幽も慌てた様子で挨拶を返した。そんな彼らが面白かったのか、彼女は小さく笑みを零すと、静かにマンハッタンを口にした。遊幽の時とは違つた美しさ。まるで映画や童話に出てくるような、次元の異なる上品さがそこには存在していた。

「あの……」

アンダーソンが再び、頬を搔きながら彼女へと声を掛けた。

「はい」

「いや、その。今日は私の友達をぜひあなたに紹介したかつたんです」

「それは光榮なことですね」

「は、はい。今日はとても貴重な日です」

「でも、そんな大事な日に私がここにいてもいいんですか？」

「も、もちろんです!! 大丈夫です!!」

先ほどまでの彼女の笑顔が、突然申し訳なさそうな表情になつた途端、アンダーソンはいきなり顔を上げ、大声で彼女へと振り返つた。

「……ずっと思つてたけど、あの人馬鹿ね」

「俺はまっすぐでいいと思うよ」

くすくすと隣で囁き合う赤城たち。それでも赤城は、女性に対してもう一つ接していいかわからない友人を見るのは楽しかった。馬鹿にしているわけではなく、それは本当に、純粹に、友人が幸せそうに見えたからだ。景気の良い音を立てて、幹杯を交わした後、女は思い出したかのように赤城たちへと向き直る。

「ごめんなさい、自己紹介を忘れていたわ。ルイス・マクドゥーガルです。よろしくお願ひします」

アンダーソンの言葉によると、初めて彼女に会ったのは六ヶ月前のことだった。彼自身、三年前からこの店には通い詰めていたが、ある時彼女を見かけてから、アンダーソンはわざわざ彼女と同じ時間帯に飲むようになつたという。その後、彼らはどちらも一人で飲みに来る客だつたため、すぐに打ち解けたのだ。幸せそうな空気を醸し出す彼らに、赤城は妙な居心地の悪さを感じ、離れた席に移動しそうとしたが、アンダーソンの逞しい手が赤城の腕を掴んでいた。

「どこ行くんだ?」

「あ……いや、なんか俺たち邪魔かなと思つて」「何言つてんだ、俺が招待したのに邪魔なんて思うわけがないだろ」

ルイスには聞こえないくらいの小声での会話。彼の気遣いに、赤城は再び自身の席へと深く腰掛けたのだった。すると、今度は赤城の服の裾を何かが引っ張った。

「どうした？」

不思議に思つて顔を上げると、彼の隣に座る遊幽は気まずそうに顔を伏せてゐる。

「なんか……私たち招かれざる客になつちやつたんじやない？」

どうやら彼女も赤城と同じ気持ちだつたらしい。数分のズレがある辺り、やはり赤城の方

が空気は読むのが得意なようだ。

赤城は遊幽を安心させるように優しい笑みを浮かべると、

「大丈夫だよ」というか、むしろアンタ一人は俺たちに居てほしいんだと

一〇二

「俺たちは俺たちなりに楽しもう。お金も充分あるし」

すると彼女は、少しきまりが悪そうな表情をすると、気を取り直したかのようにグラスを

注文した

マテイリ二た

……何でそんなに酒に詳しいんだ？

乙女の嗜みよ

氣取った様子でケニアを傾ける遊幽

「まあ、知ってるカケルは最初のやつ（）わけなんだけど

あざさりと本音を告げてしまふ。彼女は赤城は小さく笑みを零す

一遊幽ちやんにそんな酒は似合わないもんね

「……どういう意味？」

「いや、何でもない」

思わず地雷を踏んでしまった赤城は、何事もなかつたかのようにビールを呷つた。隣には不機嫌な恋人。

反対側には現在進行形で恋に奮闘する友人。

行き場のない彼の視線は、ただ呆然と前を見ていたのだつた。

——この後は予約しておいたホテルに戻つて、仕事は明日からだな。

ぼうつと今後の予定を考えていると、ふと、隣の会話が赤城の耳に入つてきた。

「あの……音楽とか、好きですか？」

——ありきたりな質問だな。

「はい。大好きです」

——それでも答えてくれるのか。良い人だな。

「年に似合わないですけど、ロックンロールとか、好きで」

「あら、私も好きです。年に似合わないなんて言わないのでください。音楽に年は関係ない

ですよ」  
ぎこちない会話でも、ルイスは楽しそうに笑っている。

「まるで教科書じみている。

本当によく出来た女性のようだ。

一作為的にも思える。

二人の会話は上手く発展することなく、そこで終わってしまっていた。

「……俺も混ぜてもらつていいかな？」

赤城は友人のヘルプを察知し、二人の対話に割り込んでいった。いや、彼自身、隣の彼女からの視線に耐えられなかつたのかもしれない。

「周、遠慮しないでいいぞ。好きなもの頼んでくれ」

アンダーソンの顔からは感謝してもしきれないと顔に出ていた。どうやら彼の応援をアンダーソンは待ち望んでいたようだ。

「じゃあ遠慮なく……どれにしようかな」

赤城がメニュー表を眺めている横で、遊幽がことりとグラスを置いた。どことなく彼女が飲んでいるものがどんな味なのか興味が沸いた赤城は、「すみません、マティーニを一つ」

しばらくして、赤城の前にグラスが置かれた。水のように透明な液体の底にはオリーブが一つ。

バーテンダーの力量が試されるというカクテルの中の王様、マティニー。

「その様子だと、マティニーは初めてか？」

「ああ」

初めてのお酒に高まる緊張感。赤城はゆっくりとグラスを手にした。そして一口。

「味がない」

静かに揺れる水面を見ながら、赤城はぽつりと感想を漏らした。

「ははは!! 周にはまだ早かつたか!!」

赤城以外の三人が微笑ましそうに笑う。不機嫌そうな顔で二口目を含み、彼はグラスを置いた。

「遊幽ちゃんはこんな酒を飲んでいたのか。

\*\*\*

「ところでルイスさん、何の仕事をしているんですか?」

赤城は場を取り直すように、基本的な質問から入ることにした。

「ああ、彼女は近くの図書館で司書をしているんだ」

ルイスに訊ねたはずの質問を、何故かアンダーソンが誇らしげに答えた。若干、顔を引きつらせた赤城だが、

「へえ……司書さんなんだ」

遊幽の素直な感嘆に、彼も会話に集中した。

「すごい似合いそうな職業ですね」

「そうですか？ありがとうございます。でもそんな大それたものじゃないですよ。アンダーソンさんが大きな職場で大変そうですね」

「い、いえ、そんな……」

上品そうな笑みでアンダーソンに顔を向けるルイス。一方の彼は、顔を真っ赤にして頬を搔いていた。

「また大きな仕事が舞い込んだらしいですね」

「いや、そこまで大変な件でもないんで大丈夫ですよ。ただ古文書を調べるだけですから」

「……そうですか。それなら良かつたです」

安心した様子を見せた彼女は、ふと、時計に目をやつた。

「あら、もうこんな時間。ごめんなさい、私そろそろ帰らないと」

「あ、じやあ外でタクシー拾いますよ」

帰り支度を始めたルイスに付き添う形で、アンダーソンもコートに腕を通した。

「じやあ、先に外に出ているぞ」

「では、お先に失礼します。今日はお話しでてきて本当に嬉しかったです」

赤城たちに向かつて小さくお辞儀をすると、彼女は店主にお会計をお願いした。二人はそれぞれ別々の小切手にサインをする。

そして、出口に向かう二人の背を見送ると、赤城は不思議そうに彼女の残していく小切手を眺めた。

「[Luise McDougall] ……」んなスペリングなのか」

赤城たちがグラスに残つた酒を飲みきつてから外に出ると、既にルイスはいなかつた。壁に背を預けて遠くを見つめるアンダーソンただ一人。おそらく彼女はそつち方面に帰つたのだろう。

「写真のイメージ通りだつた」

赤城の率直な感想にアンダーソンは笑つた。

「今まで会つた中で一番綺麗な女性だと思う」

「へえ……そう？」

「あ、いや……その」

遊幽の鋭い視線にたじろぐ赤城。そんな彼らを静かに見守つていたアンダーソンは、しばらくしてやつと話を切り出した。

「それじゃあ、今日はこれでお開きにするか。仕事は明日からだな。内容も明日説明してやる」

「ああ。そうだな。じゃあ明日」

「お前ら、宿の場所はわかるのか？」

「ここから近いところだよ」

「そうか。じゃあ気をつけて帰れよ」

アンダーソンの大きな背中を見送り、二人は帰路についた。

「ねえ、周ちゃん、ホテルはどんな所なの？」

アルコールのせいもあり、少し火照った顔の遊幽が赤城へと訊ねた。旅行の醍醐味の一つでもあるホテル。彼女もそれなりに期待しているのだろう。

「着けばわかるよ」

「それはそうだけど。綺麗なところだといいな」

「……先生が高い所とつてくれたらしいから、綺麗だとは思うけど」

「本当に!?」

嬉しそうに顔を輝かせる遊幽とは正反対に、赤城はどこか不安気な表情を浮かべていた。

\*\*\*

堅実強固な入口、深紅のカーペット、豪華な特大シャンデリア。ここが城だと言われたら、百人中百人が頷くであろう、そんなホテルだった。あまりにも場違いな雰囲気に、赤城は思わず入口で立ち尽くしてしまった。

一方の遊幽は、そんな彼の心情を知つてか知らずか、まるでお城の観光をしているかのように感嘆の声を上げて中に入していく。

「わあ、すごいね!! 私こんなホテル初めて来たよ、すごい豪華!!」

「う、うん。俺も初めてだよ」

さつさとチエツクインを済ませて部屋で落ち着こう、そう思つて彼は足早にカウンターへと向かつた。

「しかし、ロビーが豪華なら部屋も豪華。それは当たり前だつた。いや、赤城が落ち着かないのはもう一点。彼らが案内された部屋にはベッドが一つしかなかつたのだ。  
「……確かにこつちの方が割安なのはわかるけど。先生は心配じやないのか?」

水音が聞こえる浴室にちらりと視線を投げると、赤城はいそいそと洗面道具を準備した。

「ところでさ、周ちゃん」

浴室からの呼び掛けに一瞬びくりとした赤城だが、先にシャワーを浴びている彼女はそんな様子を知りもせぬ続ける。

「私たち、いつまでここに滞在するの?」

当然といえば当然の質問だが、赤城も何泊かは知らされていなかつた。そもそも突然の海外出張に、そこまで回す気がなかつたのだ。

「俺も聞いてないけど……まあ、仕事が終わるまでじやないかな」

「……それはつまり、仕事が終わるまで家に帰れないってことね。ブラツクすぎる」

「一応、良待遇なんだからグレーだよ」

ははは、と乾いた笑い声を洩らす赤城に遊幽は一呼吸置いて再び声を掛ける。

「そういえば、さつきの女人の人さ」

「ルイス・マクドゥーガルさん?」

「うん」

「あの人気がどうかしたか？」

「いや、ううん。別に」

彼女にしては何とも煮え切らない返答だった。

「何か気になるのか？」

「……綺麗な人だつたね」

「うん、俺もそう思うよ」

「でも、なんか」、完璧すぎない？」

彼女の疑問に赤城は無言で返した。それを肯定と捉えたのか、「なんか、映画に出てくるような人だつたから……驚いて」

「俺も同じこと思った」

「やつぱり？」

「うん」

互いに返す言葉が見つからず、浴室の水音だけが響く室内。ふと、赤城はアンダーソンの顔を思い浮かべた。恋に溺れて周りが見えていない。目がハートになつていたと言つても過言ではない。しかし、彼はアンダーソンを否定したいわけでも、ルイスを否定したいわけでもなかつた。

ただただ友人の幸せを願つていいだけなのだ。

「周ちゃん、私出たから次入つていいよー」

突然、浴室の扉が開いた。

「な……ちやんと服着てくれ……」

今更どうしたの?という顔で髪を拭きあげる遊幽。彼女の身体はバスタオル一枚で覆われているだけだった。そして、赤城が見ているかどうかも構わず平然とした顔で下着に手を伸ばす。

結局、白旗を上げたのは赤城だった。彼は逃げるよう浴室内へと移動するが、

「なんと……!?」

浴室内には洗いたてのシャンプーの匂いが充満していた。

「……いかん、いかん」

込み上げてくる妙な感情も、まるごと洗い流すかのように、彼はそそくさと服を脱ぎ始めた。

暖かいお湯が身体を包み込む。それだけで赤城の身体は、やつと自身の疲労を認識した。狭い機内での長時間フライト。いくら寝れたとしても、満足な睡眠には至らなかつたのだ。

一きつと遊幽ちやんも疲れているだろうな。

しかし。赤城がシャワーを終え、浴室を出ると、

「……あれ?」

とつぶにベッドの中で寝息を立てているだろうと予想していた彼女は、今、赤城の前に立ちふさがるように立っていた。

「えつと……その格好は?」

「勝負下着」  
「なるほど」

「全然動搖しないのね」

もうこのような状況には慣れているのか、赤城は一瞬驚いたもののすぐにいつもの顔に戻つてた。そんな態度が気に入らなかつたのだろう。遊幽は風呂上がりで完全に油断していた彼の腕を引っ張つた。

「うわ」

不意打ち。重力に逆らうこともできず、赤城の身体は仰向けのままベッドに倒れこんだ。そして、押さえつけるように遊幽が彼の上に跨る。

「何その顔。まさか同じベッドで寝るのに、何も起こらないと思つた?」

「そういえば勝負下着だつたね」

「そう、勝負下着」

徐々に近づく彼女の身体は、以前のものよりも成長していた。そんなことを頭の隅で思ひながら、赤城は身体を起こそうとするが、「……一緒に寝るのも久しぶりなんだから、いいでしょ?」

遊幽は甘え声と共に、男の胸に顔を沈めた。

「起き上がりれない」

「当たり前でしょ。押し倒してんだから。私が何のためにこんな格好していると思つてるの?」

互いに、触れ合う肌の温もりは、先ほどのシャワーのものよりも身に染みて感じていた。

いざ男女の夜が始まるという時、

「あははは、まさか遊幽ちゃんに押し倒されるとは思つてなかつた」

場違いな笑い声が部屋に響いた。瞬間、遊幽の顔は女の顔から真顔へと戻る。

「何がおかしいの」

「ああ、いや、ごめん」

唇が触れ合う距離で見つめ合う二人だが、ふと彼女は視線を落とした。

「……私とするのは嫌?」

彼女の声には挑発も誘いもない、純粹に悲しい色が含まれていた。

「そんなことない。嫌じやない」

「そう」

そしてその声と共に、彼女の笑顔は少しづつ変わっていく。それはまるで、獲物を捉えた

かのような顔。

「今夜は寝かせてあげない」

「……それは男の台詞じやないか」

男の言葉を最後に、彼らの唇は重なる。長い夜が始まる合図だった。

\*\*\*

「よつ、周。こんな豪華なところに泊りやがつて羨ましいな。昨日はよく疲れたか?」

翌日、アンダーソンは陽気な笑顔で友人を迎えていた。

「あ…ああ」

深い隈の出来た顔で返事をする友人に對し、

「あら、アンダーソンさん。良い朝ですね」

キラキラと輝く笑顔の彼女。とても生氣があふれていた。対照的過ぎる二人を見て、アン

ダーソンはそつと赤城に訊ねる。

「な、何かあつたのか？」

「友よ、女性は本当に怖い生き物だ……」

力なく答える彼を見て、アンダーソンはすぐにそれを察してしまった。そして何も言わず  
に彼は赤城の肩に手を置く。

\*\*\*

朝食を終えた彼らは、アンダーソンの運転で郊外へと向かつた。三十分程度で辿りついたそこには、中世の面影を残したかなり古い建物が一つ。

「素敵……アンダーソンさん、こんなところで働いているんですか？」

「ああ、良いところだろ。俺も気に入っているんだ」

先日まではここが本部だつたんだ、と小さくアンダーソンは続ける。その横顔はどこか愁にかられていた。

「入るぞ。まずは事務室に案内する」

三階ほどの高さのある長い階段を登り、彼らは建物の隅にある小さな入口から中へと入った。

\*\*\*

「表向きは古文書研究と建設業ね……」

事務室に入り、まず目に入つたのが机の上に散らばつた資料だ。赤城は数枚を手に取ると、呆れたような顔でため息を漏らした。

「建設業の方はあながち間違つてはないぞ。本部を建てたのも俺たち自身だからな。古文書も、まあ間違つてなくはないが……」

アンダーソンがなんとか弁護しようとするが、どうも歯切れが悪い。

「それで、俺たちの仕事内容は何なんだ?」

赤城の質問にアンダーソンは無言で、引き出しから封筒を取り出した。

「これは?」

「いいから開けてみろ」

彼は隣にいる遊幽と一度顔を見合わせ、ゆっくりと紐を解いていった。中に入つていった書類を丁寧に読み進めていく。特に目新しいことは書いておらず、現在の状況や今後の見通し、この程度の内容だった。しかし、あるページで赤城の顔つきが変わる。

「そうか、だからフランスまで送ったのか」

一人、納得気な表情に至る赤城。その言葉を聞いた遊幽も、彼の手元から書類を奪うと声

に出して読み始めた。

「欧洲地域で謎の神隠し事件発生。奇跡的にも発見された人間は、自身の身体の一部を認識できず、何度も『無い、無い』と言いながら苦痛を訴え、ひどいケースではショック死に至る……これって」

「ああ、普通では有り得ないね」

不安気な表情を浮かべる彼女に対し、赤城も頷く。そしてアンダーソンへと顔を戻した。  
「おそらく空間の魔法を利用した奴らの実験である可能性が高い。仮に違ったとしても、

こういう事件はこちらで預かる内容だ」

「……どうして研究所の犯行だと思われてるんだ？ 協会内部の極端な思想を持つてゐる奴らの実験かもしれないだろ？ それに空間の魔法じやなくても、文章を利用した強力な催眠の可能性もある」

「まあ、な」

赤城の疑問に肯定も否定もできないのだろう、アンダーソンは腕を組んだまま正面を向いていた。彼も現状では何とも言えないのだと判断した赤城は、

「要するに、事件の一部始終を見守る人間が必要なのか」

「そうだ、お前の能力なら数日は潜伏することが可能だろ？」

赤城の空間創造能力。確かにこれは潜伏任務に向いている。以前は外界の認知は不可能だったが、今では音も視界も捉える事が可能になつてゐる。しかし、それに伴い消費する体力も増えていた。

「はあ……また厄介な仕事だな」

「わかりやすくていいじゃない。要は犯人を捕まえればいいんでしょ？」

後に控える疲労を思い、落胆する赤城に対し、遊幽はすつきりとした顔で言葉をまとめる。

「つまりは、そういうことだな。周、次のページ見てくれ

「ん？ ああ」

アンダーソンに促され、赤城は再びページをめくつた。

「これ……」

「今まで行方不明になつた人間は全て協会の関係者だ。お偉いさんから、末端のやつまで。

そして被害者たちの特徴は、

「古文書を扱う人間、か」

一呼吸置いた彼の代わりを赤城が続ける。

「なるほど、だから研究所の犯行だと疑つてゐるわけか

「ああ」

「……ちなみに協会内の権力争いとかの線は？」

アンダーソンは静かに首を振る。

「その問題は既に終わつた。そこまで対立もしていなかつたし、そもそも本部が移つた今、  
欧洲で事件を起こす理由がわからない」  
それもそうか、と納得する赤城。一方のアンダーソンは、説明を終えるとじつと窓の外を  
眺めていた。そして、淡々とした口調でぽつりと漏らす。

「古文書の研究者だけじゃなく収集する人間にも目を向けられたら、その内俺も狙われる  
んだろうな」

そんな友人の様子に目を向けることなく、赤城は思案にふける。

「何で古文書を扱う人間なんだ……？」

ふと、彼は先日の会話を思い出す。そして確かな結論に至つた。

「etc か」

赤城の呟きを、アンダーソンも静かに肯定する。

「ああ、奴らはetc の古文書を狙つている。奴らはそれが存在していると信じているんだ」

\*\*\*

赤城周の能力【空間創造】、これを使えば潜伏など容易いものだ。空間を生成し、その中でじつと外を見てさえいればいい。もちろん外部からは見えないようになっているので、存在が露呈することもない。そして、空間の内部も自身で大きさから湿度に至るまで設定できる。

使い勝手の良さそうな能力だと思うかもしれないが、彼自身はこの能力は役立たずだと思っている。野宿をする際のテント代わりになる位にしか思い浮かばない。それでも空間内部は天候の影響を受けてしまい、完全なテント代わりとも言えないだろう。

とにかく、赤城周はフランスに来てようやく仕事を開始した。事件が起きるのは週に一度。先週の事件から今日がちょうど一週間目。事が起きるのは今日しかないのだ。

彼の仕事は午後九時から夜中の三時までの間、見晴らしの良い建物の屋根の上に陣取り、眼下の入口を見張る。そこはアンダーソンを初め、多くの協会の役員が出入りするところだ。今回の事件のターゲットは古文書を扱う一般人が殆どである。魔法を知っている者もいれば、魔法など関係なしに美的価値、文学的価値を求める本当に普通の一般人もいる。彼らを守るために—というのが今回、赤城を動かす主な理由だろう。

「はあ……」

アンダーソン曰く、昼間は人通りが多く、能力を使用しての犯罪をするような連中は決まって夜に事件を起こすのが定石だという。彼の理論にはいまいち納得できず、赤城は思わずため息を零してしまった。

「どうしたの？ため息なんてついたら幸運が逃げちゃうよ」

彼の背後で、この状況に不釣り合いな明るい声がした。

「いや、何でもない」

遊幽の姿をちらりと横目で捉えると、再び彼は顔を戻した。

「遊幽ちゃん、外すごい寒いけど大丈夫？」

「大丈夫よ、私はそんな柔な身体してないもの」

「そつか……いや、でも色々と不便になるよ」

「そりやあ、不便だけど私は大丈夫。何で一緒に来ているのに別行動しなきやいけないの、

私も手伝うわよ」

本来なら、この任務は赤城一人で行うはずだった。いや、行いたかったのだ。しかし、それは彼の願いに留まってしまった。どんなに断ろうともこの有様である。

「……トイレも自由にいけないけど

「む……なんとかなるでしょ」

「ならないかも知れないよ」

ついに彼女もきまりが悪くなつたのか、必死に追い返そうとする赤城に向かつて大きな声を上げた。

「私がそばにいたら嫌なの!? 邪魔つてこと!?」

「そんなことはないよ」

「だめだ、俺の負けだ。」

赤城は心の中でそつと呟いた。そして遊幽に振り返つて再度確認をする。

「本当に不便な生活になるよ」

「平気よ!! 子供じやないんだから我慢できるわ」

「中身はまだまだ子供じやないか。」

誇らしげに胸を張る遊幽に呆れた顔を返すと、赤城は任務へと戻つた。

しかし、彼は遊幽の介入を拒んでいたが、実際彼女の能力は今回の任務で非常に効果的なものであつた。天城遊幽。金色の魔女を姉に持つ彼女は、自身に戦闘向きの魔法の素質はないと早々に理解していた。そこで彼女が選んだのは、「探索」という道だ。

魔法というものは、文章を書き、自身がその意味を理解し具現化すること。故に必要な要素は、その文章に関する「完全な理解」だ。カメラや盗聴器など、その構造・仕組みまでも理解した上で魔法を用いらなければ具現化することはできないのである。そしてこの魔法を応用すると、彼女は相手の位置を探知できることができる。追跡も可能だが、赤城と遊幽の場合は敵と交戦する戦闘スタイルは合わない。一度敵を捉えたが最後、追うか迫われるかのレースで相手を疲弊させることが目的だ。

\*\*\*

どれくらいの時間が経つたのか、赤城がふと、腕時計を見ると監視を開始してから五時間近くも経っていた。何も起こらず、ただじっと入口を見張り続けるのも辛くなつてくる頃合いだ。隣に座る彼女は先ほどからウトウトと首を上下に動かしている。

「寝ている時はこんなに可愛いのに……」

隙だらけなその姿に小さく笑みを零す赤城。そして再び双眼鏡を手に取る。  
パリで事件が起ころのは明らかだつた。本部があつたからというのも大きな要因だが、それ以上に彼らの犯行経路が東から西に動いていたからだ。ロシアを皮切りに、オーストリア、チエコ、ドイツ……ならば次はフランスだろう。

「研究所はあくまで個人主義の組織……何か変な感じがするんだけどな」「ぼんやりと考え事をしていた赤城は、突然振りを振つた。「だめだ。集中しないと」

今はそんな事を考えるより目の前の監視が最優先だ。そう思うと、赤城は先ほど以上に目を光らせて入口を見張り続けた。

「おつ」

やつと人の出入りがあつた。おそらく夜勤を終えた人達だろう。アンダーソンから渡されたリストと彼らの顔を照合するが、どうやら彼らはリストには入っていなかつた。

「このまま何も起こらないのが一番だな」

ふと、赤城は視界の隅で何かが動くのを捉えた。

—あそこは裏通りか？

パリ内部でも裏通りの人通りは結構ある。先ほどからも、ちらちらと動く影を見ていた。しかし、今のは何か奇妙な動きだつた。

赤城がもう少し様子を窺おうとした瞬間、一気に仕事を終えた人達が入口から溢れ出てきた。最悪のタイミングである。赤城は急いで、入口の方に目を移した。もちろん全員が同じ方向に帰るわけではなく、それぞれが別の方向に分かれて行く。赤城はリストに載っている古文書関係の学者を探し、彼らの様子を変わり変わりに確認していく。

—その時だつた。

「うわあああああ!!!」

赤城が注視していた所とは別の所から声が上がつた。一人の男が苦しそうな様子で地面に倒れ伏している。そして一人、また一人、同じように悲鳴を上げて倒れて行く。

「銃声は聞こえなかつた。怪我もしていない」

双眼鏡をのぞき、冷静に被害者の状態を確認していく赤城。

「遊幽ちゃん、起きて!!」

「うえつ!?な、何かあつたの!?」

言うや否や、赤城は彼女の身体を抱え、すぐさま下に向かう。勢いよく階段を駆け下りて外に出ると、三人の男が道路に倒れていた。

「大丈夫ですか!?」

赤城は遊幽を降ろし、急いで被害者に駆け寄ると、彼らは決まつて同じようなことを呟く。

「あ、足が……!!」

「助けてくれ!!お、俺の腕が!!」

見たところ外傷は一つもなく、至つて異常は見られないが、彼らは激痛を訴え続けている。書類に書かれていた通りの事件が赤城の目の前で起こっていたのだ。

「くそつ……どうすればいいんだ」

「ポンツ

「何だ!?」

赤城は思わず音のした方を振り返る。すると、先ほどまで自分たちがいた場所に黄色い炎が二つ、闇の中で揺らめいていた。

「二人いるのか……!?」

咄嗟に赤城は懐に忍ばせた拳銃に手を掛ける。仮に戦闘になつた場合、彼が応戦する手段はこれしかないのだ。頭上の人影をじつと見つめて警戒を続ける。

「周ちゃん!!」

「来ちゃやだめだ、そこにいろ!!」

遊幽が赤城の近くに行こうとした瞬間、頭上の影が動いた。その陰は彼と重なり、

「うつ……ぐ」

赤城の左腕にとてつもない激痛が訪れた。まるで骨折でもしたかのようだ。

「しまった、俺もやられたのか!?」

しかし、彼の腕には傷一つついていない。おまけに動かすこともできるようだ。赤城は激痛を堪え、右手の拳銃を構えた。

銃声が深夜の街に響く。そろりと巨大な影は身を引いた。

「遊幽ちゃん! 天丈夫!?」

赤城の怒鳴り声に驚いた彼女は、階段のところから一步も動かさずにじつとしていた。

「私は、大丈夫だけど」

「じゃあ、ここを起点に半径二十メートル以内、協会の人達を除いた他の人間の動きをチエックするんだ」

「わかった」

遊幽は彼に頷き返すと、服の中から取り出した紙を地面に張り付け手をかざした。すると、

綺麗な青い光が紙から漏れだし、

「左に一人、十メートル前方にもう一人!!」

「合計二人か……了解、警察が駆けつける前に終わらせないと」

赤城の武器は拳銃のみ。さすがに勝てる見込みはなかつた。瞬間、敵の一人が被害者たちに向かつて動き出した。赤城は咄嗟に引き金を引くが、相手はすぐに身を反らして軽々と銃弾を躱す。

「くそつ、ならもつと距離を詰めて……!!」

赤城も拳銃を構えたまま、敵に向かつて突っ込むが、

「——なつ!?

突然、赤城の後ろから何かが近づいてきた。そして彼が充分に驚く間もなく、それは【赤城周】という存在を含んだまま空間を創造した。

「ど……どういうことだ」

次に彼が目を開けた時、そこには真っ白な空間が広がっていた。赤城以外に被害者の三人、そして黒い影が立つていて。そう、それは人間の形をした黒い物体だった。

「お前は何だ」

徐々に近づく影に赤城は拳銃を構える。残弾は残り二発。ゆっくり近づいてくるそれに、赤城は慎重に照準を合わせて引き金を引いた。

衝撃と共に、先ほどの激痛が彼の腕を駆け巡る。そして、真っ白な空間に二発の銃声が響いた。弾丸は確実に黒い影を貫いていた。

しかし、影は一向に止まることなく赤城に迫っていく。

「改造人間か」

このような改造人間は初めて見たのか、赤城は動搖を隠せずにいた。

「くそつ」

じりじりと迫りくる影に、後ずさる赤城。だが銃弾を使いきつてしまつた以上、対抗する手段はもうなかつた。左腕の激痛も続いている。

「ごめん、遊幽ちゃん。これはもう無理そうかな」

苦笑いを浮かべる赤城。彼はこの場にいない恋人に謝ると、そつと目を閉じて影の到来を待つことにした。

一步、一步、静かに近づく死。

赤城周にも恐怖という感情はある。冷たい汗が頬を流れ下に落ちる、まさにその時だつた。

「減点だらけだ」

風が通り抜けるかのように、赤城の横をしわがれた男の声が過ぎて行つた。思わず、目を開けると、彼の目の前には中年の男が立つていた。ソフト帽に黒いコート、そして右手には拳銃。

「拳銃を撃つ時は消音機を忘れずに」

そう言うと、彼は赤城に向かつて拳銃を投げた。そして影に向かつて突進する。

「全くこのような改造人間……非常識にも程がある」

敵の手前で男は懐から小さな紙を取り出し、床に張り付けた。瞬間、青い光が一帯を包み、黒い影は動きを止める。

「自身の能力を使いこなしていないな、赤城周くん」

「あなたはー、ブリーゲルさん!!」

驚いた表情を返す赤城に対し、男は落ち着いた声で赤城を評価した。

「やはり潜伏能力だけでは駄目だな、その後の対処も考えねば再びこのような状況に」

「それより遊幽ちやんが!! 外にもう一人いるんです!!」

「まずは目の前の敵だ!! 君は彼女を信じられないのか!!」

話を持ち去られたせいか、普段より大きな声を上げるハンス・ブリーゲルに、赤城もつい押し黙る。そして、彼も黒い影へと目を戻した。

「あの紙の効果もそろそろ終わる。その前に君が何とかしなさい」

「何とかって言われても……」

「私が来た以上、もう解いても平氣だらう」

「解く……? そうか!!」

創造された空間。創造する能力。赤城と同じような能力なのだとしたら、彼にも敵と同じ

事ができるかもしれない。

「あははっ。動搖しちやうと、自身の能力の半分も発揮できないものなんですね」

「今回はひどい、赤点だ」

「はい」

そして、空笑いを漏らすと、赤城は能力を使用した。

「敵が空間を創造したというのなら、俺にも解けるはずだ!!

\*\*\*

それは一瞬の出来事だった。まばたき一つの後に映るのは真っ暗な世界。いや、ちらつく街灯に仄かな月明かり。ここは紛れもない、現実。事件が起きた場所であり、現在も事件が起きている場所だ。彼の前で遊幽が呆然とした姿で地面上に座り込んでいた。

「遊幽ちゃん!!」

「し、周ちやん!? それに、ハンス・ブリーゲルさん!? どうして!?」

彼女に答えることもなく、赤城は遊幽へと詰め寄った。

「もう一人はどこにいる!?」

「たつた今、消えたわ。五十メートル以上、ううん、もっと離れている」

「そうか、もう少し範囲を広げるべきだつたね」

「その分、時間がかかるわ」

ひとまず敵は退散、任務は失敗してしまつたということだ。赤城は倒れこんだ被害者たちの状態を確認し、改めて外傷はない事を確かめた。

〔etc に関する文書〕

安否を確認する赤城の背後で、静かに男が口を開いた。

「私もその噂は聞いている。魔法の全てを記した本。私も君と同じように任務でここにきた。アンダーソン・カイルは頼りにならないのでね、私が君のサポート役ということだ」「つまりずっと見ていたわけですね」

「ああ」

「なら、もつと早く助けてもらいたかったです」

拗ねるように頬を膨らませる赤城に、ハンスは淡々と返す。

「君がどう対処するかを確かめたかった。まあ残念な結果に終わつたが」

「もう……」

罰の悪そうな顔をする赤城を横目に、ハンスは都市の方を見返した。

「ここは襲撃を受けるにも襲撃をするにもいい場所だな」

いつもの癖でコートから煙草を取り出した彼は、躊躇うように再びそれを戻した。どうやら禁煙を心がけているらしい。

「ところで、アンダーソン・カイルはどこにいる。君たちと一緒にではなかつたのか」「いえ、もしかしたらまだ協会内に……」

「電話してくれ」

やや苛立たしげな顔で促すハンスに赤城も訝しげに目を細める。事実、彼の胸にも何か嫌な感じがしていた。

「もしかしたら、別の所で事件に巻き込まれていてるかもしれない。」

僅かな不安を抱え、赤城は携帯を取り出す。数回のコールの後、アンダーソンは電話に出た。

『「もしもし』

『「もしもし?!アンダーソン!?!』

『「おお、周か。どうだ無事に仕事は終わつたか』

『「いや、それよりアンダーソン!!今どこにいるんだ!!』

『「ん?俺か?俺は……二十分钟前にデートを終えて家に帰る途中だが』

『「……は?』

『「それがどうした?何か用か?』

『「いやいい。もう切る』

『「おいおい、どうしたんだよ。周!!』

ー プツツ

何事もなかつたかのように赤城は携帯をしまつた。

『「無事でよかつたな』

『「全くですね、こつちは死に物狂いで戦つていたのに呑気にデートしてるとは思いませんでした』

『「……とにかく彼にも危険が迫つてるのは間違いない。当分は一緒に行動した方が安全

だ

「そうですね。ところで、被害者たちはどうなるんですか」

ハンスは彼らを一瞥すると、赤城の問いに淡々と答えた。

「彼らは協会が面倒を見てくれる。幸い、早期に治療ができる。命に別条はないだろう」

「よかつた」

安堵の息を漏らす赤城に、今度はハンスが問いかけた。

「空間の能力は今のところ君が最も詳しいはずだ。全盛期に比べて劣っているとはいっても、専門家として彼らの状態をどう見る?」

しばらくの沈黙の後。じつと前を見据えたまま、赤城は答えた。

「関連はなさそうです」

「ほう」

「以前のように空間を切断した能力、【体分け】の能力だと仮定した場合、きっとその空間を維持することはできません」

赤城の見解にハンスは一人、その能力を思い返す。

【体分け】。空間能力を持つ者が使う能力。体と体の間の空間、存在を分ける。つまり当人に自身の身体部位の認識を失くすということ。「元々それは存在していなかつた」と。しかし今回の事件は認識を失くすのではなく、確かにそれは身体についており、存在しているという認識もあつた。ということは――、

「やはり催眠か」

「そのようですね」

「なるほど」

会話を終えると、ハンスは協会の方に足を向けた。

「これから忙しくなる。二人ともついて来なさい」

「え、彼らは放置しといていいんですか!?」

「もう少ししたら協会員が来る」

そう言い残し、ハンスは振り返ることなく足を進める。仕方なく、赤城と遊幽も彼の背中について行くこととした。

「そういえば、周ちゃん。体大丈夫?」

ハンスの後を遅れるようについて行く中、唐突に遊幽が赤城の顔色を窺つた。

「うーん、平気かつて言われたら平気じやないかな。久しぶりに戦闘なんてしたから勘が鈍つてたみたいだ。昔みたいにはいかないね」

「大丈夫、私がいるじゃない。足りないところはサポートする」

「……そうだね」

隣から涼しげな笑みを貰う赤城。釣られて彼もいつもの笑顔を取り戻した。自分にはこの

ような憂鬱そうな表情は似合わないと。

「ありがとう、遊幽ちゃん」

「なつ……!!」

「ん？ 遊幽ちゃん？」

瞬間、まるで火傷をしたかのように顔を赤らめる少女に、何が起こったのか不思議そうに見つめる青年。そして、

「君たち、ちゃんと後ろをついてきなさい」

「ほ、ほら！！急がないと！！あの人、速足だからもうあんな先にまで行つてるじゃん！！」

「あちよつ……遊幽ちゃん、引っ張らないで！！」

深夜に聞こえる男の掛け声。走る彼女に腕を取られ、赤城は協会の中へと入つていった。

＊＊＊

「えつと……本当に申し訳なかつた。彼女に呼ばれて。こんなことは初めてだつたから……つい」

青年、赤城周は普段の頬笑みはどこに行つたのか、冷ややかな目でアンダーソン・カイルを見下ろしていた。彼がこのような態度を示すことはめつたになく、おかげでアンダーソンの顔色は非常に悪い。

夜明けの執務室。部屋の様子は昼間と変わらず、ひどい散らかり様であつた。床に落ちた書類を整理しながら、ハンス・ブリーゲルと天城遊幽は、何も言わずに彼らの対話に耳を傾けている。

「こつちが徹夜で働いている間にデートしているとは微塵も思わなかつたよ」「悪かつた、次からはしつかりする」

「まあ……確かにあれだけの美人なら仕方ない事もないけど」

瞬間、殺氣を感じた赤城はすぐに咳払いをして誤魔化した。

「とにかく。俺はどんな目につくとも構わない。けど、こっちには遊幽ちゃんがいる。もし危険な目にあつたら、どうするんだ」

問い合わせるような赤城の物言いに、アンダーソンは拳をきつく握りしめて俯いている。そんな彼を見て、赤城も失望したかのようにため息を零した。同僚たちの信頼も厚く、誰よりも誠実な人間だと思っていた彼が、今回このような行動をするとは思つてもいなかつたからだ。

「俺がどうかしていた。本当にすまない」

「……もういいよ。謝ったところで何も変わらない。それより今後のこと話を合おう」

「ああ、そうだな」

すると、アンダーソンの目の色が変わった。

「周、支部内の人間は何人やられたんだ」

「三人……俺のミスだ」

今度は赤城が顔を伏せる。揃つて申し訳なさそうな顔をする二人。

——俺がしつかりサポート役として仕事をしていたのなら。

悔しげに唇を噛みしめたアンダーソンは、更に赤城に問いかける。  
「襲撃を受けたその三人は本当に魔法使いだったのか？」

「ああ」

赤城はアンダーソンに領き返すと、後ろで控えていたハンスに振り返った。解説をお願いすると言う意味だろう。彼の意を汲んだハンスも、迷うことなく口を開いた。重厚で荒い声が室内に響き渡る。

「表向きは完全に擬装し、協会内部でさえ魔法使いとして知られていない連中だ」

「彼らの目的はなんですか」  
アンダーソンの質問に、ハンスは逆に問い合わせた。

「古文書を輸入し解読するために一番重要なことは何だと思います」  
訝しげな表情の後、アンダーソンは何てことないよう答える。

「それは、その古文書の言語を知つてることでは……あ」

「ああ、なるほど」

「そういうことか」

アンダーソンが気付くのと同時に、赤城と遊幽も納得の声を上げた。

「魔法使いの根本は言語学者だ。古文書を収集して解読するには、君のように外部から活動する人間も必要だが、このように擬装行為をして収集を行う人間も必要だということだ」「どういうこと? 別に正体なんて隠さなくていいんじゃない?」  
首を傾げる遊幽を彼は視線だけを彼女に向ける。

「迂闊に多くの人の目に触れてはならない内容があるからだ。彼らはそれを選別している」  
静かに答えるハンスに遊幽は思わず息を飲んだ。一方の赤城は表情を崩すことなく、じつくりと頭の中で考えを巡らせる。

「アンダーソン、etcの文書は協会内部にもないんじゃないのか？」

「ああ、それは噂に過ぎないはずの代物だ」

「ふむ……でもそれが本当に噂なら、何でそんなに必死なんだ？」

「やあな」

すると、今度は遊幽が何てことないような様子で意見を述べた。  
「ねえ、もしかして襲撃を受けた人たちって、みんな協会内で etc の古文書を探すために  
擬装していた人達なんじやないの？だから研究所もその人たちを襲って、何か情報を抜き  
出そうとしていたのかよ」

「一都合がよすぎる」

彼女の意見に對し、赤城は無意識の内に呟いていた。

「安易に否定をするな。視野が狭くなるぞ。辻褄が合いすぎる方が、逆に真実の可能性もある。むしろ、複雑なものほど虚構の可能性もあるものだ」  
「ブリーゲルさん」

赤城は氣を取り直して、アンダーソンへと向き直った。

「そろそろ教えてくれ。協会の本当の依頼は何だ」  
『協会内の職員が襲撃を受けている。これを処理してほしい』  
「なるほど……でも、何か。何か変な感じが」  
「変な感じ？」

首を傾げる赤城に、アンダーソンは訝しげな表情を返す。  
「いや、何でもない。それより、また襲撃が起ころる確率は？」

「ないとは言えない。今回のように、擬装した魔法使いがまだいる可能性もあるし、彼らがまた狙われるかもしれない」

「支部内の反応は?」

「そんなに大きな動搖はないよ。事件が起こつた事すら知らない連中もいるからね」

「そうか」

やつと張り詰めていた肩を落とし、赤城は椅子に背中を預けた。アンダーソンも腕組みを解き、強張っていた顔を戻す。

「そうだ、アンダーソン。今日も夜勤か?」

「ああ、今月は古文書関連の人間はみんな夜勤だ」

「でも次々と偽装した人たちが襲われてるので、その人たちも夜勤するのかな?」

遊幽の純粹な疑問に、赤城は穏やかな笑みを向けた。

「突然夜勤しなくなつたら、それこそ自分は擬装している魔法使いですって周囲にバラすようなものだよ」

「む……確かに」

そして再び彼女が何かを言う前に、赤城は告げる。

「俺は今日も潜入捜査するけど、遊幽ちゃんはここで大人しくしていてね。何が起ころかわからぬいし」

「やだ、私も手伝う」

「駄目」

「何でよ!!」

「遊幽ちゃんが心配なんだよ。頼むから、ここでじつとしてて」  
いつものように赤城は微笑む。が、その笑顔は「大人しくしていろ」と言つてるようにも  
見える。そんな彼の顔を見ると、つい彼女も自分が情けなく思えてきた。

「……わかった。その代わり何かあつたら、すぐに連絡して。ううん、もし遅かつたら勝  
手に外に飛び出していくから」

「うん。ありがとう、遊幽ちゃん」

素直に感謝まで述べられ、彼女は気恥かしげにそっぽを向いた。

「……早く戻つて来てね」

「もちろん。仕事が終わつたらすぐに帰るよ」

彼の言葉を聞き終えると、遊幽は近くのソファーに座つた。

「ホテルにはいつ戻れるの？」

「事件がおわつたらかな」

「……いつ終わるの」

「いつか終わるよ」

「……せつかくお金払つているのに、勿体ないね。こんな汚い部屋で寝泊まりしなきやい  
けないなんて」

彼女の言葉に、思わずアンダーソンは不満気な顔をするが、何も言わないあたり彼も重々  
自覚はあるのだろう。

「あー、疲れた」

早速遊幽はソファーの上で寛ぎ始めた。そんな彼女に構うことなく、赤城はアンダーソン

へと向き直る。

「そういえば、彼女は一体、何て言つてお前を呼びだしたんだ？」

不意打ちだつたのか、アンダーソンの顔は見る見る真っ赤に染まつていつた。そして普段の彼の声量からは考えられないほど、もごもごとした声で話しだす。

「い、いや、その。たゞ、俺の顔が……見たいって言うから。会話を、したくなつたつて」

「そうか『本当にルイスさんと上手くいつてるんだな』」

初めて見る友人の初々しい表情に、赤城も自然と笑みを零していた。アンダーソンも恥かしげに頬を搔く。

「ルイス？」

ただ一人、ハンス・ブリーゲルだけが妙な違和感を胸に抱きながら。

「それで、俺は今日何をすればいいんだ？」

「いつも通りでいいよ。退勤する時間なつたら帰つてもいいし。昨日は何も状況がわからなかつたからお前の助けが必要だつたけど、今日はブリーゲルさんもいるし大丈夫だ」  
「つまり俺は何もしなくていいのか？」

困惑した顔を浮かべるアンダーソンに、赤城は意地の悪そうな顔で彼の胸をつつく。

「今日も彼女から連絡が来るんじやないのか？」

「な、何で知つてるんだ!?」

「ただの勘だよ。ちゃんとエスコートしてやれよ?」

「お……おう」

友人に激励の言葉を告げると、赤城はソファーで寝息を立てている遊幽へと顔を向かた。  
その姿がどこか滑稽で、彼は人知れず目を細める。

「結局。どこだろうと気持ち良さそうに眠るなあ、遊幽ちゃんは」

アンダーソンは鼻歌を歌いながら、夜道を行く。自身が好意を寄せている女性、ルイス・マクドゥーガルから電話が来たからだ。初めの頃は、まさしく高嶺の花。とても遠い存在

だと思っていたが、近頃は彼女から誘いを貰える程親しい仲になつていて。しかし、昨晩は思わず失態をしてしまつた。いくら彼女が愛しくても、今後あるような行動は慎まなければいけない。今夜も出かけるかは躊躇つたが、大切な友人の激励を思い出し、アンダーソンは彼女に会うことにしてしまつた。必死で働いている彼に報いる方法。それはルイスの心を手に入れることである。そう信じて、彼は夜の街へと繰り出した。

ショーウィンドウに映る自身の姿を確認すると、彼は馴染みの店の扉に手をかけた。以前はPUBだったこの場所、今はBARだ。同じ店のはずなのに、雰囲気がまるで違うようには感じている。

時刻は午後七時半過ぎ。いつもなら小生意気な表情で彼を眺めていた店主も今日は違つた。  
「何か良い事でもあるみたいだな」  
随分と久しぶりに彼はアンダーソンへと声をかけた。

「今更何を。全部お見通しだろ」

軽い会話の後、アンダーソンはいつもの席に向かつた。

「こんばんは」

「え……」

驚いたことに、アンダーソンより先に彼女が来ていた。

「あれ……もしかして私、時間間違えました?」

思わず彼は腕時計を確認する。予定よりだいぶ早めに家を出たはずだった。

「大丈夫ですよ、アンダーソンさん。私が早く来たくて来てしまつただけです」

上品そうな笑みを浮かべるルイスに対し、アンダーソンは気恥ずかしそうに顔をそむける。

「ご友人のお二人はもう来ないんですか?」

「あ、はい。今日も夜勤で」

「夜勤……大変そうですね」

「はい」

「乾杯しましよう。マンハッタン、もう出でますよ」

彼女に言われて、アンダーソンはカウンターを見る。すると、そこには頗んだ覚えのないマンハッタンが置いてあつた。驚いた顔で店主を見つめるアンダーソンだったが、店主は彼に目をくれることなく黙々と作業を続ける。

「アンダーソンさん?」

「は、はい。乾杯しましよう」

そして彼らは揃つてグラスを傾けた。

\*\*\*

一通り酒を酌み交わした後、二人は外に出かけることにした。映画に書店にCDショップ。まるでデートそのものの様な気分をアンダーソンは味わっていた。数ヶ月前の彼には想像もできない程、とても幸せな時間だ。

「あの!!」

「はい?」

ふと、アンダーソンは無意識の内に彼女を呼びとめていた。依然として、につこりと笑いながら振り返る彼女。その顔を直視することすら出来ないほど、彼の心臓は脈打っていた。「ど、どうして。俺みたいな人といてくれるんですか?」

「俺みたいな人?」

ルイスは彼の言いたい事が上手く理解できないようで、小さく首を傾げる。

「いや、だから……ルイスさん、あなたは完璧な方です。外見も中身もすばらしい。だから、そんなあなたが何で俺なんかと」

アンダーソンが勢い余つて顔を上げると、彼女の顔は彼が思っていたよりも近くにあつた。そして彼女は静かに口を開く。

「以前、一人だつた時がありました。六か月前のことです。本当に私は一人だつた。そして、偶々通りかかつたお店で飲んでいた時、声をかけてくれたのがあなたー、アンダーソ

ンさんだつたんです。大したことない理由です。でも、人はそんな小さな出来事でも惹かれるものなのです』

『彼女は自身の手を胸の前で握り、そつと目を閉じたまま続けた。

『やつぱり、こんな理由じや納得いきませんかね』

寂しげに微笑む彼女に見惚れていたアンダーソンは、はつと我に返つた。

『い、いえ!! 充分です!!』

すると、彼女の笑顔がぱつと明るいものへと変わる。

『この縁、続くといいですね』

『はい!! あの、俺も同じです!!』

しかし、彼の鼓動はまだ収まらない。いや、徐々に速まっている。何故なら、彼にとつての大勝負はこれからだからだ。今日、いい雰囲気になれたのなら、彼はルイスにプロポーズをするつもりでいた。そして今こそが絶好のチャンスである。

『ミ、……ミス・ルイス!!』

『はい』

『あの、私はあなたを……!!』

彼女もアンダーソンの瞳を真つすぐ見つめていた。まるでこの後に続く言葉を分かつているかのように。

『ボンツ !!

瞬間、遠くの空で黄色い信号弾が二発上がった。

「敵が現れたのか!!!

しかし、彼は動く事ができなかつた。自身がどのように行動すればいいのか、わからないのだ。今ここで人生最大のチャンスを逃していいのか。頭に血が上つて、破裂しそうな気さえもしていた。

「俺はどうすれば!!

ふと、アンダーソンの脳内に彼の顔が浮かんだ。

彼は一、大切な友人はいつもの笑顔で笑つていたのだ。

「ミス・ルイス」

「はい」

アンダーソンはルイスの肩に触れ、真剣な瞳で彼女を見据える。

「私は行かなければいけない、急用ができてしましました」

「え?」

「先に帰つていてください!!後で必ず連絡します!!」

そして彼女の返事を待たずに、アンダーソンは走り出す。組織のために、いやそれ以上に

大切な友人のために。

\*\*\*

人々の往来も減り、街が暗闇に包まれる頃。

赤城は襲いかかる敵の攻撃を素早く避けた。相手は昨晩と同じ、黒い影だ。

「ブリーゲルさん、これどうしたらいいんですか？」

「ふむ。そうだな、どうしようか」

言葉とは裏腹に、ハンスの中ではもう答えが出ているようだつた。彼は敵の攻撃を避けると、その勢いを殺すことなく影の懷へと蹴りを入れた。

「まず触れる事ができるということから、あれは物体。つまり倒すことは可能だ」

言い終わるや否や、彼はナイフを投げた。影はそれを容易く避け、ハンスに向かつて拳を振り上げる。

「そして戦闘パターンは単純」

瞬間、影の動きが止まつた。見ると、ハンスが投げたナイフは地面に突き刺さり、青い光を帯びていた。

「周君、職員たちは避難したか？」

「はい、大丈夫です。あらかじめ潜伏していた甲斐がありました」

今から三時間前。赤城とハンスは、昨晚のような屋上ではなく協会近くの裏通りで網を張

つっていた。少しでも早く現場に向かえるようにするためだ。もちろんただ待ち構えるだけではなく、ハンスも策を巡らす。なるべく目立たないよう工夫した紙をいくつも地面に張り付けておいた。そして赤城の空間内で二人は外の様子を窺い、戦闘の時を待っていたのだ。

ハンスの魔法が切れ、影が動き出す。赤城は信号弾が上がった方を見上げ、拳銃を構えた。ハンスが相対している影とは別に、もう一つの影がそれを放つたに違いない。そう考えた彼は、じつと暗闇を見つめる。

「むやみに撃つな、周君。昨晩、経験したばかりだろう」

「でも、じやあどうすればいいんですか!!」

「ひとまずあれは物体一人型に違いない。触れた時に骨と筋肉の感触があつた。ならば当然、関節も存在しているはずだ」

「つまり、どうすればいいんですか!!」

「簡単だ。要するに行動不能にすればいい。私が合図を送る、そしたら君は奴の左足を撃て。私に当たるかもしれないなどという心配はしなくていい」

言い終わると同時に、ハンスは勢いよく前に出た。そして敵の前で素早く姿勢を落とした。彼は、そのまま地面に数枚の紙を張り付ける。次の瞬間、ハンスは見事な足さばきで体を反転させると、自身の拳を影のおよそ頸と思われる部分に向けて精いっぱいに振り上げた。ハンスの予想通り、またしても彼の拳には人の頸を殴つた時と同じような感触が残る。

「影のように見えるが、やはりこれはただの人間。だが、

ハンスの拳を真正面から受け取った敵は、しかし、苦しむ素振りを一切見せることなく彼に襲いかかる。一発、二発……続けざまに拳を振るう影だつたが、持ち前の瞬発力でハンスはそれを易々と躱す。

瞬間、彼を追うような形で拳を振るつていた影の手が止まつた。地面に貼つておいた紙が青く光り出す。

「今だ!!」

ハンスは、視線だけを赤城に向かた。そして、一発の銃声が路地に鳴り響く。弾は見事に影の左足を撃ちぬいていた。おかげで影の硬直時間が数秒は長くなるだろう。その間に態勢を立て直していたハンスが、影の肩に向けて重たい蹴りを入れた。そう、彼が狙つているのは骨折、もしくは脱臼させることである。

一度身を引いたハンスはナイフを手にすると、再び影に向かつて突進した。足から肩、そして腕。いずれも骨に達するほどの深さに刃を入れていく。

「すごい……」

拳銃を手にしたまま、赤城は彼の手際の良さに思わず見惚れていた。もはや立つこともできず、ただ体を震わすだけの影を背にハンスは赤城の方へと振り返る。

「改造人間の中でも特異な存在だつたな。以前の方がまだ感情を備えていて人間らしかつたが、これはもうガラクタと同じだ」

「三年前の事件以降、研究所も金銭的な余裕がないのでは?」

ハンスの呟きを冗談気味に返す赤城だつたが、彼は真剣な顔で首を縦に振つた。

「確かにそうかもしれないな。奴らも大きな痛手を食らつたはずだ」  
「は……はあ」

ゆづくり会話をすることができますということは、戦闘はもう終わったのだろうか。そう思つた赤城は、安堵の息をついて大きく体を伸ばした。

「油断するな、周君」

「あ、はい!!」

ハンスの鋭い視線を受け、思わず背筋を伸ばす赤城。そして、

「そろそろ来るぞ」

ハンスは目の前の暗闇をじっと見据える。月にかかつていていた雲が消え、先ほどよりも明快な視界が広がつた。

「不気味ですね」

「ああ」

先ほどの影は薄暗い中で蠢く黒い物体だつたが、今、彼らの目の前には月明かりの下に蠢く黒い塊ーまさしく【影そのもの】がいた。腰を下げ、再び戦闘態勢に入るハンスだつたが、ふと影の後ろから徐々に彼らへと近づく人間が現れた。

「こんばんは」

突然聞こえた生身の人間の声に、思わず赤城は身を強張らせる。一方のハンスは驚く素振りを微塵も見せず、まっすぐと男を見つめていた。

「いやいや、まさかハンス・ブリーゲルなどいう大物を前に出してくるとは。我々もつい

遊びすぎたかな」

「その声は……ロベルトだな」

「お久しぶりです。まさか私の名前を覚えていてくれるなんて思わなかつたよ、光榮だね」  
親しげな口調で語る男。月明かりに照らされたその顔は一見、物静かな男性に見えた。知的な眼鏡を掛けた学者のような彼、しかし、その目つきは狂氣を宿しているかのように尋常ではなかつた。

「今回の件は全て貴様が仕出かしたことか」

「いや、計画自体は私が立てたものではない。私は指示されただけだ。あの事件以降、急進派の勢いもなくなつて私も大人しく過ごしていたんだが、奴が突然面白そうな話を持ってきてね。調べてみると、古文書を研究する奴らに魔法使いが紛れ込んでたから、ちょっと尋ねて回つていただけさ」

楽しそうに語り出す男を睨んだまま、ハンスは静かに口を開く。

「記録によると貴様が研究していた分野は一種の生理学。この【影】は君の作品ということか」

「ああ、そうだ。これは全部私の複製品、全て私を元にしているんだ。感情も思考も一切抜き取つた、まさしく私の【影】だ」

「なるほど」

眩きと共にハンスは懐から拳銃を取り出し、迷うことなく男に向けて引き金を引いた。消音機をつけている彼の拳銃は静かに銃弾を放つーが、それは男の前に立ちふきがつた影の身体に吸い込まれていつた。

「まだ私の話は終わっていないよ。大人しく聞いてくれ。私のような一般人はそんな鉛玉を食らつたらタダじや済まないんだ」

困ったように笑う男に対し、ハンスはしぶしぶ拳銃を構えていた手を降ろし、まるで確認をするかのような口ぶりで話しかけた。

「被害者の特徴は自身の身体部位を認知することができないというもの。だが空間概念の専門家とも言える赤城周の見解は、それは催眠によるものだと言う。人の五感までも支配する催眠を研究していた奴は私の記憶には二人しかいない。その内、片方は死亡が確認されている。ということは、未だ姿を見せていない奴が黒幕で間違いない」

「大正解だ、ハンス!! そう、今回の黒幕はケラーだよ。少々面倒くさかつたが、他人の頭の中から必要な情報を抜き取り、逆催眠をかけて五感に異常を与える。これを私の影に入力しておいたのさ。まあパリに来たのは、ほんの気まぐれだけどね。これまでに重要な情報が全く見つからなかつたから、終わりにしてもいいと思つていたけど、最後の最後でまさかこんな素敵な出会いが待つていては思わなかつたよ」

一人、満足気に領く男に対し、ハンスはただ彼を見据えるだけだった。そんな彼を横目に赤城は一步前に踏み出す。

「一つ聞きたいんですけど、どうやって歐州支部の職員たちの中にいる一般人と魔法使いを見分けたんですか?」

男はじつと赤城の顔を見つめた後、人が変わったかのように下品な笑みを零した。

「さあな。知りたければ、自分で調べるんだ」

まともに取り合わない男を前に不満げに眉を潜める赤城。ふと、何かが彼の頬に触れた。

「——雨だ」

突然降り出した雨は、ぽつぽつと夜中の路地を濡らし、雨粒は徐々に水たまりを作つていく。

「周君、やるべきことはわかっているな」

「……はい」

ハンスは後ろを振り向くことなく、仲間の覚悟を受け入れた。

「落ち着いて、奴の頭に照準を合わせるんだ。あれは人間ではないと思え」

「……はい」

赤城はゆっくりと拳銃を構える。

——狙うは男の頭。この引き金を引けば、相手は死ぬ。

震える手元を必死に抑え、彼は引き金に手を添える。

数センチ動かせば、男の命はあつけなく終わるのだ。それは、言葉で示すだけなら非常に簡単な作業だ。子供にだって可能な動きだ。  
何も考えなければ——、

「……すみません。やつぱり俺には」

赤城は静かに腕を降ろした。

「そうか、ならば仕方ない」

ハンスは彼を責めることなく敵を前にして、戦闘態勢に入つた。

「周君、では協会内で空間を作り、避難した彼らを守つてくれ」

「……わかりました」

悔しそうに顔を伏せると、すぐに赤城は建物に向かつて移動を開始した。その背を何もせずに見送る男。

「行かせてよかつたのか？」

「ああ、せつかく君がくれたハンデだ。大人しく受け取つておこうと思つてね」

瞬間、男が前に出た。ハンス程の腕前ではない拳。難なく躱した彼は、その左腕を掴み関節を外そうとしたが、

「いや、捉えたのは私だ」

物凄い速さで影が迫つてくることに気付いた彼は咄嗟にその腕を離す。

「ぐつ」

ほんのわずか、反応に遅れたハンスは影の蹴りを食らい、勢いよく後方へ飛ばされてしまつた。

「二対一、本当にこれでいいのかい？」

「……ああ、構わない」

思わず膝をついてしまつたハンスは、ゆっくりと起き上がり態勢を直した。

「たまには私も本気で戦いたいんでね」

ハンスはナイフを手に右手を振り上げる。それが地面に刺さり、効果が発動されると同時に彼は物凄い速さで相手に詰め寄つた。男も地面の紙に注意しながら、彼の攻撃を躱して

いく。

今回ハンスは単調な戦法、同じような攻撃を繰り返し続ける戦術にしたようであり、男もそれを早い段階で見抜いていた。そして、躊躇切れないと判断した時点で影を挟んでいく。二対一ならではの戦法である。

「君の攻撃は一対一なら脅威的だが、自身より相手の数の方が多い時は容赦なく窮地に追い込まれてしまうんだよ」

「ブリーゲルさん!!」

ふと、協会内から戦闘を見守っていた赤城が飛び出してきた。彼は男の後を追う影に向かって、数発の弾丸を撃ち込んだ。援護ならできると思つたようである。実際ほんの僅か、影の動きは鈍くなつた。しかし、もはや男は影の力には頼つていなかつた。彼はハンスの動きを見抜くのに精一杯で影に指示を出していなかつたのだ。そして男の管理下から離れた影は、一直線に自身へ殺意を向ける敵、赤城に向かつて突進を開始する。

「……しまつた!!」

咄嗟に受け身の姿勢を取ろうとした赤城だつたが、

「そこまでだ!!」

響き渡る野太い声。同時に四方にばら撒かれた紙が反応して、魔法が発動する。

男と影の動きが止まつた。

「右に避ける!!」

指示通りに体を動かした、赤城はふと、声の方に顔を向ける。そこには、彼の友人がいた。

「アンダーソン!! いや、どうしてここに!!」

「親友が必死に戦っているのに、デートばかりしていられないだろう」

驚く赤城に満面の笑みを返すと、彼はハンスへと声をかけた。

「M.I.ブリーチ。影は私が引き受けます。こちらは任せてください」

それを聞いたハンスは、やれやれと重苦しいコートを脱いで大きく肩を回した。

「個人的にはこのコートを気に入っているのだが……このままだと汚れてしまうな」

ハンスは赤城にコートを手渡すと、再び男と向き合つた。

「うおおおお!!」

一方、大きな掛け声と共に、アンダーソンは影に向かつて突進した。そしてすれ違いざまに『Boom』と書かれた紙をいくつか張り付ける。しばらくすると、それは爆発し、影から煙が立ち上つた。

しかし、影は怯むことなくアンダーソンに向かつてくる。対して彼は『Stop』と書かれた紙を目の前の地面に張り付けた。案の定、それは彼の前で動きを止める。アンダーソンの得意な魔法、それは短時間で即効性のある魔法だ。

「非常識には、非常識をぶつけろだ!!」

彼は先ほどから同じ戦術で影と相対していた。いくら影一、改造人間と言つても終わりはある。事実、影の動きは徐々に鈍くなつていた。そしてアンダーソンは懐から拳銃を取り出し、影の足に照準を合わせる。更に動きを遅くするためだ。

ふと、ハンスと向き合つていた男は構えを解いて状況を確認した。

「ふむ、これで三対二になつたのか。逆転されてしまつたかな」  
困つた、困つたと残念そうな顔を浮かべる男。

「研究所も終わりだ!! あんたもすぐに捕まえてやるよ!!」

アンダーソンの挑発に男は一層、顔をゆがめ、そして、

「余所見は駄目だよ?」

「余所見は駄目だよ?」

一発の銃声。同時に、アンダーソンは膝から崩れ落ちた。

「アンダーソン!!」

急いで銃弾が飛んできた方向に銃口を向ける赤城。既に人影は小さくなつていた。

「くそつ……もう一人いたのか!!」

銃声に気を取られていたハンスも、再び目の前の敵へと視線を戻した。どうやら男にはも

う戦闘の意志はなく、構えを解いたまま静かに彼に向き直つていた。

「君には話しておこうか。歐州大陸内にはetcにに関する文書はない。これが私の下した結論だ。第一、協会が何故そんなものを必死になつて探しているのかは知らないが、それを利用しそうな人間は思い浮かぶね。一人……いや、三人かな」

ハンスの返事も待たず、男は身を翻した。

「どこに行く」

「今日は終わりだ、ハンス。彼を早く病院に連れて行つてあげた方が良いよ」  
ちらりと、アンダーソンへ視線を向けるハンス。次の瞬間、男の身体は闇の中に消えかかっていた。

「やれやれ、今回は君たちも私も利用されたようだ。お互い様だね」  
雨音に紛れることなく、けらけらと耳障りな笑い声が響く真夜中。ハンスはきつく拳を握りしめて、奴が消えた暗闇をじっと睨んでいた。

「おい、アンダーソン!!」

赤城の声に、はつとハンスは我に返る。

「だ、大丈夫だ、周。そんなに深手じゃない……ははつ、つい油断しちまつたな」  
言葉とは正反対に荒い呼吸を繰り返すアンダーソン。ハンスは急いで彼に駆け寄ると、赤城に手渡したコートを彼の身体に被せた。

「雨がひどい。早く建物の中に入るんだ。協会内に医者もいたはずだ」

「はい!! 行くぞ、アンダーソン!!」

いつもより荒々しく声を掛けると、赤城はハンスと二人がかりで彼を背負い、協会の中へと入つていった。

\*\*\*

この事件は一体何だったのだろうか。

窓から見える夕日を眺めながら、彼は思つた。全てが未解決のまま、親友が傷付き、終わつた事件。一つだけ確かな事は、敵はもう襲撃をしないことだけだ。  
寝起きの瞼を擦りながら、赤城は部屋の鏡を見る。そこには疲労が溜まつた自身の顔が映つていた。事件の後、日中ずっと横になつていたが上手く寝つけず、疲れが抜けていな

いようだ。

「よう!! 元気か、周!!」

勢いよく背中を叩かれた彼は、思わず前のめりに倒れそうになつた。

「アンダーソン……もう平氣なのか?」

「もちろん!!俺はそんな柔な男じやない。それに少しでも早く彼女に会いに行かねばならない!!」

昨晩の怪我から一日も経っていないが、彼の身体はすっかり良くなつていた。弾丸が急所を外れていたのもあるが、協会内の腕の良い医者がすぐに治療に取り掛かつたおかげだろう。

アンダーソンはいつも通りの笑みを浮かべ、自身の事務室へと消えて行つた。

一方、ハンス・ブリーゲルは事件が収束した後、仕事が山ほど残つてゐるとい、休む間もなくアメリカ大陸へと向かつたようである。

「……何のためにフランスまで來たんだ」

赤城は虚脱感に囚われていた。

「とりあえず、ホテルに戻つて休むか」

ホテルには遊幽が先に戻つてゐると彼は聞いていた。明日からの予定は白紙。今後のことは彼女と共に決めることにした。

アンダーソンは手術が終わると、真っ先に彼女の顔を思い浮かべた。肩に受けた弾丸の傷は深くなく、元々の体質もあるが協会の手配した医者のおかげで夕方には充分楽になつていた。

アンダーソンは懐から小さなケースを取り出す。中身は指輪。彼は今夜こそ、彼女にプロポーズをするつもりでいた。昨晩はあれから連絡がなかつたが、きっと彼女ならば今晩もあの場所に顔を出すと思い、アンダーソンは馴染みの店へと向かつた。

「（ジ）機嫌ですね、いや、ワクワクして我慢できないという感じでしょうか」

店主は彼の顔がいつも以上に輝いていたのか、思わず軽口を叩く。

「今日こそ、決着をつけるんです」

「ああ、それは素敵なものだ」

「マンハッタンを一杯だけ頼む。アルコールを入れときたいんだ」

照れくさそうに笑うアンダーソンに、彼は静かにグラスを差し出した。

\*\*\*

以前、一度だけ顔を出した店の前に赤城周は立っていた。まるで誰かを待つてゐるかのように。

「あ……」

「こんばんは」

驚いた顔で立ち尽くす女性」、ルイス・マクドゥーガル。赤城は丁寧に挨拶を交わした後、本題へと入った。

\*\*\*

「今日のマンハッタンはいつもより美味しく感じるね」

「そうですか、それは良かつたです」

沈黙。いや、店内に流れる音楽だけが彼らの間に満ちている。

「……遅いですね。普段ならもう来て いる時間だが」

「そ、そうですね。まあ、たまには遅くなることもあるでしょう」

そう返すアンダーソンだが、彼の額には冷や汗が浮かんでいた。

\*\*\*

先ほどの店から歩いて数分の喫茶店。若い男女は何も言わずに向かい合っていた。席に着いてから、どのくらい経つただろうか。やっと口を開いたのは赤城だった。  
「ルイス・マクドゥーガル。あのバーで小切手にサインされた時、違和感を覚えたんです。[Luise McDougall]、あれは「ルイス」じゃない。英國式で書くと、スペルもちがう。もちろん、最近はそこまで厳しくはないですが。サインをする時、自分も知らないうちに本名を書く癖を持っているんですよ」

彼女は何も言わずに赤城の言葉を待っていた。

「マクドゥーガル……偽名か本名かはわかりません。けど、研究所の【ルイーゼ】は殆どの人間が知っています。まさかそれがあなただとば、最初は気付きましたけど」

赤城はフランスを発つ前に言つていたハンスの言葉を思い出していた。

『【ルイス】という人間のスペルを思い出せ。私の推測が正しければ、彼女の本名は【ルイーゼ】だ』

すぐに答えは出た。

「どうしてアンダーソンを騙したんですか？ 彼なら簡単に騙せると思つたんですか？」

彼の質問に答えることなくルイス、いやルイーゼが顔を上げた。

「……私も研究所の一人として etc の文書を探す協力をしていました。彼から情報を聞いて、それを裏で流していたんです」

「だから職員の退勤時間とかもある程度把握していたのか」

彼女は静かに頷く。そして、再び沈黙が彼らを包んだ。女の顔は静かな悲しみに溢れ、男の顔は静かな怒りで満ちている。

「あなたがアンダーソンに見せた優しさは全て嘘だつたんですね」

問い合わせるような赤城の言葉に彼女はやつと重い口を開いた。

「彼には……アンダーソンさんには申し訳ないと思つています」

そして懐かしそうな目で彼女はテーブルの上のコップを見つめた。

「初めは研究所のためには近づきました。でも、半年経つた今は……。彼の優しさに、彼の笑顔に私は救われていた気がします。初めて嬉しいとか楽しいという感情を知ることがで

きだ。研究所の人間である前に、私は一人の人間だと気づかされてしまつたんです——だつて、彼だけが一人だつた私に声を掛けてくれたから

一息ついた後、静かにそう告げた彼女の瞳は本当に幸せそうな色をしていた。

「昨晩」

しかし赤城はそんな彼女に目をくれることなく、淡々と話を続ける。

「アンダーソンが銃撃された箇所を確認しに行きました。普通、狙撃をする際は静かに近づき静かに立ち去る。行きと帰りの二つしか足跡はつかないはずなんです。けど、雨で濡れていたその場所には狙撃手が何度も行つたり来たりした跡が残つていた。おそらくその狙撃手は撃つかどうかを何度も迷つていたのでしょう。最終的にその人物は引き金を引いたようですが」

ちらりと彼女の様子を窺うと、赤城はそれ以上何も言うこととはなかつた。いや、彼女の顔を見てその続きを躊躇つたのだ。

「では、お先に失礼します。この件は私しか知らないので、今後の事はあなたの判断に任せます。彼の友人の一人として、私はあなたにお願いします」

そう告げると、赤城は一度も振り返ることなく喫茶店を後にした。間延びした音楽が流れる店内に、ぽつりと落ちる女の涙を残して。

\*\*\*

「おい、アンダーソンさん。そろそろやめといた方がいいんじゃないかな?」

「え、俺そんなに飲んだか?」

店主と向き合う形で座る男。彼の顔色は赤みを帯びていた。

「あんまり酔いすぎない方が良いと思うぞ」

店主の忠告を受け、男も真面目な顔で頷く。

「そうだな、醉つ払いすぎたら逆に見つとも無いな」

\*\*\*

青年が立ち去り、何曲目の音楽に切り替わった頃だろうか。女は物凄い勢いで外に出ると、大通りを無我夢中に走り抜けて行く。

「アンダーソンさん……アンダーソンさん!!」

彼女にとつて、もつとも人間らしく生きることができた半年間。彼の声、言葉、笑顔が脳内を駆け巡る。そんな幸せな日々を思い出しながら、彼女は走る。 彼女は確信していた。彼はそこにいると。いつもの、あの店にいると。

「全く、困ったなあ」

突然、彼女の足が止まる。

目の前には見慣れた顔の男が立っていた。

「ロベルト」

「ケラーがルイーゼ一人に任せ切れないとはこういう事だったのか」  
男、ロベルトは面倒くさそうな顔で懐から拳銃を取り出した。

「すまないな、後始末は私の仕事なんだ」

無音。

銃声すら響くことなく、彼女は静かに倒れ伏した。あつという間に、その身体は徐々に真っ赤に濡れていく。

「主人、もう一杯くれ」

「それはいいが……財布の方は大丈夫か？」

「酒代くらい出せるに決まってるだろう!!」

完全な酔っ払いと化したアンダーソンは、頭を上下に揺らしながら四杯目を注文していた。昨日の今日、今夜彼女がここに訪れないということは、彼は振られてしまつたということだ。店主も気を遣い、慰めの言葉を掛けるが彼は一切聞き入れない。そしてアンダーソンが一人、カウンターで俯いていると、突然隣の席に誰かが腰を下ろした。

「やあ」

いつもの人懐っこい笑顔を向ける青年、赤城周だ。

\*\*\*

「ああ……俺の人生は本当にについていないな」

「そんなことないだろ、アンダーソン」

ヤケ酒から絡み酒に移ったアンダーソンは、大きなため息をついて俯いた。  
「周……結局、振られてしまつた。彼女はきつともうここに来ないだろう。昨晩の雰囲気  
でいけると思つたが、やはり俺の様な男じや駄目だつたんだ」

それが彼女の決めた答えか。そう思つた赤城は、何も言わずに彼の肩を叩いた。  
「慰めてくれるのか。なら、今夜は俺が潰れるまで付き合つてくれ」

「ああ」

彼女と交わすはずだつた杯を親友と交わすアンダーソン。

「主人、あの曲をかけてもらえるか」

彼の提案に店主は黙つて頷く。そして三十年以上前に流行つた音楽が店内に流れ始めた。  
これは彼の父親がよく好んで聞いていた曲。

Track. 4 「There Is A Light That Never Goes Out」 End. -

(  
空  
自)

97.psd

(  
空  
自)

同じ頃、日本。

「あら、それは大変だつたわね」

金色の魔女、天城紫乃是自身の妹である天城遊幽と国際電話をしていた。

「でも無事でよかつた、これで旅行も楽しめるじやない」

電話口から聞こえる文句を半分ほど聞くと、彼女は受話器を置いた。先ほどまでの笑顔は失せ、彼女の顔は深刻な表情をしている。現在、彼女の周囲は非常に緊迫した状態に陥っていた。

リニアは負傷しており、時宮葵は行方不明、真田とノエルは重傷。唯一、鈴木聰太だけが動ける状態である。魔女はしばらくキヤビネットを眺めた後、その中から一冊の古い本を取り出した。

「こつそり十五年前に持つてきただけだつたけど」

争いの火種になると予想はしていたが、まさかここまで大事になるとは思つていなかつた。ふと、魔女はくすりと笑う。

「奴だ。」

魔女は狂氣の入り混じつた笑みと共に、右手に持つていた古い本をきつく握る。

— 私に多大な屈辱を与えた、奴がついに戻ってきた !!

\*\*\*

「我々が目指すのは現状維持だ」

これは協会が常に掲げている指針。現状維持、我々は変革を望まない。現在の状況が最も善いものであり、この状況を維持するよう我々は努めるという意味だ。

「あなたにとつて、協会とは何ですか?」

まるで街頭インタビューのような質問にアンダーソン・カイルは答える。

「職場」

単純明快、シンプルな答えた。彼にとつて協会という場所は、給料を貰い仕事をする場所。

少し変わった業種だが、その点を除けば至つて普通の会社と変わらないだろう。そう、彼は平凡な二十代後半の会社員。

しかし最近の彼は、彼の心は、とても不安定な状態だつた。以前から『冬』という季節を嫌つているアンダーソン。この季節は良くない事ばかりが起きるせいか、彼の中で冬のイメージはあまり良くない。

今年の冬も彼は痛い思いを味わつた。こないだまでいい雰囲気にあつた女性と、突然連絡が取れなくなつてしまつたのだ。要は振られたわけである。しかし、いつまでも落ち込んでいるわけにはいかない。

「協会からの通告か……」

アンダーソンはつい三時間ほど前に届いた資料に、じつと目を通していた。そして時計を確認すると、覚悟を決めたかのような表情で部屋を後にする。

今日は協会内でも身分の高い、アルゼンチン本部の人間との面談を予定していた。面談と言つても、映像（モニター）を通してだが。  
おそらく先日起きた事件の詳細について話すのだろう。場合によつては新たな任務を課せられるかもしれない。アンダーソンは左手に書類を抱えたまま、最上階へと向かうエレベーターへ乗り込んだ。

軽快な音と共に、最上階へ着いたことを確認するアンダーソン。彼の視線の先には白いドアが一つ見えるだけだ。彼はドアノブに手をかけ、一度深呼吸をする。この行為により、気休めでも多少は彼の緊張が和らいだようだ。

そして、ドアを開ける。

会議室の中は空間の大きさに似合わず、パリ支部本部長と数人の側近しかいない。アンダーソンは軽く頭を下げるが、中央の席に腰掛けた。彼が座つたのが合図だったのか、不意に目の前のモニターのスイッチが入る。画面に映るのは数人の男。いずれも表情、姿勢、あらゆる仕草から威厳というものをひしひしと感じさせる人物たちだった。アンダーソンは咳払いを一つしてから立ち上がり、中央の台の上に抱えていた書類を広げた。

「先日の事件を踏まえ、etc の文書に関する話をしたいのですが」  
etc という単語に周囲がざわめき出す。彼は構うことなく続けた。

「既にご存じだと思いますが、私は先日研究所の人間と一戦を交えました。惜しくも処

理はできませんでしたが、彼らがetcの古文書を狙っているという事実だけは得ることができました」

映像の中の男たちは身動き一つせず、アンダーソンを見つめている。

「研究所の尖兵、対峙した敵の中には協会内でもかなり名が知られている人物、「怠惰のロベルト」の存在も確認できました。彼は複数の改造人間と共に支部内の事務局、主に古文書を研究していた人間を狙い、襲っていたようです。しかし、結果的に彼らは欧州に古文書は無いと判断して撤退したと思われます」

「その根拠は」

「ロベルト本人の口から言質は取られています。目新しい報酬が何一つ手に入らなかつたためでしょ。次の候補地としては英國、ポルトガルあたりと踏んでいましたが、もう用心する必要もないと思われます」

「それで君の意見は」

映像内からの質問に彼は淡々と答えて行く。

「私の意見としましては、まずフランスは十五年も本部が置かれていた地です。あらゆる資料が集まっているはずのこの地にもetcの文書がないとすれば、当然歐州にもう用はないでしょ。ここで事件を起こす前の国々は予防線といった程度でしょから。ならば残りの考えられる場所は三つしかありません」

「ほう」

「一つ目は現在、協会の本部が敷かれているアルゼンチン。二つ目は三年前に戦争が起きた中東。そして最後、三つ目は」

アンダーソンは資料へと視線を落とす。

「三つ目はー、日本です」

「日本ー、つまり金色の魔女だと」

「はい。彼女が所持している可能性も否定できません。しかし、そうなると多少の疑問点も生じてくるのですが」

映像内の人間だけではなく、会議室内の人間の空気もあまりよくなかった。まるで触れてはいけないものに触れるような雰囲気。アンダーソンは戸惑いながらも続きを口にした。  
「etc の古文書は協会が持つていると一般的に言われています。しかし、いつ頃からかれは誰も目にした事はない、いわば伝説のような存在となっている。ここで疑問になつてくるのは、そもそもetc の文書を我々協会が所持していたのか、それとも最初から協会は手にしていなかつたのかという点になりますが」

「そんなことはどうでもいい、結論だけを述べたまえ」

「……失礼しました。結論を述べると、研究所の連中は日本に向かつた可能性が高いと考えられます。もしかしたら、マエストロ自身がこのような状況に誘導したとも考えられません」

再びざわめきが起こる。映像内で中央に座っている人物が長いため息をついた。

「君は……どこまで知つているのかね」

「どこまで……とはどこまであるんでしようか」

静かな睨みあいが続く。アンダーソンも決して目を反らすことなく、モニターを見つめていた。

「君、知つてる事を早く話しなさい」

野次馬のよう、会議室内の人間が声を荒げた。その声が勘に触つたのか、アンダーソンは男の方へと顔を向ける。

「今回の事件で標的になつた連中……全員、魔法使いだそですが？」

「なつ……」

「どこでそれを知つた」

うろたえる職員とは別に、パリ支部本部長の男が静かにアンダーソンを見据える。しばらく黙つていたアンダーソンだが、観念したように口を開いた。

「ともかく、協会内にあるかどうかも分からぬ etc の古文書でこのよだな騒ぎになると、いうことは、私たち下の者には伝わつていない情報があるということです。今後も知らされることはないとおもれませんが。報告は以上です」

「待ちたまえ」

不機嫌そうな顔で席へ戻ろうとするアンダーソンを、映像内の男が声をかけた。

「君の意見は述べ終わつてないようだが」

彼は食い入るようにモニターを見つめ返し、再び体をそちらへと向けた。そして、

「etc の古文書は実在します」

とても単純だが、しかしその言葉の意味はとても大きい。伝説、幻と見なされていた本の存在が実在すると述べた。先日の一件で最も前線に立つていた男によつて。会議室内、映像内の男たちからも明らかに動搖している様子が目に取れた。そしてアンダーソンは問い合わせるような口調で、パリ支部本部長へと向き直る。

「本部長は初めからそう思つていたんじゃないですか？だから魔法使いの人間に擬装までさせて文書を探そうとしていたのでしょうか？」

「君に答えることは何もない。君のようなものが知つていいことでもない」

「アンダーソンも反論を述べようとした、その瞬間。

「アンダーソン・カイル。我々が掲げる指針は何だ」

高ぶつた脳に響く問い。男の声は先ほどと同じだが、その問いはアンダーソンの脳内で木霊する。彼は胸に手を当て、絞り出すように答えを述べた。

「——我々は現状維持を目指す」

「その通りだ。そのために我々は行動する。そして世間に知られていいものと分けないものがある。我々は秘匿しなければいけないのだ」

納得のいかない表情で俯く彼に、本部長は静かに口を開いた。

「偶然巻き込まれたとはいえ、君には伝えといた方がいいかも知れないな」

その声にアンダーソンもはつとして顔を上げた。

「協会は官僚制だ。上からの命令に下の人間は従う。既に君の中では予想しているだろうが、etc の文書を探せと命令したのは協会長だ」

「アルゼンチンの男……」

「そうだ。そして君の見解は正しい。etc の文書は実在する。それは確かに十五年前までは我々協会が所持していた」

「十五年前……」

「十五年前のある日、パリ支部内の地下室に何者かが侵入し、etc の文書が盗まれるとい

う事件が起きた

「まさか」

アンダーソンはそのような事件が起きた事を耳にするのは初めてだつた。そもそも協会内で事件が起くるなど考えられなかつたのだ。

「最重要機密故、確証は得られてないが今でもその事件は未解決。仮に研究所の人間が犯人だとするならば、古文書は世間に公表されているに違いない。だが、現在でも公開されていらないということは違う人物が所持しているということ。その古文書は我々が手にしておかなければいけない代物だ。現状維持、そのために。だから新しい協会長はその古文書を探す命を下した」

本部長の話が終わると、入れ替わるように映像内の男が口を開いた。

「だが、君が言うとおり研究所の連中が日本に向かうということは、我々が予想していた人物が古文書を所持しているということ。ならば好都合だな。彼女も研究所の人間とは対立しているようだ、我々が手を出さずとも研究所の連中を始末してくれるだろう」

「それは……協会は一切手出ししないということですか？」

困惑した声で問いかけるアンダーソンに、男は当然だという表情で答える。

「研究所との全面戦争は避けるべきだ。今回のことを口実に我々が手をだしてはいけない」「し、しかしマエストロが完全に我々の味方だと言う可能性も……我々が援助をして」

「その考えがまさに戦争の口実だ。むしろそれを逆手に取られて、研究所の連中が仕掛けてくるかも知れない」

彼らの意見は間違つていい。だが、アンダーソンはどうしても首を縦に振る事ができな

かつた。

「ですが、民間人にも被害が出る可能性もあります。それに研究所が全勢力で前に出てき

たら、さすがにマエストロ一人の手にも負えないのでは」

「あの女が負ける？」

彼の訴えを聞いていた本部長は口を歪めて笑っていた。

「君の考えはわからなくもないが、研究所の連中が大勢で仕掛ける可能性は低いだろう。彼らの中でも急進派が数人来る程度に過ぎない。怠惰のロベルト然り、穩健派に主導権を握られた急進派の連中は研究所内でも隅に追いやられていると聞くからな」

あくまでも協会は手を貸さないという方針を取る彼らに、ついにアンダーソンは中央の台

に手を叩きつけた。

「……では自滅するのを見ていると」

「肯定的に考えるんだ。我々はただ状況を見守るのみ。それと、先日の事件も含め今回の話し合いも全て内密に。これも現状維持のためだ」

「……はい」

彼の返答を最後に、モニターの電源が落ちる。話し合いは終わつたようだ。

会議室内の人間も足早に部屋を後にしていくが、ふと、入口で立ち止まつた本部長が彼へと振り返る。

「そういえば、君のお父さんは『健在か？』

「はい。おかげさままで」

「そうか」

扉が閉まる。

残されたのはアンダーソンと床に散らばった書類のみ。彼はきつく握りしめた拳で、再び台の上を殴りつけた。

——そつたれ!!

\*\*\*

「議会の考え方を無視する気か!!」

鋭い叱責の言葉が響く研究所中央会議室。

「君らの意見を受け入れ任務を行つた結果、彼はやられた。そして我々も戦力を失つた。初めに君たちは自分たちがまだ存在しているということを証明するためには、彼、Mr.modification を切り捨てたんじやないのか」

返つてくる声はない。ポンッ、ポンッとベルコルが机を叩く音だけが響く。

「つまり君たちは……我々、急進派の行動を承諾しないというわけか」

「ああ、そうだ。三年前の戦いで敗北した君たちが再び日本に行つてどうする!?」

ベルコルの向かいに座る男が彼の意見を素早く非難する。その様子に、ついに彼も呆れたようになため息を零した。

「わかった。では我々は我々で行動します」

ベルコルが立ちあがり席を後にしようとしたところ、近くに座っていた男が口を挟んだ。

「君がどんな考へで動いているかは知らないが、君の行動が我々の不利益なところに及ぶのならば、我々も容赦はしない」

「ほう。ここは個人主義の集まるところのはずだが、団体行動を強要するつもりかね？随分と研究所も変わつてしまつたようだ」

挑発をする彼に対し、男は何も返さずじとりと彼を見据えた。

「……どうせ君たちは私が敗北することを望んでいるのだろう」

そう言い残すとベルコルは部屋を後にする。室内では未だに話が進められていた。

「ここで急進派が一掃されれば我々にも利益ではないか？」

「あの男が何を考えているかも分かりませんしね」

「そもそも金色の魔女の戦力を侮り過ぎだ」

隅々から苦言が上がる中。

「何かに憑かれているな」

その透き通るような声は静かに埋もれて行く。

\*\*\*

「やあ、こんにちは」  
「ベルコルか。君が訪ねてくるなんて珍しいな、君は私の事を嫌つてゐると思つていたが」  
皮肉気に口元を歪める男に対し、ベルコルは肩をすくめた。  
「人手不足だからな」

「なるほど、要は誰でもよかつたわけか」

「そこは御想像にお任せしよう」

男は彼の態度が気に入つたのか、からからと笑いながら、

「用件は何だ?」

「日本に行く」

「それはつまり……三年前の延長戦というところか?急進派の人間はもう数えるほどしかいないと思うが」

「ああ、だから君の力が必要なんだ、ハントメントン。君には稳健派の制御、牽制をお願いしたい」

ハントメントンと呼ばれた男は、目を細める。まるで真意を測りかねているかのようだ。

「私の人脈と政治力を利用したいと?」

「そうだ。急進派の人間が日本に向かう事を連中が承認してくれるはずがないからね」

「つまり君は議会に盾つくと」

「いや、どうせなら議会の許可を貰つて快く行きたいな」

楽しげに会話をしていたハントメントンは、ふと、ベルコルを眺めたまま思索にふける。

「君のような人物が私を訪ねるほどの事態。そこまでして日本に向かうということは……」

彼女の所に何かがあるな?」

男の問いにベルコルは一瞬口をつぐんだが、

「etcの文書だ」

その言葉にハイティントンの目が大きく見開かれる。

「あれば実在するというのか!?」

「おそらく」

前のめりになつた体を再び椅子に預け、彼は嘆息をついた。

「確實ではないのか」

「それを確認するために行くんだ」

「……；そういうえば、最近歐州で不審な事件が起きていたと聞いたが、それも何か関係して  
るのか？」

「ああ、既に歐州で探りを入れてみたが徒労に終わった。残りの候補は三カ所だが、一番  
怪しいのは日本だ」

その言葉にハイティントンはある事件を思い出していた。

「十五年前にパリ支部で盜難事件があつたと言つていたな。十五年前……金色の魔女が復  
活した頃だ」

男の承諾を待ち続けるベルコルは、じつと彼を見据えている。ハイティントンは、椅子に  
座つたまま目の前の机の上を指さした。

「この書類の山が見えるか？私は議会の中でも君たちを仲裁する立場にいる。いくら個人  
主義の集まりでもそれをつなぐ接着剤、潤滑油が必要だからだ」

ベルコルはわかっているとでも言うように静かに頷く。

「そんな私にここまで頼み込むということは、それほど確信があるということだな？」

「ああ。手に入れた暁には古文書を公開するつもりだ」

「ほう」

ベルコルの瞳は真剣そのものだった。だが、自身が利用されるという可能性も否めない。ハイティントンは一瞬、そのような考えが頭をよぎつたが、次の瞬間、その顔には挑戦的な笑みを浮かべていた。「いいじゃないか。私も穩健派が暴れまわっているのを見るのは飽き飽きしていたところだよ」

「……ありがとうございます」

「幸運を祈る。だが一つだけ疑問に残っている事がある」  
ハイティントンは立ち去る背中に声をかけた。

「君はetc の文書を手に入れて何をする気だ?」

「まあ……まずはお姫様を起こさなくては」

小さく呟く男に、彼は疑問符を浮かべる。

「どういうことだ」

「いや、まだ私も明確には決めてない。あ、そうそう。君にも危険が及ぶ可能性があるからゴトーに警備を当たらせるつもりだ、そこら辺は安心してくれ」

「ゴトー……彼女を置いて行つてもいいのか?」

「ああ。マルセンも我々に協力してくれるだろう」

マルセン、その名を聞いた彼は盛大に声を上げて笑いだした。

「あんな面白い仲間を連れていくのか!! 愉快な旅になりそうだな。まあ好きにしたらいいんじやないか?俺も好き勝手にする」  
その言葉に今度はベルコルが笑みを零す。

「そうだな……我々の本質は個人主義つてことか。互いが互いを利用し合うのみ。それだけの話か」

その言葉を最後にベルコルは静かに扉を閉めて出て行つた。一人残されたハイティントンは思わず視線を床に落とす。快諾したつもりではいたが、どうにも彼と同じ勢いで事を起こす気にはならなかつた。

——実在が不確かなのを何故あそこまで追う？

その疑問だけが彼の頭を占めていた。しかし、結局それは彼にとつてはどうでもいいこと。ハイティントンは椅子に座り直すと、仕事に戻ることにした。  
しばらくして彼は一つの答えに辿りつく。

「あれは本能というやつか……研究に対する本能。もしくは、一種の病気だな」  
そして彼は壁に掛けてあるカレンダーへと目を移した。曆上ではすっかり真冬である。  
「いずれにしろ、今回の事件が終わつたらこここの様子もだいぶ変わるだろうな。何かが消え、何かが生まれる……まあ、私には関係のないことだが」

\*\*\*

「やあ、君がパートナーとして来るのは思つてもみなかつた」  
ロベルトは目の前に立ちすくむ男に柔軟な笑みを浮かべた。

「……」

「おいおい、挨拶ぐらいしてくれよ」

「俺はある程度予想していた」

「そうかい？まあ仲良く日本へ旅立とうじゃないか」

パリでのハンス・ブリーゲルとの戦闘後、彼は研究所に戻るや否や日本行きの指令が下つた。そこで彼は今、こうしてフーゴと空港で合流したわけである。

「出発までまだ時間はあるか？」

「三十分」

「なんだ、まだまだ余裕だな」

ロベルトは近くの待合席に腰掛け、隣に立つ男に声を掛ける。

「しかし……突然の日本行きだな」

「欧洲に無いのならば、残るは日本」

「そりやそりや、あそこには金色の魔女がいるからな」

「ぱつぱつと暇をつぶし合う二人。彼らの持ち物は何一つない。

「わざわざ異国之地にまで派遣されるなんて、面倒なことこの上ない」

「この地も我々にとつては外国と変わらない」

「ああ……そもそもうだが」

二人の男の間に沈黙が落ちる。会話が途切れてしまつたようだ。ふと、ロベルトはフーゴの視線に気づいた。彼は何か言いたげな視線をずっとロベルトに向けていた。

「……ルイーゼが死んだと聞いた」

「ああ、死んだな」

「君が殺したと聞いた」

フーゴの視線には僅かに怒りが込められている。そんな気がしたロベルトは嘲るような視線を彼に向かえた。

「俺を罵りたいのか？彼女は裏切り者、だから殺した」

「君は仲間を殺した」

「違うな。奴は仲間じゃない」

凍てつく視線が絡み合う。そこへ無機質な声の案内放送が流れた。どうやら彼らの搭乗時間になつたようだ。フーゴは何かを言いかけた口をそつと閉じる。

「そろそろ行こう」

「……ちつ」

釈然としない彼の様子に腹を立てつつも、ロベルトは彼を追うように搭乗口へと向かつた。

\*\*\*

『聖女よ、我々により多くの祝福を与えたまえ』

『聖女様、聖女様』

『純潔の乙女にご多幸あらんことを』

森の中に聳え立つ長い塔。その頂上には人が一人通れるほどの小さな扉がある。今、その扉が開いた。

現れたのは、透き通る様な白い肌、煌めく金色の髪、そして瑠璃色に光る瞳。お伽話に出てくるかのよう、それは誠に美しい乙女だった。彼女が姿を現すと、下から眺めていた人们は揃つて歓声を上げる。貴族も農民も、大人も子供も関係ない、彼女の前では全ての人間が平等の存在である。彼らは彼女を崇拜し、とても愛していた。

その愛に答えるかのように、彼女は微笑む。愛をこめて。

\*\*\*

『殺せ!! 魔女を殺せ!!』

『黒死病の女!! あの女を殺せ!! キルヘンを殺せ!!』

『全部あの女のせいだ……!! あの女がこの街に災いをもたらしたに違いない!!』

塔に火のついた棒がいくつも投げ入れられる。貴族も農民も、大人も子供も関係ない、怒り狂つた彼らは次々と火を放っていく。塔の中には子供たちがいた。いずれも既に真っ黒な灰と化している。奇しくも火の手を逃れ、外に飛び出た子供は槍でメッタ刺しにされ、格好の餌食となつた。

魔女の叫び声が届くことはない。彼らの心は怒りに支配されており、行動は過激さを増していくばかりだ。迫りくる炎に追い詰められ、ふと彼女は外を見る。そこにはおよそ人間とは思えない憎しみに満ちた彼らの顔。その集団の中、彼女の視線はある青年騎士へと向けられた。

素敵だと思ったその騎士の服は真っ赤に染まっていた。  
素敵だと思ったその顔は狂気に染まっていた。

純潔の乙女の頬に一筋の涙が流れる。彼女は泣いていた。

彼らを心の底から憎みながら、彼女は泣いていた。

\*\*\*

『記憶を消してほしい』  
『……本気?』

『ああ、この記憶を抱えて生きて行く自信がない。これ以上は耐えられない。毎日毎日、この記憶が俺の首を絞めていくようだ。だから消してほしい。先生ならできるだろ?』  
『人間の記憶は過去と現在を結ぶ糸のようなもの。記憶を消すということは、その糸を切る事と同じ。仮に記憶が再び戻つたとしても君は違和感を覚える。それはまるで新聞のコマを読むかのような、他人の出来事のように感じてしまう。それでも構わないのか?』  
『……頼む、記憶を消してくれ』

『全く……契約者にでもなるつもりか』  
『そうだ、俺は契約者になる。あいつが望んだ世界を作るために。俺は何でもする。けど、その全てをやり終えたら俺の記憶を消すと約束してくれ』  
『わかった、約束しよう』

『ありがとう』

\*\*\*

俺は思わず飛び起きた。  
何か悪い夢を見ていた気がする。

\*\*\*

「後少し……後少しだ」

彼女はそう呟きながら高ぶる自身の心をなだめた。  
「十五年間の計画の総仕上げだ。あの男がここに来れば全てが揃う」  
彼女は一、金色の魔女は心の底から笑っていた。

「-」 End.

119.psd

120.psd

## Track.5 Please please let me get what i want

「本当に帰るつもり？」

「だから、帰るつて言つてるでしょ !!」

机を挟み、向かい合う女と少女。何度も同じような会話が繰り返されているのだろう。少女の返答には幾分不愉快そうな色が窺える。

「そう、でもあなた、今帰つたら殺されるわよ」

「そんなの帰つてみなければわからないでしょ !! それに……あそこしか私の帰る場所は無いんだから」

勢いで反論する少女だつたが、彼女の声は徐々に小さくなる。まるで不安に押しつぶされていくかのようだ。女一天城紫乃是呆れたようにため息を零した。

「帰つてみなければ……裏切り者が快く歓迎されるわけないでしょ。そんな頓珍漢な組織があるなら見てみたいくらいだ」

裏切り者という言葉に対してか、少女一ノエルは何も言い返せずにいた。

「帰るところが無いならここに居てもいいわよ、部屋は充分にあるし」「違う……私の帰る場所はここじゃない !! 私の帰る場所は……」

「そんなもの言葉になんてできないだろ」

それは彼女自身も納得できる正論だつた。それでもノエルは首を縦に振ることはない。

「あなたが言いたいこともわかるけど、研究所に帰つたら待つてるのは死よ。それじゃあ、あなたを助けたあの子が凹むのよ。そんな姿見てたら私も萎える。だから私もあなたが出て行くのには反対。このまま大人しく、ここにいなさい」

まるで先生のような口調で天城は続けた。

「まあ、どうしてもここが嫌だつていうならあの人の人家に行きなさい。あの……女の、何だつけ」

「真田」

「そう、それ」

「迷惑かけたくない」

「じやあここにいなさい」

「嫌！ !! 絶対に嫌よ !!」

結局 双方とも譲る気はないらしい。子供のように首を左右に振つて拒絶を示すノエル。そして、ついに少女は、飛び出すように部屋を走り去つた。

「あー……実に子供らしい」

一人残された天城は頬を搔くと、疲れたように椅子へと沈みこんだ。少女の気持ちも分からなくもない。帰る場所もなく、知らない人間の家、むしろ自分を殺そうとした人間がいる家だ。こんな所に住めと言わされて納得できるはずもないのだ。しかし、むやみに突き放すわけにもいかない。それが天城紫乃だつた。

「ああ……本当にもう面倒臭い」

机に突つ伏して、盛大なため息をつく。答えは出ているのに、過程が思い浮かばない。そんな気分である。

ふと、彼女は昔の自分ならどうするだろうと想像してみた。簡単だ。

「無視するか野放し、もしくは殺害つてところか」

ふつ、と乾いた笑みを漏らす天城。このような時、彼女は彼女の中にいる【天城紫乃】といふ人間に感謝する。この身体の持ち主は善良な人間で、良くも悪くものんびりしている。以前の彼女とは正反対の人格と言つても過言ではないだろう。

——あの時、あの目覚めた瞬間から、私は誰なのか。

「……つと。また同じこと考えてたわ」

意味なんてないので。そう呟いて彼女は椅子から立ち上がり、冷蔵庫へと向かう。そして慣れた手つきで彼女はそれを取り出した。お気に入りの炭酸飲料。軽快な音と共に、彼女は缶を傾ける。

「ふうー……やつぱこれね」

窓についた露を拭い、彼女は冬の空を眺めた。

「そういえば、あの二人仲良く旅行しているかしら」  
遠い異国の方に派遣した彼らをどこか羨ましく思い、天城は再び缶を傾ける。瞬間、部屋をノックする音が聞こえた。

彼女が促すと、中に入ってきたのは若い女。真田だ。

「あの……」

「ああ、はい。何となく用件はわかつてます。ここに座つて」

「あ、はい」

言われるままに彼女は、天城の正面に腰を下ろした。

「何か飲む？これがおすすめだけど」

「あ……いえ」

手元の缶をずいっと差し出す天城に、真田はやや驚いた顔でそれを断る。彼女の顔は張り

詰めた糸のように強張つていた。

「そんな畏まらないでよ。そうね、保護者と先生みたいな感じで話しましょ」

「家庭訪問……ということですか」

「その方が話しやすいでしょ」

天城の言葉に彼女もつい、頬を緩める。

「はい」

「まあ、うちの子はさておき、あの子はどうするの？」

「狭いワンルームですが私の家にでも」

「そうよね、あなたの家も隠れ蓑みたいなものだものね」

天城は返答しつつも、再び席を立つて冷蔵庫へ向かう。二本目だ。

「でも子供を育てるのにワンルームはあれこれと不便でしょ。どうせなら広い所の方がいいと思うけど」

「それはそうですけど」

真田としてもノエルの意志を尊重したかった。彼女が嫌だと言うのなら、自身が引き取るつもりでいる。それを全てあの天城という女は見越していいのだろう。

「……やはり私からあの子に言い聞かせた方がいいでしょか」

「いや、あの様子じや自分から心変わりしないと無理だとと思うわ。それに敵の家で暮らす

なんて屈辱的だもの」

下を向いていた真田がぴくりと反応した。それを見過ごさなかつた天城も弁明するよう口を尖らせる。

「何よ、別に間違つては無いでしょ」

「……そうですね」

その後何も解決策を得られないまま、室内は沈黙に満たされた。やがて、話は終わりだとでも言うように天城は大きく伸びをして椅子にもたれかかる。「とにかくもう一度あの子に声をかけてみたら? 成功すればラツキー、変化なしならまた再考するとして」

「はい、そうします」

そして彼女は静かに頭を下げる。部屋を後にした。再び一人になつた天城は、恨めしそうに扉を見つめたまま机に顔を落とす。

「あー……、なんとかならないかな」

「ここにいたの」

真田の声に少女が振り向く。

天城の部屋を後にした真田は、外の空気を吸いに幼稚園の裏門へ向つた。たくさんの子供たちが遊びまわる中、一人寂しげにその様子を眺めるノエル。真田は彼女の隣に腰掛けると、前を見据えたまま静かに会話を切り出した。

「ノエル……私が何を言いたいのかわかる？」

「うん」

「そんなにここにいるのは嫌？」

「嫌」

不貞腐れたように頬を膨らます少女の顔を一瞥して、真田はくすりと笑みを零す。不機嫌を装っているノエルだつたが、その瞳にはうつすらと涙が滲んでいた。

「いやあ私の家はどうかしら」

「迷惑でしょ。ただでさえ狭いワンルームに二人で住むなんて」

「……ならここにいて」

「だから、それは嫌だつて言つてるでしょ！」

思わず立ち上がりつたノエル。その姿に遊んでいた子供たちは驚き、逃げるようになその場を離れて行く。

「……ノエル」

真田は彼女に何か声を掛けようと思つたが、何も言えない。何も聞きたくないと彼女の顔

が語つてゐるかのようだつた。

「大体……私は、私は裏切りなんてしていない!!あのイカれた男があんたを……!!私はあんたを死なせたくないなかつたから……だから私は裏切り者なんかじやないわ!!」

その小さな拳をきつく握りしめて叫ぶ少女に、真田は一呼吸おいて諭すように口を開いた。  
「それでも……それでも研究所はあなたの事情なんかどうでもいいのよ。指示に従わなかつたということは裏切つたと同義。そう考へる連中なんだから」

「……っ」

言い返そくとするノエルの肩を真田はしつかりと掴む。そして彼女の瞳をまつすぐと見据えた。

「あなたが私を死なせたくないなかつたように、私もあなたを死なせたくない。だから、あなたが選ぶ道は二つ。ここに残るか、私のところへ来るか。あなたが私に負い目を感じるのであれば、ここにいなさい。そのほうが安全面でも上だわ」

「でも……!!」

「でもじやない。ノエル、あなたは選ぶの。あなた自身で、あなた自身のことを」  
少女の瞳が揺れる。いや、少女の心が揺れたのか。ノエルは気の抜けた顔で視線を落とした。その様子に真田は慌てて、彼女の肩から手を離す。

「……ごめん。ちよつときつく言いすぎたわね」

何も反応を示さないノエルに、真田はやや体を落として彼女に声を掛ける。

「ノ、ノエル？」

「……バカ」

「え？」

「バカ！バカ！！バカー！真田ちゃんなんて大ッ嫌い！」

駄々をこねる子供のように、ノエルは泣きながら走り出す。その背中を追うことなく、真田は深く息を吐いた。これでも彼女なりに精一杯がんばつたつもりだつたのだ。

「……人の気も知らないで」

走り疲れたノエルは近くのベンチへと腰かけた。下を向いていると涙が次々と零れ落ちそうになり、その度に彼女は涙を拭う。

「私は裏切つてなんかいない……でも、もうあそこへは帰れないのだとしたら」

服の裾を握りしめるのと同時に、彼女の顔もきつく歪む。

「絶対にここに残る事はできない。私を狙っていた人間と同じ場所で暮らすなんて絶対に」

「……私は一人で生きて行く」  
決意を固めたノエルだったが、まるで空氣を読まない彼女の身体は一人手に間の抜けた音を鳴らした。

「……お腹空いた」

朝から何も口にしていない。時刻はもうすぐ夕暮れ時。お腹が空いていて当然だつた。お金もない、帰る場所もない。彼女は途方にくれてうなだれる。

ふと、視界の隅に黒い影が映つた。早くも研究所の連中が来たのかと、ノエルは最大限に

警戒をして顔を上げる。

するとそこには、

「あ」

ノエルの目の前に立つのは少女。それも両手に黄色いビニール袋を抱えた少女だった。呆然とする彼女に対し、少女は何も言わずにその隣に座る。

「何か用」

得体の知れない恐怖ともいうのか、ノエルは彼女が何をしに来たのかわからず、探る様な視線を少女に送った。

しかし当の本人は何てことないようになに、

「夕飯、食べないの？」

「……別に私の勝手でしょ」

そう言いつつも、ノエルの視線は少女の袋から見え隠れするたくさんのお菓子に眼を奪われていた。

「大人數になると思ってたくさん買ってきていたの」

「ふん、私は食べないわ」

「食べて」

「嫌」

「食べて」

「嫌!!」

「食べて」

「嫌だつて言つてるの!!」

本日何度も目の言い問答に、つい疲れを切らしたノエルが怒鳴つた。しかし少女は何も反応を示さず、先ほどと同じ口調で繰り返す。

「作るのは私。だから食べて」

「……っ」

これ以上言い合つても無駄だと思つたのか、ノエルは少女の言葉を無視した。それでも彼女は無言でノエルへと圧力をかける。

「何なのよ、何しに来たの!!」

「お腹空いてる?」

「そんなことどうでもいい」

「チヨコとバニラ、どつちがいい?」

気づくと彼女は両手にそれぞれ二つのアイスクリームを手にして小首を傾げていた。眼の前に突き出される食糧に、思わず喉を鳴らすノエル。

「……イチゴがいい」

最後の意地でノエルは彼女に反抗する。つまりイチゴ味以外は口にしないと言いたいのだろう。ついに少女は諦めて去ると予想していたノエルだったが、

「はい」

彼女はノエルの予想を裏切り、少し戸惑いを見せたものの、袋の中からもう一つのアイスクリームを取り出した。それは紛れもなくノエルの希望した通り、イチゴ味だった。ここで断つては罰が悪い。ノエルは観念して少女からアイスクリームを受けとつた。そし

て少女もバニラ味を手に、二人は揃つて封を開ける。

一口、二口と口にして、ノエルは躊躇いながら少女へと声を掛けた。

「ね、ねえ。名前、何ていうの？」

すると少女は不思議そうに見つめて、

「……アイスクリーム」

「そうじやなくて、あなたの名前!!!」

「奏。九条奏」

「そう」

そして再びアイスを口に運ぶ。寒い冬空の下、二人の少女は公園のベンチに腰をかけ、冷たいアイスクリームを食べていた。

「私ね……帰る場所なくなつたみたい」  
しばらくして、食べ終わつたアイスクリームの棒を手元でくるくると弄びながら、ノエルはぽつりと口にした。

「裏切つたわけじやないのに、他の人から見たら完全に裏切り者らしいわ。でも、だからつて無理やり他人の家に住むのも嫌」  
自分と同じような年代に見えたのか、ノエルは気付くと奏に愚痴を零していた。  
「それより帰ろう。晩御飯作らないと」

「え？」

まるでノエルの話を聞いてなかつたのか、奏はベンチから立ち上がり、彼女に向かつて

当然のように手を差し伸べる。

「私、そこそこ料理はできる。きつと美味しい」

「そんなのどうでもいいわよ。とにかく私はここから動かない。私は帰る場所なんてないの。親もいない、本当の家もない。だから……!!」

「無いなら作ればいい」

その言葉にノエルは言葉を詰ませた。真田の言葉を思い出す。

「自分で選ぶ。」

黙り込んだ彼女を前に、奏は帰路につく。早く用意しなければ、夕飯の時間が遅くなるからだ。

ふと、彼女は思い出したように、ノエルへと振り返った。

「あの家の人はみんな良い人だよ。それと、私は一緒に住んでいいと思つてゐる」  
そして、奏は彼女に背を向ける。その手をノエルは勢いよく掴んだ。

「あの」

奏の視線がゆっくりと彼女に向けられた。一瞬驚くものの、ノエルはしどろもどろになりながら、奏へとこつそりと耳打ちをした。

「おいしいパスタが食べたいわ」

その言葉に奏も小さく笑いかける。

「私もパスタは好き」

恥かしげに、嬉しげに俯くノエル。瞬間、その後ろで何かが蠢いた。

「お……重い」

両手にたくさんの袋を抱えた青年がフラフラとした足取りで歩いてきた。それは二人がよく知る顔、鈴木聰太だ。

「大人數だから買う量はわかるけど、交通手段が何もないってのはどういうことなんだ」  
彼は二人に眼をくれることなく、ブツブツと独り言を呟きながら通り過ぎて行つた。そして数歩過ぎてから気づいたのか、首だけを後ろへ傾け、

「奏、何してるんだーっと、その子は研究所の」

「ノエル」

「そうだつた。というか、二人とも早く帰るぞ。こんなところにいつまでも居たら風邪ひいちまう」

彼も当然のように奏とノエルに帰宅を促す。まるでもう帰る場所は同じみたいな言い方だ。ふと、鈴木の視線は地面に落ちたアイスクリームの袋に眼をやつた。

「おいおい、ゴミはゴミ箱に……って、ん?これ」

さつと奏へ視線を送る鈴木。奏もさつと視線を反らす。

「奏さん、そこに落ちているアイスの包装、見覚えあるんだけど、あのイチゴ味の」

奏は何も言わずに明後日の方向を見ている。沈黙が真相を語っていた。

「これだけは俺の自腹だつたのになあ……」

ただでさえ荷物で沈む肩を更に落とし、鈴木はとぼとぼと帰り道につく。責めるに責められない状況を察したのだろう。次いで奏も彼の後をついて行く。ノエルの手を引いて。

「ちよつ……手なんか握らなくともいいわよ」

「あのまま歩き出しそうになかったから」

むすつと頬を膨らまし、ノエルは奏の手を振り払った。そして、彼女の数歩先を歩き、後ろを向く。

「奏つて言つたわよね」

「うん」

「私は、ノエルよ!!」

「知つてる」

何を今更みたいな視線を向ける奏に、ノエルは顔を真っ赤にして抗議した。

「ちや……ちゃんと自己紹介したかつただけよ!!」

「そう」

「そうよ。それと…………よろしくおねがいします」

消え入るような声でぼそぼそと呟くノエル。奏はそれを聞き洩らすことなく、しつかりと耳にしていた。

そしてー。

「私も、よろしくお願ひします」

魔女の家にまた一人、家族が増えた。

「『泣くな』か……」

改めて先日の自身の言動を振り返る。パニックになつてゐる少女にあそこまで強く言う必要はなかつたと、今更ながら思う。

あの事件から数日が経つた。奏はすっかり元気になつて、毎日楽しそうに過ごしてゐるようだ。

しかし、あの時彼女に強く怒鳴つたせいか、あの事件以来、奏はどこか俺を警戒しているよう思える。無視……とまではいかないが、眼を合わせようとやらしてくれない。俺も嫌われたものだ。不用意に少女の纖細な心を傷つけてしまつたのかもしれない。

「やれやれ……」

最近は先生の家で元気に食客をやらせてもらつてゐるが、どうにも氣まずい雰囲気が流れてくる。というもの、彼女はいつも俺に隣に座るからだ。喧嘩をしているわけでもないのに、会話をすることなく食事をするのはどうにも居心地が悪い。女心はよくわからないが、今はそつとしといたほうが良いのだろう。また奏から話しかけてくれるのを待とうと思つた。

「Mr.Modification」

気づくと、俺は奴の名前を口にしてゐた。奴のその後は未だに分かつていらない。あの戦いの後、先生が真つ黒な衣装で現れた。あれは戦闘服だと彼女は言つていた。ということは、どこかで一戦交えたということだ。何より彼女から僅かに匂う血の生臭さがそれを物語つ

ていた。

結局、あの時は上手い事はぐらかされてしまったので、いつか聞かなければいけないと思いつつも忘れかけている。なんたってあの時は、奏の方が心配だったからだ。

今日の予定は何もない。だから布団の上でゴロゴロとしていると、色んなことを考えてしまったため幼稚園のすぐ近くにある公園へと出かけた。夕飯はそこで食べるつもりでいるからだ。

しかし、結局ベンチで横になつているため考え事は尽きない。

「何もしない大学生はほとんど二ートだな……」

ぽつりと自虐を零して空を仰ぐ。晴天だ、こんな良い日に昼寝をしないでいつする。適當な言い訳をして俺は瞼を閉じた。

しかし。

しばらくすると、急に一段階、目元が暗くなつた気がする。そう、まるで何かが顔の上に覆いかぶさつている様な、

「え」

薄ら瞼を開ける。何故か大きな丸い目をした少女、いや、奏が俺を覗き込むように見下ろしていた。

「え、何!?」

「買い物」

「は?」

単語だけを口にする奏。まるで要点が掴めないまま、俺は瞬きを繰り返していた。すると、彼女は少し口を尖らせて、

「買い物、一緒に行くって言つた」  
その言葉でようやく俺は思い出す。

—あの時の。

「あ、ああ。約束したな。だいぶ前だけど……よし、じゃあ買い物行くか」  
「うん」

\*\*\*

「随分と買うんだな」

大きなカートに次々と詰め込まれる商品。奏は一つ一つ品定めするような顔つきで商品を選んでいく。野菜、魚、肉——奏の買い物ルートに従い店内を巡る中、試食コーナを見つけた。

いつものように、それをつまむ俺の隣で、奏も一つまみする。満足げな表情をする彼女に俺は購入を促すが、まるで節約主婦の鏡のように、「無駄遣いだめ」と一刀両断されてしまった。

大体の買い物は終えたのだろうか、奏はレジの方へと体を向けた。俺も彼女について行く形でカートを押す。

ふと、奏の足が止まつた。視線の先にはアイスクリームコーナ。それも大型スーパーならではの、品ぞろえだ。

「あれ」

「食べたいのか？」

「うん」

これは無駄遣いに含まれないのか。などと無粋な感想は置いといて、楽しげにアイスを選ぶ奏を眺める。

「いくらなんでも多すぎないか？」

「人數増えるからいいの」

既に満杯とも言えるカートに、ぽんぽんとアイスクリームを入れる奏。俺は先ほどからの心配事が更に増していく。

幼稚園からここまで大して距離もない。だが、完全にないわけでもなくわざわざバスや電車を使う程でもないという程度であり、「どうやつてもこの荷物を素手で持ち帰るのは至難の業だよな……」

遠くない未来に待ち受ける労働に、早くも俺は疲労していた。

自転車に乗つてこなかつたことをここまで後悔することになるとは思わなかつた。いや、奏がこんなに買い込むとは予想していなかつたのだ。

タコを初めとする食材たち、アイスクリームにおやつのお菓子。だけならまだしも、誰が頼んだのか数種類の乾電池に季節外れの殺虫剤。他にも芳香剤や子供用のパジャマなど、まるで引っ越しでもするのかという程の買い物だつた。

幼稚園に新しい家族——居候が増えるとは聞いていたが、このような雑多な品を買い込むとは聞いていない。いや、明らかに関係のないものまである。

ふと、あの少女の泣き顔が目に浮かんだ。いや、あの少女の顔はいつも泣きそうな表情をしている。何かに追い詰められていて、細い細い糸がピンつと張り詰めている様な。世の中には俺の知らないことが山ほどあるようだ。周りの人間のことさえ完全に理解することはできない。だから、俺にはあの少女が何故あんな表情をしているのかもわからない。けど、きっとあの子は悲しんでいるのだろう。理由はわからない。俺にできるのは推測とその理解だけだ。

他人という立場に妙に胸が疼いた。

顔を上げると、少し先の所で奏が俺を振りかえつていてくれている。どうやら待つてくれているらしい。

「奏、先に行つていひぞ。俺に合わせていたらお前も疲れるだろ」

顔には一切現れていないが、奏の荷物も相当重いはずだ。

\*\*\*

奏と別れてしまふと、やつと公園が見えてきた。終わりが見えてきたせいか、無心で歩き続けていた足がやけに重く感じる。

「う……」

思わず口からうめき声が漏れてしまつた。あんなに嫌だつた場所に、何故こんな大荷物を扱いで向かつてゐるのか。頭の中を当然の疑問が通り過ぎる。

——先生は、天城紫乃はすごい。

一次著作権だか二次著作権だか詳しい条約の事は知らないが、彼女はそこを上手く突いて協会からロイヤルティを受けていると聞いた。それだけでも生活することはできるはずなのに、先生は一生懸命仕事をして、子供を育てている。立派な大人だ。社会的な面だけは尊敬できる人間だと思う。

でも、つい最近まで俺はあの魔女を憎んでいたのも事実だ。あの三年前の事件。俺が最強だと思っていたあの女は、親友を救つてくれなかつた。何もしなかつた。眞実を教えてくれなかつた。

彼女も、誰も。

知らなくてもいい事実がある。それが危険なことなら尚更だ。理解はできるけど、やっぱり納得はいかない。俺だけが真実を知らないというのは、少し寂しい。いや、悲しかつた。奏の存在がなかつたら、今頃俺はこの先ずっと彼女とは他人でいたのだろう。

ふと、俺は空を見上げた。

—俺は大人になつたら何になるんだろうか。

ずっと憎んでいた彼女は、先生はきちんと生活している。俺はどうだ、あれから何か変わつたか。いや、何も変わつてはいないのだろう。全くもつて、俺はみすばらしい。もしかしたら、奏がいるからなんていうのは言い訳だつたのかもしれない。俺は俺を変えたくて、先生と話をしたくてあの場所に向かつたのかもしれない。

—そう、俺は何も変わつていなかから。

頭の中で色々な事を考えていたせいだろうか、下げていたビニール袋が余計に重く感じられた。重さで伸び切つた袋が俺の手に食い込む。とても痛かつた。

「大人数だから買う量はわかるけど、交通手段が何もないつてのはどういうことなんだ」

気づくと俺は公園に辿りついていた。子供たちがベンチで遊んでいる。

いや、あの子供はー、「奏、こんなところで何しているんだー」と、その子は研究所の

「ノエル」「そうだった。というか二人とも早く帰るぞ。こんなところにいつまでも居たら風邪ひいちまう」

寒い中何をやつているんだか。よく見たら、二人の足元には何かを食べたゴミが落ちていた。

「おいおい、ゴミはゴミ箱に……って、ん?これ

アイスの袋だ。

「奏さん、そこに落ちているアイスの包装、見覚えあるんだけど、あのイチゴ味の」  
奏は俺の視線を避けるように明後日の方角を見つめたままだ。何も言わないという事は、  
そういう事なのだろう。俺の買ったアイスはあの少女、ノエルの腹の中か。

「これだけは俺の自腹だったのになあ……」

何ともやり切れない気持ちだが、この二人が仲良くなるきっかけになつたというのなら仕  
方ない。アイスの一つや二つ、喜んで出そう。そうだ、俺もポジティブにいこう。必死に  
前向きに考えようとは思うが、どうやら俺の体は正直なようだ。先ほど以上に荷物が重く  
感じる。

\*\*\*

「やつと着いた……」

「あらあら、たくさん買ったのね」

ため息と共に荷物を床に置くと、先生が驚いた顔で出迎えてくれた。そして俺たちの背後へと視線をずらし、にこりと笑う。

「思つていたより随分と早い帰宅ね」

「……」

「お腹空いたのかしら？」

「そう!! 私はパスタが好きだから、食べに来た」

「それなら早く作つてもらいましょうか」

「うん」

気まずそうに口を曲げていたノエルは、魔女の掌に乗せられるようにコロコロと表情を変えていく。

ふと、先生の後ろにも誰かいるのが見えた。ノエルの友人であり、奏の担任の先生である真田だ。喧嘩でもしていたのだろうか、二人の間の空気は重苦しいものだった。

「ノエル」

真田が相手の様子を窺うようにゆっくりと少女へと近づいて行く。ノエルも躊躇う様な視線を真田へと投げかけ、ぽつりと、

「さつきは……ごめんね」

その謝罪と共に、真田はノエルの身体を優しく抱きしめていた。

「こっちこそ。ごめん」

真田の謝罪が終わるや否や、二人はその場で泣き崩れた

「一体何があつたんだ」

「空気読んで」

「悪い」

奏に叱られてしまつた。黙つていろということだろう。

「あ、おい、奏!!」

頑張つて空気を読み取ろうと思つていた俺の隣を、奏はすつと通り過ぎる。キッチンに向かうようだ。俺も遅れて中に入ると、奏はすでに調理の準備をしていた。いつもの変わらぬ風景。思わず笑みがこぼれてしまつた。

「聰太?」

「これが平和つてことなのかも知れないな」

「何?」

「いや、何でもない」

\*\*\*

「ベルコル!!どこにいる、ベルコル!!」

名の知れた抵抗作家にも似たような名前が響き渡る部屋。天井はドーム型でできており、床には大理石が敷かれた豪華な作りの会議場だ。普段なら多くの人間が集まり、討論をする場だが今は男以外には誰もいない。今日は木曜日だ。ここで会議が行われるのは水曜日と決まつていた。

「ベルコル!!さつさと出てこい!!いないのか!?」

「私はここだ」

大きな声を上げる男の声に、やつと会場の中央から返事が返ってきた。金色の長い髪に、貴族と思しき品のある服装。一見、素敵なお青年に見えるが、ある一点においてその印象は不可解なものへと変わる。彼はその不可解なーその容貌に不釣り合いな髭を弄びながら、自身の名を呼んでいた男を真つすぐと見据えた。

「友が死んだ!! 私の友が!! これは一体どういうことだ!?」

「友……?」

男の脳内で何人かの顔が通り過ぎる。やがて、一人の男の顔が浮かんだ。先日、単独で魔女のいる地に赴き、派手に拉致事件を起こしたもの、あつけなく魔女の手にかかる死んだ男の顔だ。

「そういえば、死んだな」

「何だその言い草は!! Mr.modificationはそんな簡単に死ぬ奴ではない!! あいつもetcを持つているんだ、空間催眠という特殊な力を持っているんだぞ!?」

頭を抱えて喚き散らす男を、彼は無心な瞳で見つめ返す。

「獣も自身の子が危機に晒されれば、敵を殺して助ける。それと同じだ。ましてや最強の女の子供を誘拐したのだから、それ相応の報いは返つてくると奴もわかつていたはずだ、ケラーー」

ケラーと呼ばれた男は、体を小刻みに震わせながら彼を睨みつけた。

「お前が焼きつけたんじゃないのか!?」

「違う。冷静に考える。彼に無理やり仕事を回したのは全て穩健派の仕業だ」

「……」

何を言い返せばいいのかわからないといった表情で、ケラーは俯いた。男は依然として変わらぬ表情で続ける。

「しかし、結局は Mr.modification。彼自身が犯した失態だ。大量拉致事件なんでものを仕出かすとは……本当に気が狂つてしまつたようだね」

「奴は!! Mr.modification は……研究をしている時だけは誰よりも真面目だった。三年前のあの事件からだ、奴がおかしくなつたのは。そんな人間に任務を任せるだなんて、間違つてているに決まつていてる」

ケラーは拳を握りしめ、必死に自身を押さえこんでいるようだが、言葉の端々からは怒りがにじみ出ていた。そんな彼を一瞥して、男は意見を述べる。

「穩健派が邪魔な奴らを排除しようとしているんじやないか？」

「いいや、研究所は個人主義の集まり。権力を握りたいだけなら、そんな馬鹿なことはしないはずだ。それに、そんなことをするなら我々、急進派だろう。三年前の事件以降、我々の勢力は弱まり、今は争いを好まない穩健派が実権を握つているじやないか」

的を射ている彼の意見に、男はそれ以上何も言い返さなかつた。代わりに、

「そういえば、思つていたより遅い報せだつたんだな」

「何？」

「いや、何でもない」

「お前……やはり何か知つていいな？」

今にも掴みかかりそうな顔でケラーは男に詰め寄つた。その様子に男も観念したように、

肩をすくめて話し始める。

「私はただ奴が事を起こす前に電話をしただけだ。魔女のいる地は私の担当領域だということを伝えるため、奴の安否を確認するためには。結果はこの様だが」

「……その時に俺に教えてくれれば、こんなことには」

「ケラー、君は思つてたより純粹な人間なんだな。Mr.modification のように無知でもなく、ゴトーのように博識でもない、あるいはフーゴのように凶悪でもなく、ロベルトのようく生死に無頓着でもない。そんな君がどう戦うのか見てみたいよ」興味深げに話す男に対し、ケラーの脳内に浮かんだ言葉は、

「死」 だつた。

「……あーと俺は死ぬだろう」

「そう、君は死ぬ。自身の巣を荒らして、老いた獅子に食われるようにな」

「何が言いたい」

「今回の Mr.modification の件で穩健派の動きも少しは弱まるだろう」

「そうか」

落ち着きを取り戻したケラーに男は付け加えるように、

「原論主義者の三人をこちらに引き入れた」

「本當か？」

「マルセン、ハイティントン、ルイーゼ」

「あの三人か」

マルゼン、ハイティントン、ルイーゼ。彼らは生物学に近い研究をしていた。ケラー自身は殆ど接点がなかつたものの、名前だけは知つてゐる程度だ。本来、研究を進めるためには多くの資金が必要となる。しかし、どこにも所属することのない原論主義者には当てにする所がない。そこで穩健派や急進派の研究を手伝い、資金を得ようとしていたのが彼らだった。

「マルゼンは最近どうしているんだ?」

「彼は相変わらず一人で研究を続けてゐる。元々前に出てくるような人間でもないが、彼も彼で色々と大変な状況にいるからな」

「ハイティントンは?」

その名前を聞くと、男は一際嬉しそうに頬を緩ませた。

「奴は面白い男だつたよ。研究所でも数少ない外向的な人間だ。まあその性格のおかげで彼は中立という立場にいるけどね」

「中立?なら俺たちの仲間になつたのではないか?」

「彼も研究者。自身の研究のためなら躊躇しないというわけだ。それに彼にはあくまで中立という立場を利用してもらう。穩健派を抑制するのに協力してくれるようだ」ケラーは成程と頷くと、少しだけ間を置いて慎重にもう一人の名を上げた。

「ルイーゼ……か」

「ああ、三年前に研究所で改造人間を作つていたあの女だ」

【冰山】とも呼ばれる女をよくこちら側へ引き入れることができたな

ケラーの言葉に、なぜか男は小さく笑う。そして、  
「君は知らないのか。彼女は三年前のショックの時、既に死んでいるよ  
「なに!?」

どういうことだ、という言葉が続くのだろう。ケラーは開いた口を塞げずにいた。そんな彼を見て、ベルコルは彼を落ち着かせるように手を振つた。  
「悪かつた、この言葉では語弊を生むな。正しくは瀕死状態だった、とでもいうべきか。事実、この三年間ルイーゼを見かけなかつただろう」

「あ…ああ」

彼が指摘されるまで気づかないのは当たり前だ。この研究所の人間自体、他人に興味を持つことはめったに無いからだ。

「三年前の事だ。ショックの現場で、私は瀕死の状態にあつた彼女を見つけた。そこである考えが浮かんでね、彼女を研究所に持ち帰り、あれに浸したんだ。改造人間を製造する、あの培養液に」

「なるほど、生かすためにMr.modificationと共にあの女を改造人間にした。そういうことか」

納得した顔でうなずくケラーに対し、ベルコルの顔は晴れない。

「完全な改造人間にできたわけでもないがな。まあ、その件があるから彼女はこちら側につくしかなかつたというわけだ」「それでルイーゼに課した任務は何だ?」「フランスだ」

ケラーの質問にまっすぐと答えることなく、男は天井を見上げた。

「探し物を見つけるために、君もよく知っている男に接触させていた。彼は文献に関する知識を持つ人物としては最も優れていると私は思っているからね」

「いいから、早く答える」

男の回りくどい回答にケラーは先を促す。そして、男は告げた。

〔etc の文書〕

「なつ……!!」

先ほどの一件よりも強い衝撃だつたのだろう。ケラーの目は大きく見開いたまま、男を凝視していた。

「私たちが文書を探している最中、偶然協会も同じ探し物をしているという情報が入った。そう、それはつまり彼ら協会も文書を持っていないということだ。etc の現象について述べられた唯一無二の文書。何百年もの間、協会が保管していたというものをわざわざ彼らが捜している」

〔盗まれでもしたというわけか〕

「元々、存在すらしていなかつたという可能性もあるがな。ずっと保管していたとはいえ、それを見たものがいるかも怪しい。私も何百年もの長い間ずっと探しているが、協会が持つてているという情報はいささか信憑性に欠けていたからな」

〔何百年?〕

「いや、何でもない。気にするな」

奇妙な発言に首を傾げるケラー。そんな彼の様子を気にすることなく、男は続ける。

「とにかく、君ならあの本の価値がよくわかるだろう。それにあの本が無かつたが故に、etc の概念を完全に把握することができなかつたがために、我々は三年前の敗北を味わつたのかもしない」

「では、その本を探しだし、研究をした後再び我々は動き出すというわけか」

「稳健派の承認が得られればな。以前の半分にも満たないこの人数で」

「でも、着実に味方は増えてきているじゃないか」

身を乗り出すケラーに対し、ベルコルは声を落として、

「昨日、失敗の報せが来た」

「失敗? どういうことだ?」

「冰山とはよく言つたものだ、氷が解けたら水になつたとでもいうのか。ルイーゼが裏切つた。改造した時に感情の幅を広げ過ぎてしまつたようだ。ああ、心配することはない。後始末は既に済ました」

淡々と述べるベルコルに対し、ケラーは再び首をうなだれた。大理石の床に中年の男の顔が映る。これでも彼は急進派の中では若い方だ。目の前の男も外見は二十代に見えるが、実際はケラーよりも上なのだろう。それほどに男からは貫禄のようなものが溢れ出ていた。

「……etc の文書はあつたのか?」

「いや、歐州にはないという結果に至つた」

「では、どに?」

ケラーの問いかに、ベルコルは口の端を上げて答える。

「それは今回の邪魔者が教えてくれていてる」

「邪魔者？」

「ああ、ルイーゼの裏切りには二人の邪魔者が原因でね。お前も良く知っている空間創造者と魔女の弟子だ」

「魔女の……ではあの女が本格的に動き出すのか」

「その可能性は低くない。あの女が介入してきたという事は私と再び戦闘するという意志なのかも知れない。だが、そもそも何故あの女が介入してきたかが論点だ。おそらくあの女も我々と同じ目的だつたのかもしれない」

「つまり、私もある女のいる地へー日本へ向かえと?」

先を告げるケラーに、ベルコルは困った様な顔で笑う。  
「そういうことだよ。既にフレゴとロベルトは日本に向かっている。ゴトーはここに残つてゐるが」

「しかし、議会の承認も受けずに。いいのか?」

不安げな顔をするケラーに対し、ベルコルの笑みは崩れない。

「むしろ奴らにとつては好都合じゃないかな。私は彼らの目の上のタンコブだし。自滅してくれるなら大歓迎だろう。まあ、自滅するつもりは毛頭ないがね」  
真意の見えない笑顔にケラーは黙つて頷いた。そして、その笑顔から逃れるように彼は会議室を後にする。大きな音と共に、重厚な扉が閉まる音が響き渡つた。

「ここまで響き渡るなんて……やはりこの部屋は凄い、この建物は素晴らしいな。いや、これを作り上げた人間という生き物こそ、素晴らしい」  
一人残されたベルコルは天井を見上げ、小さく呟く。

「金色の魔女がついに動き出す……」  
ふと、ルイーゼの顔が浮かんだ。彼女の死はベルコルにとつては痛手だつた。味方は一人  
でも必要だからだ。

——味方……仲間……同僚。

ベルコルの脳内に再び映像が流れる。遠い昔の記憶だろうか、鎧をまとい、馬に跨り、刀  
を振るつている。

——はたして、いつの記憶だろうか。

ベルコルという名も、男にとつては本当の名ではない。そんなものはだいぶ前に忘れてし  
まつたのだ。この名も彼自身が好きな作家の名を借りていてるだけである。

——研究所創設当時からだいぶ時が経つたな。

ベルコルは感慨深げに周囲を見回した後、立ち上がつた。  
「この姿で会うのは二回目……いや、三回目になるのか」  
ゆっくりと扉へと向かうベルコルは、女の顔を思い出す。  
い女の顔。

「ふふふ……ふはははは」

気づくと、男の笑い声が部屋中に響き渡っていた。

「やつと再会できる……やつと元の姿で会えるのか、キルヘン!!」

——の行動は何度繰り返されただろう。

——の行動はいつから始めたのだろう。

——もうその記憶さえない。

「いいよ、行つてあげるよキルヘン。愛する女のためなら。何度失敗しても、何度命をかけようとも。君が望むのなら」  
部長、ベルコル、いくつもの名で呼ばれてきた男は歓喜に震えながら、部屋を後にした。  
急進派が本格的に動き出す。三年ぶりのことだった。

\*\*\*

彼女に関心を持っていた人間は殆ど三年前に亡くなってしまった。余計なことを追い求め、余計な目にあつたのだ。それに引き換え、ロベルトは彼女になど全く関心がない。彼の研究分野は別のものであり、その研究結果が出さえすれば彼は満足なのだ。

だが、ロベルトは今、急進派に属している。自身でもこの状況がおかしいのか、彼はつい口元を緩めた。穩健派の方が明らかに安全は保障されているのに、何故こちらに属したのか。彼は自身に訊ねる。意外にも答えはすぐに出たようだ。

—より多くのことを知りたい。

穩健派ではできないことだ。かと言つて一人で研究を続けるには効率が悪い。だとしたら、結論は一つしかなかつた。急進派と親しくなる。このように考えたロベルトは、十年以上もの間彼らと行動を共にしている。しかし魔法を扱う彼らとは違い、ただの人間であるロベルトは、急進派の連中を同じ人間として見ることはできなかつた。

「ああ、めんどうくさい」

ロベルトの口癖だ。どこかに所属して活動するのは彼に向いていない。結果、大学からも締め出された彼が辿りついたのがこの研究所だった。

ふと、彼は三年前の出来事を思い出す。

ロベルトは当時日本におらず、南米で活動していた。多くの仲間が戦いに巻き込まれ、そして死に絶えた。協会……彼自身、協会の下した判断、行動は間違つてはいないと思つてゐる、だが許容することはできなかつた。

口元という口実を元に、起こつたあの争いはやがて金色の魔女の乱入により、三つ巴化。研究所も一体となつて応戦したが、結果的に彼らは敗北した。莫大な損害と共に。その後、急進派の勢力は格段に落ち、実権は穩健派へと移つた。

もちろんロベルトは権力などといったことを気にしてはいない。自身も議会の一員だが、口を出すことはめったにないからだ。

ロベルトは大きな欠伸を欠いて、椅子に背を預けた。窓から見える空は陰鬱で、少し肌寒さを感じさせる。

勢いを失つた急進派。戦いの責任を負わされた彼らを支持する団体もない。研究費用も格段に減つてしまつた。確かに痛手ではあつたが、ロベルトは研究をやめることはない。彼の研究は主に爆弾と関連している。火薬を作るところから自身のオリジナリティを加えていく。世間的には只の爆弾魔と蔑まれるかもしれないが、彼は自身の作品がどのように使われるかなど全くどうでもよかつたのだ。

ロベルトは研究者である。

携帯可能な小規模な爆弾から、ミサイルのような大規模なものまで、彼は多くの爆弾を製造した。しかし、それも三年前の話だ。現在の彼は没落した勢力の一研究員にすぎない。そんな彼を訪ねてきたのがベルコルだった。

『彼らの敵を取りたくはないのか？』

ロベルトは、研究所でのその様な言葉を聞くとは思つてもみなかつたのだ。個人主義の集まりであるこの場所は、他人がどうなるうと関係ない。

しかし、ロベルトは何故か断る事ができなかつた。ベルコルは彼が仲間になるや否や、すぐに入り口を紹介した。改造人間、そして爆弾を製造しろという意味だつた。ルイーゼ……以前は冰山と言われていた彼女は変わつていた。ベルコルが三年前の事件で瀕死の彼女を改造人間にした際、感情を開放したからだ。

「本来の彼女はあんなに優しい女だつたのか」  
彼女と最後に対面したのは、ロベルトが改造人間を製造した時だつた。Chaser と The dreamer が脱走した後、いくつかの制約を増やす際、感情の制約、考え方の制約、そして、『黒づくめにしてくれ、そう、まるで影のように』

夜間の活動をメインにさせるためだつた。三体の【影】を製造した後、彼はルイーゼを連れて欧洲へとむかつた。そんな中、ルイーゼの裏切り。彼女を処理したのは、ロベルト自身だつた。

脳内に浮かぶルイーゼの最期を、かき消すように彼は再び仕事に着手した。  
ロベルトは今度、フーゴと共に日本に行く命を受けていた。フーゴ……無愛想で必要な時以外、めったに口を開かない男だ。ゴトーは研究所に残つてここを守り、マルセンは原論主義者と共に動くと彼は聞いている。そしてベルコルとケラーも遅れて日本に向かう予定だつた。これほどの人間が日本に向かう。etc の文書という只の紙きれのために。  
ロベルトは呆れたようにため息を零し、笑つた。

そして現在、無事に日本に到着したロベルトとフーゴは魔女の拠点に向かつてゐた。彼女の仲間を一人一人処理した後、彼女と対決する予定で彼らは動いてゐる。

「相変わらず無口なやつだ」  
自身のすぐ後ろを歩く男を見て、ロベルトは愚痴を零す。  
「ああ、だるい。面倒臭い」  
「だるいと面倒臭いは関係ない」

「あんた……やつと喋つたと思つたらそれかよ」

「俺はあまり喋りたくない」

「そうかよ」

あまり気分がいいとは思えない表情で彼らは歩く。改造人間と影は既に隠していた。彼らの活動は夜がメインだ。

「魔女の一行は全部民間人だつたな。全く笑わせる」

そう吐き零すと、ロベルトは帽子を深く被り直した。公園を通り過ぎる。

「へえ……」

顔なじみの改造人間の姿を視界の端に捉えた。フーゴも彼女に気付いたようである。

「面倒臭いけど、どうする？」

ロベルトはフーゴに振り返る。彼は静かに首を振り、

「手を出す必要はないと思う」

「そう？じやあそのままで行こう。あんなの今更狙う理由もないしな」

ロベルトは改造人間の隣を歩く、青年と少女の顔を頭の中に記憶し、その場を通り過ぎる。

普段、怠け者のロベルトだが仕事はきちんとこなしていた。

「それにしても、何で俺らはこんな場所で仕事をしなければいけないんだ？」

ロベルトが自嘲気味に零した愚痴に誰も返事をしてはくれなかつた。何も言わず後ろを歩くフーゴに苛立たしくなつてきた彼は、視線だけを彼に向ける。

「おい、何とか言えないのか」

「……」

「全く世間話くらい付き合つてほしいものだ」  
依然として、フーゴは何も話さない。そんな彼の態度に構うことなく、ロベルトは声を掛ける。

「ベルコルの計画に参加した理由は何だ？」

やはりフーゴからの返事はなく、ロベルトも返答を期待してはいなかつた。会話することを諦め、彼は路傍の石を蹴り始めた。彼が石蹴りに夢中になり始めた頃、やつと後ろから中低音の声が聞こえてきた。

「多分……君と同じ理由だろう」

一瞬、ロベルトは何の事かと思いかけたが、すぐに先ほどの返答だと思い至つた。

「俺と同じ理由？あんた俺のこと何の知らないくせに、よくそんなこと言えるな」

気に入らない返答に、気分を損ねるロベルト。続きを述べるかのように、再びフーゴは口を開ける。

「もしかすると、我々は個人主義ではなかつたのかもしれない」

「人間は社会的な動物であるつて言いたいわけか。素敵な考え方だな」

「別に反論はしない」

気づくとフーゴはロベルトより前を歩いていた。慌てて彼はフーゴの前を歩きなおす。

「夜までまだ時間がある。昼間の内にできることはやつておくぞ」  
相変わらず返答をしないフーゴ。そんな彼の態度にロベルトも慣れてきたのか、あまり構う事はなかつた。

「俺は少し用事がある。あんたは先にアジトへ行つていろ」  
フーゴは小さく領き返す。そしてロベルトが居なくなつた後、彼は静かに息を零した。  
「ああ……うるさくて耳が痛い」

\*\*\*

リニア・イベリンはのんびりと日々を過ごしていた。仕事も無期限の休暇をもらい、心配することは何もない。彼女の友人、鈴木聰太はこの事を聞き非常に恨めしげな顔を返していたが、彼女にとつて、この様に一つの場所に留まり続けることはとても窮屈だつた。幸いにも宿となる場所は彼女の師であり、寛げる空間だつたのが救いだ。リニアは先日の戦いで深手を負い、現在も通院を続けている。今もその病院からの帰り道だつた。肉弾戦を主にするからには、負傷する箇所にも気を配らなければいけない。そんなことも忘れ、先日の戦いでは大暴れしてしまつた。

しかし、彼女は全く後悔をしていない。反省は少ししているようだ。口元をゆるめながら歩く銀髪の女性。街ゆく人々はその特異な容姿に目を惹かれて行く。初めの頃こそ、この視線が気にかかるついた彼女も、今では得意げな顔で町を闊歩していく。このような視線を受けるのは世界中、どこに行つても同じなので慣れてしまつたのだ。

「銀髪なんて珍しいでしよう」

偽物の髪、元々彼女は濃げ茶色の髪だつたが、色々とあつてこの色に変わつたのだ。一種のトレードマークであるこの髪色はやがて、「銀髪の魔法使い」というあだ名に変化した。そのあだ名もリニア自身、結構気に行つてゐる。

「まあ。最近はトラブルメーカーなんだ名もつけられているけど……」  
しかし彼女も否定できないのが事実だった。

あの事件後、彼女の唯一の気がかりだつた奏の精神も安定している。リニアにとつて何も危惧する所がなく安心していた。ただ一点を除いては。奏はあの事件以来、あからさまに鈴木聰太を避けていた。彼に会えば顔を赤くして逃げ、普段以上に口を固く閉ざす。見るに見かねた彼女も奏に訊ねるが、「恥かしいから」としか返つてこない。

「本当に聰太は……一体何をやらかしたのよ」

ある程度、彼女の中でもいくつかの予想はたつていた。単に子供扱いされることに慣れていない奏が、恥ずかしがつていてるだけというのが彼女の中では有力だ。  
「もしくは……」

リニアはすつと名探偵のように口元に手をあてる。

「乙女の純情、恋の芽生えか!?」

瞬間、相手の顔が脳内に浮かび、リニアは大きな声で笑い出した。

「そんなわけないか!!」

いずれ時間が解決するだろう。そんな楽観的考え方の元、彼女はこの問題を終わらせた。

「さてと、お腹もすいたことだし。さつさと家に帰ろう」  
相変わらずの笑顔を浮かべながら、リニアは帰路につく。  
「るーるるーるるー」

適当な鼻歌交じりに、今晚のメニューを楽しげに想像する。こんな様子を見たら協会も研

究所の連中も呆れてしまうかもしれない。そんなことを頭の隅で考えつつも、彼女は鼻歌をやめない。いつ来るかもわからない敵を、ただ震えて待っているのは彼女の性には合わないのだ。

今や金色の魔女含め、一勢力であるこの地に研究所の連中が攻め込んでくるのは明らかである。そして研究所が動けば、協会も動く可能性が高い。高いというだけで、絶対ということではないが。協会も状況によっては手を引く事もあるだろう。そのためには金色の魔女は著作権協定等で自身の地位を固めているのだ。

本当にすごい人だとリニアは思う。リニアは彼女の正体を知らない。あの魔女がどのようなに戦っているのか、彼女が本気を出したらどうなるのか。リニアの目に映る彼女は、いつも平然としていて、怠け者でたまに鋭い事を口にするマイペース人間。これがリニアの中での印象だからだ。

—知つているようで何も知らない。

これが真実だ。ふと、リニアは三年前を思い出す。

—あれは戦争だつた。

日本国内ではそれほどの被害には至らなかつたが、他国ではほぼ全面戦争にまでなつたといふ戦い。彼女独自の調査では、やはりEvaは一種の起爆剤にすぎなかつたようだ。要は

戦いを始めるきっかけが双方とも欲しかつたのだろう。彼女の視線はゆっくりと空を仰ぐ。無駄に明るかつた。

「冬の空つてこんなものか」

再び歩き出したリニアは今後の事を含め、こちら側の陣営の顔を思い浮かべた。赤城周と天城遊幽。しばらく彼らとは顔を合わせていないリニア。二人は現在、外国へ旅行しに行つたと魔女から聞いている。リニアは遊幽を意外と気に行つていたが、彼女はあまりリニアを良く思つていなか、いつも不機嫌な態度をとつてゐる。それがまたリニアには逆効果で猫みたいで可愛いと楽しんでゐるようだ。赤城のことよりニアは気に入つており、遊幽にお似合いの男性だと常々思つてゐる。

「私もあんなお似合いの人いないかな」

ぱつと彼女の脳内に浮かんだのは鈴木聰太の顔だつた。

「い、いやいや。それはないでしょ!!」

恥かしさのあまり、思わず拳を振りまわすリニア。力加減もできずに近くの壁には大きな穴が空いてしまつた。

「あちやー……やつてしまつた

このままでは自身が犯人呼ばわりされるに違ひない。彼女は頬を搔いていた手を降ろすと、「こういう時は逃げるが勝ち!!」

逃走姿勢に入った。その時だつた、「

「リニア・イベリンだな」

「つ!!」

突然の出来事だった。リニアが反応する前に、彼女の身体には既に銃痕がついていた。

「……消……音機」

確認するように咳いた後、リニアはその場に倒れた。

「ああ、面倒臭い。なんだこれ」

微かに聞こえる声、男は帽子をかぶっていた。彼女の意識はそこで途絶える。

\*\*\*

職員室に電話の音が鳴り響く。

「はい、ひまわり幼稚園です」

天城紫乃はいつも通りに受話器を取ると、慣れた調子で言葉を続けた。既に他の職員は退勤しており、室内には彼女一人。

「あら、珍しいわね。そつちから電話をしてくるなんて」

少し驚きを含んだ表情を見せる彼女の顔は、口元に微笑を浮かべているあたり彼女にとって好意的な人物からの電話のようだ。

「なるほど」

しかし、その顔は徐々に陰りを見せ始めた。何かが起きたと言う事は明白である。

「わかった、すぐに行くわ」

その言葉を最後に、天城は受話器を戻した。そして何をすることもなく、呆然と彼女は机の上を凝視している。そこにあるのは未だ目を通していない書類たち。否、彼女はそれら

に目をくれることなく脳内を巡る思考に注視していた。

しばらくして、自身の顔が強張つている事に気付いた魔女は、何かを切り替えるように頬を軽くつねると椅子から立ち上がり、そのまま冷蔵庫へと向かつた。いつものように、いつもの飲み物を取り出し、口に含む。

「ふはっ……よし!!」

勢いよく飲み干した彼女は、それをゴミ箱に捨て入れ職員室を後にして、行き先は皆が集まっている台所。魔女は部屋の隅から、少しだけ顔をのぞかせた。鈴木と奏が流しの前で調理をし、その様子を物珍しげに覗くノエル、そんな彼女を微笑ましげな表情で眺めている真田の様子が魔女の目に映る。

「……どうしようかな」

ふと、彼女の口から洩れた言葉も今の彼らには聞こえていないようだ。

「奏、これも切つてくれ」

「わかった」

「ねえねえ、これ何?」

忙しく調理する鈴木と奏の後ろで興味深げに訊ねるノエル。鈴木も何てことないよう答えていた。

「パプリカだよ、パスタにいれる」

「パプリカ?」

「ピーマンのお友達みたいなもんだ」

「え……ピーマン？」

若干、顔を引きつらせるノエル。鈴木はその一瞬を見逃さなかつた。

「食つても死なない。ちゃんと食べろよ」

「……食べないとは言つていない」

ふいつと顔を反らした彼女は、そのまま逃げるようすに真田の元へと走つていつた。

「あの男、私をいじめる」

「それは困つたわね」

「さつき私がイチゴ味のアイスクリーム食べたから、ああしているの」

まるで子供の泣き言を聞き入れるように、真田は彼女の頭をそつとなでる。しかし、その会話を聞いていた鈴木はすぐに彼らへと向き直つた。

「ちょっと待て、俺はそこまで心の狭い男じゃない」

「私はただ貰つたから食べただけ、私は悪くないから!!」

「悪いとか悪くないの問題じやなくてだな、俺が自腹で買つたものをお前は食つたつてこ

とだけ認識しとけ」

それでもなお、ノエルは真田の影に隠れて舌を突き出す。鈴木の言葉は一切、彼女には響いていないようだ。悔しげにため息を零す鈴木の裾を、ふと、何かが引っ張つた。

「聰太、これ。パスタ、もう入れていい」

「ああ、そうだつた」

どうやらつい後ろの相手に専念してしまつていたようだ。鈴木は慌てて調理を再開した。

そんな彼を横目に、奏は炊飯器の表示を確認する。

167psd

「なあ、奏。何で米も焚いているんだ?今日はパスタだろ?」

「ご飯にソースかけて食べる人もいるから」

「……あまりおいしそうとは思えないな。そいつの舌は大丈夫なのか?」

「だめかも」

揃つて二人の頭に浮かぶ完成イメージ。その画に合う人物の顔は一人しかいなかつた。

「そんな穿った食べ方する奴つて……もしかして葵か……」

奏は何も言わない。だが、逆にその沈黙は明らかに「そうだ」と言つているようなものである。

「奴ならやりかねん……」

そのように結論を下し、彼は調理を再開した。

「そういうえば真田さんつて料理するんですか?」

冷蔵庫から買つてきたばかりのタコを取り出し、鈴木は真田へと声をかけた。彼女はまさか自分に話しかけてくるとは思つていなかつたのか、少し驚いた顔をしたまま、

「ええ、私も一応一人暮らしの身なので」

「へえ。じやあたいていの物は作れそうですね」

「い、いえ!!一人暮らしの人間が必ずしも料理上手だなんて思わないでください!!」

「あ……なんか、すみません」

顔を赤くして俯く真田に、どこか罪悪感を覚えた鈴木。そんな彼の足もとに綺麗な横蹴りが入つた。

「真田ちゃんを困らせないで」

「痛ッ……お前、こんな性格だつたのか」「残念ながら、そのようね」

感情と思考の制限が解除された改造人間、いわば彼女の本性のようなものだ。改造人間と雖も、後ろの真田と違い、それぞれ人と同じく個性があるということである。この事実に鈴木は、恨めしげに彼女らの顔を見比べた。

すると、今度は違う足にも蹴りが入る。

「聰太、ゆですぎ」

「やべっ」

慌てて、コンロの火を消す鈴木。だが、パスタを湯切りするにも置き場所がなかつた。

「タコは後でするべきだつたな」

手順の悪さに肩を落とす鈴木に対し、奏は何も言わずに自身の作業をこなしていく。

台所は平和な日常、そのものだつた。魔女はそんな光景を端から眺めたまま、じっくりと考える。今、この場で口にしていいものだらうかと。

「みんな」

彼女の呼び掛けに四人の顔が一斉に同じ方向を向く。一瞬、躊躇つたものの魔女は静かに口を開いた。

「リニアが拳銃で撃たれた

「な……!?」

鈴木は口を開けたまま動かない。奏の顔も一気に色を失っていく。

「今はもう病院にいるから大丈夫よ」  
「容体は!?」

鈴木の質問をかき消すように、彼の隣から皿が割れる音がした。奏だ。彼女の足元には破片が散らばっていた。その音で冷静さを取り戻した鈴木は、

「どこの病院だ」  
多少落ち着いたものの、その声は未だに焦燥を帶びている。だが、魔女の予想よりは動揺をしていないようである。

——少しば成成長したわね。

「……知り合いの病院よ、今から私も向かうところ」

「私も行く」

鈴木がエプロンを解く隣で、奏も準備をする。だが、彼はその手を掴んだ。

「だめだ、奏は夕飯を作らなきやいけない。大丈夫だから、大人しく待つてくれ」

「……わかった」

ほんの少し間があつたものの、奏はしつかりと鈴木の目を見据えたまま深く頷いた。

突然、バタバタとし始める台所。ノエルと真田は置いて行かれたように、その様子を見ていた。

——俺は今どんな顔をしているだろう。

きつと見るに堪えないだろうな。

病院に着くや否や、俺は夢中で病室を目指して走った。心臓が痛い。まるで張り裂けそうだ。俺は部屋番号を確認すると、息を尽く間もなく勢いよく扉を開けた。

「よつ!! 思っていたより随分早いね」

「え……」

「そんなに急いできてくれるとは思わなかつたよー」

ケラケラと笑う彼女は普段通りだ。思わず呆気に取られた俺は、ちらりと横目で先生の姿を窺う。彼女はいつになく真剣な顔でリニアを見ていた。そして、彼女は唐突に俺の額に手をかざす。まるで熱でも測る様な仕草だ。

「……何だよ」

「いや、別に」

歯切れの悪い回答の後、再び先生はリニアへと向き直つた。奇妙な心地を覚えたが今はそれどころではない。

「お前!! 拳銃で撃たれたんじやないのか!?」

「うん、撃たれたよ。すごい痛かつた」

「いや、痛いで済む話じやないだろ」

「いやいや、痛いで済む話だよ」

そう言うと彼女は、サイドテーブルを指さす。

「普段から襲撃されたことはあつたから、防弾チョッキ位は着ているの。ハンスがくれた使い捨てのやつ。まあ、今回は至近距離で火力もあつたし銃口も大きかつたから、いつもより大事になつちやつたんだけど」

「はあ……」

目の前に着きだされる防弾チョッキを、俺は呆然とした顔で眺めていた。とにかくリニアが無事だと言う事は確からしい。先生も安心した表情を浮かべると、隣にいた医師へと声を掛けた。

「それで？」

「ああ、見ての通り健康そのものだ。まあ、当分無茶なことはしない方がいいとは思うが。今回の件も防弾チョッキのおかげとはいえ、無傷ということもない。派手に暴れて傷が開いたら、今度こそ命に関わるかもしれないからな」

「はーい」

医師の忠告に軽い調子で返事をするリニア。彼も呆れたようにため息を零した。

「おい、紫乃くん。彼女も君の弟子か」

「ええ、私の弟子ね」

「そろそろいい加減にしてほしいな。いくら私が事情通だといつても面倒事は巻き込まれたくないんだ」

「はーい」

この弟子あつて、この師ありといふことか。医師はやれやれと肩を落としたまま、俺たちに背を向けた。

「私がすべきことは終わつた。これで失礼するぞ」

「弟子がお世話をになりました。ありがと」

「しばらくは控えてほしいね」

「ごめん、ごめん」

まるで旧来からの友人のようなやり取りを終え、彼は病室を後にした。

「先生、あの人とやけに親しげだな?」

「ああ、友人よ。日本に来る前からのね。ここまでこの病院を大きくしたのもすごいけど、まだまだ現役で働く変わり者よ。腕のいい人間もいるんだから、そろそろ下に引き継がせればいいのにね」

「へえ」

「彼もあんなおじいさんになつて……一方の私は変わらずか……」

寂しげに零す先生の瞳は、どこか遠くを見ているようだつた。

「ところで、リニア。よくこの病院まで辿りつけたわね」

「あ、いや。それが私もよくわからなくて……気づいたらベッドの上にいたというか」

「誰かが通報したつてこと? 何にせよ、運が良かつたわね」

そつとりニアに微笑んでいた先生は、次の瞬間すつと目を細めた。

「どんな奴だつた?」

彼女の空気が変わつた。おそらく犯人のことを聞いているのだろう。対するリニアは申し

訳なきそうに、頭を搔いていた。

「実は……よく思い出せないんです」

「記憶の混濁かしら」

「いえ、そうじやなくて。顔を見なかつたかも」

「狙撃されたわけじやないでしょ？」

「そ、うなんだけど、そ、うじやなくて……確、か帽子を深、く被、つて、いた」

リニアは何とか思い出そうとしているのか、腕組みをしてうなり始めた。

「氣絶する前、声が聞こえた……男の声。面倒臭い……とか言つていたよ、うな」

先生は相槌を打つ事もなく、口に手を当てて何かを考えている。

ふと、リニアが何かをポケットから取り出した。紙きれだ。

「これ。私の服の中にあつたの。見覚えがないんだけど」

先生は彼女からそれを受け取り、中を開くと、どこか驚いた表情を見せた。まるで宝物でも見つけた様な、そんな顔だ。

「先生？」

リニアも訝しげな視線を彼女に向ける。すると、先生は唐突に声を上げて笑いだした。

「お、おい大丈夫か？」

「どうしたの？」

一人、勝手に笑いだした先生を前に、俺もリニアも訳がわからずになった。一体何が書かれていたのか、俺は先生の手元から紙きれを受け取った。

『墓地の前でまた会おう』

「どういう意味だ？」

疑問符を浮かべる俺に、先生はとても上機嫌に答えてくれた。上機嫌というよりは若干の狂気さえ感じる。

「研究所の奴らからの挑戦状だよ、動くという合図をご丁寧に教えにきててくれた。そう、それは一種のメッセージ。この言いまわし、あいつしか考えられない」

「あいつ？」

先生は俺の質問に答える事はなかつた。

「リニア、今日はここで大人しく寝ていいなさい」

「嫌です。私はまだ動ける」

無駄に腕を振り回し元気アピールをするリニアだったが、先生の顔は変わらない。

「私の言う事が聞けないの？」

「聞けないって言つたら？」

射抜くような鋭い視線を向ける先生。だが、リニアも引き下がることはなかつた。根負けしたのだろうか、先生は付き合つていられないともいうように俺たちに背を向けた。

「好きにしなさい。けど、一度でも痛い、動けないとか言つたら、今度は病院に縛り付けられるからね」

「はーい」

そしてリニアはベッドから起き上がりると、すぐに外に出る準備を始めた。

三人揃つて病院を後にする。

北風がとても冷たい。暖かかった室内との温度差に、俺は妙な違和感を覚えた。

\*\*\*

前を歩く二人の背を見ながら魔女は思わずほくそ笑んだ。弟子の安否によるものでも、男女が連れ添つて歩いているからでもない。

—餉にかかるた!!

欧洲で古文書が見つからなかつたのなら、残るはこの場所しかない。こぞつて集まつてくるだろう。そして、奴も例外ではない。

—私をこんな風にした奴。

—数百年間、待つていた。

そう、彼女が喜んでいるのはついに行動に移ることができるからだ。今まで消息不明だつ

た奴が表舞台に出てくる。そのことが彼女には堪らなく嬉しいのである。『墓地の前でまた会おう』。それは遙か昔、研究所が創設されるずっと前のことだ。敵を倒す際、男が必ず用いた言葉。

「……今はベルコル、だつけ？面白い。何の思惑があるかは知らないけど、大物が自ら餌にかかるてくれたわけだ。長い事待つた甲斐があつたよ」

天城紫乃という人格が必死に感情を抑え込むが、彼女の顔から笑みが消えることはなかつた。

時宮葵は協会の日本支部を訊ねていた。彼の目の前にいる男は日本支部の課長である。表向きにはきちんとした建築会社であるため、男は正式な大企業の課長クラスということだ。そして魔法使いとしての腕前もかなりのものである。見た目四十代前後の男と葵とではかなりの年齢差を感じるが、彼らの会話はまるで親戚同士のような雰囲気を醸し出している。事実、葵は三年前の事件で大きな功績を上げており、男もその実力を認めているからだろう。

協会内でも時宮葵という人間はかなりの好待遇である。*ima* ショックを終結させたこともあるが、多くの研究所の人間を処理したという功績もあるからだ。協会側もむやみに手放したくない存在となってしまったわけである。そのような中途半端な状況で葵が選んだ道は、協会内の仕事をアルバイトとしてすることだった。学生の身である葵にとつてもそれ

が最善の選択だつた。故に、彼は現在協会に就職はしていない、アルバイトとして協会に所属している。葵としてもその立ち位置は好都合だつた。色々と理由はあるが、一番は協会の情報を盗み見るのにちょうど良い立場だということだ。協会の動き、研究所の動きをいち早く知る事が出来る。それは彼にとつて唯一の目的のため、三年前の悲劇を再び起こさないためだ。その目的がなかつたら、あるいは利害の一一致がなければ、おそらく彼はそこに属する事はなかつただろう。

協会も研究所も、ひいてはそこで作られたという改造人間ですら彼は嫌惡する。もちろん、現在、魔女の家に出入りしている彼女らも葵は好ましく思つていない。

「だから、根本的な事をいうと、そんなもの存在なんてしないと思うんですよ」

「ふむ」

呆れるように答える葵に、目の前の男は深く息を吐いた。そして上着の中から煙草を取り出す。

「すまないが、ちょっと一服していいかな」

「ええ、ここが禁煙室でないなら」

「私の部屋なんだから、禁煙のわけがないだろう」

「ここはみんなの休憩室ですよ」

「細かい事は気にするな」

苦笑いと共に、男は躊躇うことなく煙草に火をつけた。そして静かに煙を吐く。

「そもそも禁煙なんてするのがいけないんだ」

「最初から吸わなければいいのに」

「わかつてないね、まあ君ももう少し大人になつたらわかるさ」

「俺の周りにも吸つてゐるやつはいますけどね」

「それはただファッショソの一部みたいなものだ」

「自分を棚に上げすぎですよ」

「ははっ」

爽やかに笑う男。この男は協会内でも数少ない、邪な感情を持たずに寛に接する。寛はこの男を尊敬していたりもする。結婚もしており、子供もいる。そして彼らのために日々働く。清々しいほどに立派な人間だからだ。

気づくと灰皿の上に吸い殻が転がつていた。それを境に、やつと彼らは本題に戻る。

「……ど」まで話したつけ

「……etc の文書が存在するかどうかってところ」

「ああ、そうだったな。うん、噂に過ぎない」

「何故そう言い切れるんです？」

「直接見たことないから」

見た事がない、見えないのならそれは真実である可能性はない。これがこの男の持論だつた。寛も彼の影響か、その意見に少しは同意していた。

「考えてみなよ、私もこの業界について二十年は経つ。理不尽な事をいくつも経験してきたけど、etc の文書？それはいくらなんでも非常識すぎる。協会が持つてゐるとは思えない」「二十年間見なかつたものが本当は実在してゐた、という可能性は？」  
「……可能性か」

「何か気になつた事とかないですか？おかしな出来事とか」

男は眉を潜めて思案にふける。ふと、彼の手が再び煙草へと伸びた。

「もう、吸わないでください」

「うるさい。うるさい」

葵の制止も聞かず、男はライターの火を灯す。そして煙を吐き出した口元がゆっくりと動いた。

「十五年前のことだ」

「え？」

「私がまだ新人だった頃、本社の内部にある噂が流れていた。『金色の魔女が返つてきた』、『数十年前の亡靈が目を覚ました』ってね」

「十五年前なら、そうだね。あの人もそう言つていたよ」

「その頃にな、もう一つ奇妙な話を耳にしたんだ。『協会本部に何者かが侵入した』ってな。おかげで各支部の管理と統制が強化されたわけだが、その事件で、ある貴重な物が盗まれたそうだ」

「貴重なもの？」

「私たちも詳しくは知らない。おまけに犯人も捕まつていない。でも、君ならわかるだろ」

試す様な視線を向ける男に対し、葵はごくりと固唾をのんだ。

「……金色の魔女の仕業だとう？」

「あくまでも推測の域を過ぎない。とにかく、その事件の際に色々と無くなつたものがあつたからな、もしかしたらその中に文書が含まれている可能性もある」

「だとしたら……何で魔女は俺にも秘密にしているんだ」

男は灰皿の中を吸い殻で弄びながら、視線だけを葵へと向けた。

「そもそも何で etc の文書の話題になつたんだっけか？」

「……先日起きた歐州事件、結果的にここ日本に研究所の連中が攻めてくる可能性が高い  
つて赤城周から連絡があつたって話したじやないか」

「ああ。それなら大丈夫だ、三年前の事件で壊滅寸前になつた連中がこんなすぐに立て直  
すとは思えない。全面戦争みたいなものはしばらく起きないだろうよ。だが」、  
「暗殺、あるいはテロなら少人数でも起こせるな」

「民間人を巻き込むつてことか」

男の意見に葵は思わず前のめりになる。頭の隅にあつた予感、他人の口から出ると一層現  
実味を帯びてしまう。

「彼女も彼女で、厄介な連中を引き寄せてくるようだ」

「それより気になるのは、協会はどうして今まで秘匿されてきた etc の文書を今更探して  
いるんだ。研究所も研究所だ。何でみんな今になつて……」

普段から狐目に近い瞳を更に細めてひとり考え込む葵。彼が思案に耽る中、男はまるで名  
探偵とでも言うように人差し指を突き上げ、

「私はこのような解答に至つた——すばり ing だ」

彼の言葉を聞くと、葵はまたかと呟き頭を抱え込んだ。そんな葵に目をくれる事もなく、  
男は最後の一本と煙草に手を伸ばす。

「やっぱ文書に ing と関連した事が書かれているとしか思えないよな。むしろ、俺の【物

取り」の能力や【空間創造】とかの内容も載つてゐる可能性も高いし、それ以上の事が書かれている可能性も……」

徐々に頭を落としていく葵。そんな様子を見た男は、一瞬にやりと笑つた後、その大きな手のひらを葵の頭へと置いた。

「私たちの考えも只の推測に過ぎない。仮に研究所の連中がこの地に攻め込んできただとしても、私たちがいるだろう」

「……言葉とは裏腹に気に入らないって顔してるけど」

「私も仕事をして稼がなければいけない身でな。娘を塾に行かせてやりたいし、妻も妻でジムに通うとか言いだしてな……」

男はまるで本当に建築会社に勤めるサラリーマンのような呟きを零した。そんな姿に思わず葵も笑みを零す。

「幸せそうだな」

「そうか？ 私は毎日大変さ」

最後の一本と言つた煙草が吸い終わる。それを合図に二人は休憩室を後にした。葵は出口に、男はまだ仕事が残つてゐるのか、互いに向かう方向が違うようだ。

「子供があまり無茶をするなよ。無駄に老けるぞ」

「忠告どうも」

「つたく……もつと敬語を使つてくれてもいいのにな」

そう言い残すと、男はひらりと片手を上げて別れを告げる。

「あ、おじさん。ちよつと待つて」

「何だ」

「仮に……仮に奴らがテロを起こした場合」

「協会の人間を呼びださなければいけないな。普通の警察じや役に立たん」

「何時間で集まる」

「そうだな……二時間くらいか。できるだけ騒ぎは抑える、任せておけ」

瞬間、葵の携帯から軽快なメロディが流れてきた。画面に移る友人の名前に、思わず葵は小さな驚きを示す。

「やあ、どうかしたか」

彼は数回相槌を返すと、すぐに通話を終えた。

「随分と短い会話だな」

茶化す様な男の口ぶりに対し、葵の表情は真剣そのものだ。

「リニアが撃たれたらしい」

その言葉に男の顔色も変わる。

「随分と早いご到着だな」

「それじゃあ、頼んだよ。おじさん」

にこりと笑い、出口へ向かう葵を見て、男は深いため息を零して苦笑する。そして何かを思い出したかのように葵の背中へと声を掛けた。彼がこちらに振り向く前に男の口は動き出す。

「そういえば、奏は元気か？」

「ああ、あいつ死んだかな」  
アジトと称した、かなり大きなホテルの一室。そのベッドの上に横になつたまま、ロベルトは呟いた。もちろん相方の返答は期待していない。

「何をしている」

彼はじつと窓の外を見たまま微動だにしない相方——フーゴへと訊ねるが、彼は何も言わない。ロベルトは無視されたことを気にすることなく、再び天井を見つめたまま横になつた。  
しばらくして、

「人を拳銃で撃つたと聞いた」

「ああ、撃つたな」

「悪い行為だと思う」

やつと口を開いたと思いきや、フーゴはロベルトへと小言を呟いたのだ。思わずロベルトも開いた口が塞がらない。

「おいおい、これは戦争だ、俺たちはテロリストだ。相手の事情なんて知るか。俺は楽に事を進めるために動いたまでだ」

「そうか」

フーゴは特に言い返す事もなく頷く。そしてもうこの話は飽きたのか、別の話題を切り出した。

「今日中にベルコルが来る」

「ほお、やつとか」

「ケラーも一緒らしい」

「若いケラーの活躍、楽しみだな」

会話を成立させる気は互いにないようである。ロベルトはベッドから跳ね起きると、フーゴが眺めている景色に目をやつた。ビルとマンション、そして一軒家が立ち並ぶ土地。都会という都會でもなく、地方と言う地方でもない中途半端な風景だ。

「私たちが狙う所はどこだ」

「このホテル、それと反対側のビル」

フーゴはポケットから紙を取り出し、指をさしていく。

「協会の本部は？」

「ベルコルがそこは狙うなと言つていた。接近することが難しいって」

「なるほど、面倒臭いが仕方ない。これも仕事か」

しばらくして、ロベルトは立ち上がった。

「そろそろ行くか」

\*\*\*

幼稚園に着くと、リニアはいち早く台所から漂う香りを察知し、急いで靴を脱いだ——が、勢い余ったのか彼女は玄関でよろめく。

「本当に大丈夫なのか」

「大丈夫だつて、ちょっと躊躇いただけ」

相変わらずリニアは、にこにこと笑いながら両腕を上げてアピールする。腕を上げれば元気だつて証拠でも何でもないぞ。

「心配しすぎだよ、聰太!!」

俺はよほど不安気な顔をしていたのか、リニアは元気づけるように勢いよく頬をすり寄せてきた。

「元気なのはわかつたから!! 離れろー!!」

「はいはい」

リニアは俺から離れると真っすぐに台所へ向かった。

「パスタだ!!」

お皿の上に乗つたものを見て、まるで小学生のように目を輝かせるリニア。すぐに席に着こうとする彼女の裾を奏が引きとめた。

「リニア、大丈夫?」

一瞬、間の抜けたような表情を浮かべた彼女だが、「こないだも言つたでしょ。大丈夫、私は絶対に大丈夫。だから心配しなくてもいいの!!」奏の頭を優しく撫で、そして彼女はその小さな体をそつと抱きしめた。

「……ばか」

「それよりご飯は?」

「奏が、皆が集まつたら食べようつて。家族は揃つて食べるものだから」

意氣揚々と席に着く彼女に答えたのはノエルだった。そして彼女の言葉通り、全員が席に着く。

「……葵は？」

「いいでしょ」

いいのか。

魔女はあっさり切り捨てた。

俺は親友にせめてもの手向けとして、深いため息を零しておく。すまない、親友よ。俺に止めることはできなかつた。

既にノエルと先生、リニアはパスタに口をつけていた。俺も構わず食べることにした。真田さんは全員が食べ始めた事を確認してからフォークを手に取つた。

「美味しい」

「すごいですね」

思わず感嘆を漏らしたのはノエルと真田さんだ。殆ど奏が作つたのだが、何故か誇らしげになる。

「私も一人暮らししていますけど、こんなに美味しいものは作れないです」

「お、俺も一人で作ったわけじゃないですよ」

大人の女性に誉められ、つい俺も頬が緩んでしまう。

「嬉しいね」

隣でリニアが笑いかけてきた。何故か寒気がするのは気のせいだろうか。

「あの、後でレシピ教えていただけますか？ 今度私も作つてみたいです」

188.psd

「真田ちゃんが作るの!? 私も一緒に作る!!」

「えっと……じゃあ後でレシピ渡しますね」

いつぶりだらうか。ここまで誰かに気分を持ちあげられるのは。

自身の口元が緩んでいるのを感じた。ふと、今度は向いの席から視線を感じる。  
「……あの何か不満でも」

奏がじとりと、こちらを見つめていた。

「別に」

「……」

俺の周りだけだらうか、妙に気温が低い気がする。

「ふう……」

思わず漏らしてしまったため息に、隣に座っていた先生が視線だけをこちらに向けた。  
「食べないの? 葵くんに遠慮なんかしないでいいのよ、遅刻した人間が悪いんだから」と、その時。俺の背後で物音がした。

「遅刻した人間にも理由があるんだがな」

「葵!! ……えっと、お前も食べるか?」

「いい、今は食べる気がない」

俺と話している間も、彼の目はひたすら彼女へ、先生を見ていた。  
「先生、奴らが来たんだろ? それなのにこんな呑気に過ごしてて良いのか? 奴ら、今にもテロを起こすかもしれないんだぞ」

「そんなこと言われても、どこで何が起ころるかも分からぬじやない。それなら動きがあるまで待つしかないでしょ」

「けど、奴らはもうこの地に来ているんだ!!」

今にも先生に食つてかかりそうな葵に対し、彼女は涼しげな顔でパスタを食べていた。その様子が余計に葵の怒りに火をつけたのだろう。

「いいか!?俺はあんたが何をしても、俺の知った事じやないんだ。etc の文書なんか、どうでもいい。俺があんたに協力する理由は、研究所の連中を排除するためであつて、あんたを助けるためじやないんだ!!」

「食事中よ。後にして」

声を荒げる葵に、冷静に、冷徹に答える魔女。室内の空気は完全に冷え切つてしまつていった。何とか場を取りなそうと、俺は葵に声を掛けるが、

「俺は今、先生と話しているんだ」

彼は俺に目を向けることなく、じつと先生を睨んでいた。

やがて、その視線に飽き飽きしたのか、魔女はすつと葵へと振り返つた。

「後にしてくれつて言つたんだけど。子供たちもいるんだから」

その言葉に葵ははつと我に返つたようで、驚いた顔で食卓に座る全員に目をやつた。そして俺に軽く謝罪を入れると、罰が悪そうな顔で部屋を後にする。

やつと張り詰めていた糸が緩んだのか、黙々とパスタを食べていたリニアが顔を上げた。

「空気が重い」

「文句は先生に言つてくれ」

ちらりと隣へ目をやるが、当の本人は何事もなかつたかのように涼しい顔をしていた。俺がもう少しだけ不満を漏らそうとした、その時だつた、奥の部屋から電話が鳴る。この時間に奥の電話が鳴るのは珍しい。先生は聞こえているはずなのに、しばらく何もせずに虚空を睨んでいた。奇妙な違和感、いや不気味な感じがする。

「おい、先生!! 電話出ないのか」

「……そうね、ちゃんと受けないといけないわね」

そう言うと、彼女は奥の部屋へと歩いて行つた。

「はい、ひまわり幼稚園です」

「金色の魔女だな、こんなに早く話せるとは思つていなかつたよ」

普段通りの応対をする魔女だつたが、電話口の男の声にすつと身を固くする。【金色の魔女】、その名を口にするものは、協会、あるいは研究所の連中しかいないからだ。  
「これは幼稚園の電話よ、園長の私が電話を受けるのは当然でしょう」

「ロベルトだ」

早々に男は自身の名前を告げた。その名に魔女の口角がゆつくり上がる。

「ロベルト……かの有名な爆弾魔さんが何の御用かしら」

「久しぶりに慣れようと思つて、その前に挨拶を兼ねて電話をしたんだ」

\*\*\*

受話器の向こうで微かに聞こえる風の音。おそらく男は外にいるのだろう。そう推察した魔女は最大限に周りの音に耳を傾けた。

「ご丁寧に電話をくれるなんてどうも。それで用件は何？」

「ベルコルからの伝言だ。『etc の文書を出せ』」

「何のことかしら」

「欧洲になかったのなら、残るは君が持つているとしか考えられない。早く出せ」

「嫌だと言つたら」

「爆弾を設置した。ここら辺で一番大きな建物に一つ。そして中心部にあるビルに一つ」

「へえ」

電話口から聞こえる要求に、彼女は眉ひとつ動かすことはなかつた。

「……どうする、金色の魔女」

「お断りするわ」

彼女は迷うことなく男の要求を突っぱねた。男もある程度予想はしていたのか、大して驚く素振りも見せない。

「なら仕方がない。全面戦といこうじゃないか」

男が言い終わるや否や、大きな爆発音が電話口、そして外から聞こえてきた。

「あんた」

「俺がどこにいるかはわかるだろう、その窓から、あるいはニュースでも見れば一目瞭然だ」

「なるほど、ケリをつけるつてこと」

「ああ、待つている」

電話が切れる。魔女の手には受話器が握られたままだ。

「先生!! 今の爆発音は!?」

鈴木が勢いよく駆けつけてきたが、彼女は何も答える事なくキヤビネットを開けた。そして古ぼけた黒い鞄を鈴木へ投げる。それは三年前に彼が使用していた重装備の数々が入った鞄。魔女は何も言わないが、それで鈴木に返答をしたつもりでいた。そして彼もこの鞄を渡された意味を理解している。

「本当にテロなのか」

「ご丁寧に電話までくれたわ」

「やれやれ、本当に大事になつてきたじやねえか」

文句を垂れつつも仕度を始める鈴木。すると、彼の背後から再び足音が聞こえてきた。居間にいた連中である。

「先生、さつきの爆発音……」

「あなたはここにいなさい、ここを守る事」

魔女はリニアに目をくれることなく告げた。彼女が何かを言い返そうとする前に、魔女は再び口を開く。

「ノエル、真田さんもここにいて」

二人は無言で頷いて同意を示す。

「奏ちゃんも……ここにいてね」

「私も行く」

「だめ、これはとても危険なの。あなたはまだ子供よ、大人しくしていなさい」

奏の声は魔女に聞き届けられる事はなかつた。魔女が奏にこのように言う事は珍しく、彼女も思わず怯んでしまう。それを見届けた後、魔女はすつと真田へと顔を向いた。

「先生、うちの子をよろしくお願ひします」

先生という言葉の重みを真田は強く感じた。保護者が子供を預ける時と同じ、いや、それ以上の安全を彼女は真田に託したのである。

そして魔女は着替えるからと全員を部屋から追い出した。

金色の魔女ひとりが部屋に残り、静まり返る室内。躊躇うことなく彼女は服を脱いだ。空氣の冷たさを肌に感じ、彼女は静かに深呼吸を繰り返すと勢いよく筆笥を引きだし、中から黒い洋服を取り出した。

黒い上着、黒いスカート、黒いストッキング。彼女は瞬く間に全身真っ黒の衣装に身を包んでいった。そして準備を終えた魔女は、まつすぐと玄関に向かい幼稚園を後にする。外では鈴木がじつと立つて待つていた。

「待たせたね、それじや、行きましたよ」

「ああ」

\*\*\*

「——それにしてもテロを防ぐ正義の味方としては、恰好悪くないか？」

幼稚園を出た後、俺と先生は目的地に向かうために歩き出した。車かバイクで颯爽と現地に到着するつもりでいた俺が着いたのは、近所の駅。案の定、改札を抜けガタンゴトンと電車に揺られてきた。そして、そのまま到着……ではなく駅からは徒歩で行くらしい。普段よりは足早だが、何とものんびりとした状況である。

「なんか葬儀に行く気分だ」

俺は隣を歩く先生の服装を見て、思わず口を漏らした。全身真っ黒、まるで喪服だ。俺の咳き声が聞こえただろうに先生は何も言わない。ここに来るまで彼女はだんまりを決め込んでいた。

そして駅から歩く事数分、やつと先ほどの爆発が起きた場所に着いた。辺りは騒然としており、消防車や警察など多くの人間が押し寄せ、色々な所から悲鳴のような叫び声が聞こえる。

「おい、金色さん。これは一体どういうことなんだ？」

中年の男性が先生へと声を掛けた。すると彼女はやつと口を開き、

「あら、お早いご到着ね。もう少しかかると思つていたわ」

「葵のやつに準備だけはしつけて尻を叩かれていたからな」

男は欠伸をしながら、煙草を取り出して火をつけた。

「それじやあ、事後処理よろしく」

「全部終わった。そつちもあまり騒ぎにはしてくれるなよ。研究所の連中にも伝えといてくれ」

そう言い残すと、男は部下と思しき人たちの所へと戻つていった。どうやらかなり忙しいらしい。

「誰だ？」

俺が先生に訊ねると、彼女はやれやれと肩をすくめて教えてくれた。

「日本支部課長、柳公平。最近禁煙を考えているとは聞いたけど……あれじや駄目ね」  
そういうと、魔女は未だに炎が燃え上がる建物に向かつて歩き出した。何も言わずについでこいと背中が語つていて。俺もこの中に入るのか。そんな風に考えて立ち止まっていると、彼女はため息をついて振り返つた。

「いいから。私が傍にいるから安全よ、もし崩れたら何とかしてあげる」

「そ、それなら」

呆れ顔をされるよりマシだ。俺は無我夢中で彼女の後を追つた。人生初、俺は燃え盛る建物の中へと入つていった。

\*\*\*

建物内部は相変わらず至るところで火の粉が舞つていた。俺の周りにも灰などが散つているが、何故か体に触れる前にふつと消えて行く。

「どういうことだ」

「ただの魔法よ」

なるほど、確かにこれなら安全かもしれない。

「下の階はそこまで火の手が回つて来てないわ、崩壊の危険もあるからばつぱと終わらせましょう」

淡々と述べながら、彼女は最上階を目指して進んでいく。

不安だ。建物の崩壊もそうだが、何より先生が何を考えているのか全くわからない。

「先生、何で俺を連れて来たんだ?」

「人手不足だからでしょ」

「葵は?」

「さあ。勝手に動いているんじやない?」

先ほどの喧嘩が後を引いているのだろう。葵の名前を出した途端、先生は一気に機嫌の悪そうな声色になつた。

だいぶ登つたはずだ。未だに燃えている階もあつたが、最上階に近づくにつれて逆に火の手は収まっていた。若干、床が傾いている気もするが、この程度ならば気にならない。

「前を見なさい」

ぼんやりと考え方をしながら歩いていた俺は、先生に言われて顔を上げる。俺たちの数キロ先に誰かが立つていた。男は帽子を深く被つたまま、床を眺めていた。

「早かつたな」

「そうかしら、あなたも充分せつかちな性格だと思うけど。ちゃんとした交渉もせずに動きだすなんて、ひどい性格」

挑戦的な目を向ける先生に対し、男の表情は良く見えない。だが、一瞬にやりと笑った気がした。

「私もそれなりに交渉をしたつもりだったが」

「そう、それなら感じ方の相違ね。まあそれは、どうでもいいわ。あなたは今日ここで私に殺されるんだから」

すると、目の前の男は疲れたとでも言うように大きく頭を頃垂れた。

「ああ、面倒臭い。死ぬ事さえも面倒臭い。でも誰かに死なれるのはもつと面倒くさかつた。なあ、キルヘン。私は存外自分が思っていたより纖細な人間らしい。そして、そんな私は君よりも正常な思考の持ち主だと思わないか」

先生は何も言わず、じつと相手を見据えていた。俺はゆっくりと戦闘態勢に入ろうとするが、

「そこの君、銃口を向けるのは早い。いや、それはボーガンか。どちらにしろ、まだ戦闘に入るべきではない。年上の私がまだ喋つているだろう」

「おいおい、こんな所で礼儀を説いてどうするんだ。

あからさまに不満げな顔をしているのが自分でもわかつたが、男は構わず続ける。  
「ベルコルの魂胆が何かはわからないが私の目的は君の命だ。三年前の敵、私もそう易々と殺されるつもりもない」

そういうと、男は割れた窓ガラスから地上を見下ろした。

199.psd

「フレゴもそろそろ始めたようだな」

「何だと」

「私一人で来るわけないだろう。あの狂人が例外なだけだ。ちなみにこここの爆弾とは別に数カ所、他にも时限式の物を仕掛けている、いつ爆発するか知りたかつたら私を殺せ」

「何が目的だ、この街を破壊するつもりか」

「まさか。そんな野望はない。あえて言うなら偶々作つたから、使つた様なものだ」

「狂っている」

気づくと自身の手をきつく握りしめるほど、俺はこの男に嫌気がさしていた。

「素敵ね」

突然、今まで黙っていた先生が拍手をしながら笑いだした。

「その決意、覚悟。とても素敵。怠惰のロベルトなんて名前が似合わないわ。それで?あなたを殺せば被害が収まるつてことね」

「いや、即死で終わつたら私は爆弾について何も話せない」

「平気よー私が何とかしてあげる」

うすら笑いを浮かべる先生。その笑みは味方のはずの俺でさえ背筋が凍る程だ。対する男も戦闘態勢に入ったのか、懐から拳銃を取り出した。

「さあゲームを始めよう」

魔女と鈴木が出かけ、静まり返った幼稚園。残った女性陣は特に会話をすることもなく、じつと彼らの帰りを待っていた。しかし、リニアだけは違う。彼女は自身の傷口をそつと撫でて具合を確認すると、玄関に向かつて立ちあがつた。

「だめ」

部屋の入口に立ち塞がつたのは奏だ。

「ええと……」

「出ちやだめ」

「で、でも私がいるかいなかじや、こちらの戦力にも影響が出るし」

「大丈夫、先生がいる」

「それはそうだけど」

奏の制止にたじろぐリニア。それを見ていたノエルも思わず口を挟んだ。

「本当に行くつもり?」

「どうしようかな、行く?」

「何で逆に訊ねるのよ」

既に彼女の中の意志は決まっているようだ。リニアは準備運動をするかのように、体をひねり出す。いくら金色の魔女といえども、戦場では何が起こるか分からぬ。リニアは自分だけ安全な場所で横になつてゐるわけにはいかなかつたのだ。

瞬間、大きな爆発音が再び聞こえた。

「もう一発か……あれは、アイ・リンクタウンね」

音の鳴つた方向を見て、リニアは呟いた。視線の先には遠くの方で火の手があがつてゐる

建物がある。

「それじや。行つてくる」

「リニア」

未だに奏が不安げな瞳で彼女を覗き込んでいた。

「大丈夫!! 私はリニア・イベリンよ」

力強いガッツボーズをして、何とか彼女を安心させようとしたリニアだったが、

「私も行く!!」

普段の奏とは思えない程、彼女は大きな声を上げた。その姿にリニアは口元をゆるめて、静かに首を横に振る。

「奏には奏の仕事があるでしょ。この幼稚園に誰かが侵入したら、奏が守つてあげてね」リニアは緊張を解こうと、奏の頬を軽くつねる。それでも、最後まで彼女は納得のいった顔を浮かべなかつた。

「それじや、あとの二人も奏をよろしくーと」

ふと、リニアは真田に向けて笑いかける。

「頼みます。経験者としては、真田さんがとても強いつてわかっているから、安心だ」

「あの!! 私も何か手伝わして下さい!!」

「わ、私も!!」

真田の声に賛同するように、ノエルも揃つて手を上げる。リニアは困つたようにため息を零した。

「その仕事がここを守る事だつて。私もちよつくら近所を散歩してくるようなものだから、

一時間もあれば帰るよ……それじや、各々自身の任務を果たしたまえ!!」  
そう言い残すと、彼女はすばやく外に向かつて駆けだした。

\*\*\*

「さてと」

幼稚園を後にしてしばらく、リニアは道の真ん中で立ち止まつた。そして、アイ・リンクタウンの方向へ足を向ける。  
「二か所での爆発……しかも、最初のものとは正反対の場所。奴ら、一体何を考えているの」

\*\*\*

「うわっ」

突然、先生が俺を引き寄せた。思わず俺は先生の顔を見るが、彼女は真つすぐと敵を見据えている。視線の先には、ロベルトという男が無表情で銃口を俺たちに向けていた。それには消音機がついていたのか、気づくと俺のすぐ下から煙が上がつていた。鼻先を刺激する火薬の匂い。先生の助けがなかつたら、俺は確実に撃たれていただろう。床についた銃痕の後から今、男が撃つたのは二発。いくら多くても残弾は七発以下のはずだ。  
いや、それよりも相手が発砲したと言う事は完全に戦いが始まつたということだ。俺はち

らりと先生の様子を窺う。彼女は、意外にも落ち着いているように見える。口元を除いては。

「どうやら本当に命を懸けているみたいね」

先生は嗤う。男は拳銃を降ろして、そつと帽子をとった。

「命を懸けなければ勝てない戦いだからな」

「勝てない戦いね……勝てる見込みがあるからの台詞。でも今の状況では二対一よ、その平凡な拳銃一つでこの不利な状況を好転させられるわけがない。ということは、やつぱりまた改造人間でも持ってきてているのかしら？ 奥の暗がりに置いとけば、こちらからは見えないものね」

淡々と推理していく彼女を前に、男は驚きも怒りも、焦燥さえ見せない。「怠惰のロベルト」、俺が今まで会った研究所の連中とは違う気がした。霸気がないというか、空しささえ感じる。

「なるほど。ちなみに言うと、あそことあそこの暗がりも最適だな」

男は俺たちの左右の壁端にも目を向ける。そして再び拳銃を構えた一が、男はそのまま引き金を引くことなく後ろに後ずさつた。影が男の身体を浸食していく。

「おい！お前らは一体何でこんな事をするんだ！！三年前の戦いが原因なら、俺たちの方にも被害は出ている。痛み分けだろ！！」

完全に闇に溶け込む前に、俺は男に向かつて叫んだ。三年前という言葉に反応したのだろうか、辛うじて男の表情が読み取れる暗さの中、彼は少し驚いた顔を浮かべた後、小さく笑つた。

その一瞬で俺は矢を放つ。しかし、男はすかさず体を反らして俺の攻撃を交わした。そのまま更に後ろに下がると思いきや、彼は足を止めて静かに語り出した。

「三年前の戦い……戦争は両者共に被害者だと君は言うのか。確かにあの戦いはどちらが勝者と言う事もない。だが、あえて利益を得た方といえば協会側とそこの女……それと研究所の稳健派か。いずれにせよ、君は協会側、ひいては金色の魔女側に属する身、つまりは利益を得た側だ。何人犠牲が出ようと関係ない。全体を見て考えてみる」  
「……それでも、俺はあの戦いで友人を失つた。お前は研究所側が被害者だと言うのか!? そもそもの原因はお前たちだろ!!」

俺は再び照準を男に合わせた。しかし、彼はまだ会話を続ける気なのか、俺の方すら見ずにじっと床を見つめていた。

「口火を切った方は絶対に被害者になれないということか。全く理解できない。私も君と同じように被害は受けているんだが。世の中は単純だな、加害者と被害者いつもどちらか一方に分けたがる……君は自分がどんな存在か考えた事があるか?」  
唐突な質問に、思わず俺は頭が真っ白になつた。

——冷静になれ、ただの挑発だ。

俺は一心にボーガンを構える。気づくと男は俺を真っすぐと見据えていた。  
「君の仲間は私の仲間を殺した。いくら個人主義の塊みたいな研究所でも、ついこないだまでいた人間が居なくなると、何故か私の心も日に日に死んでいくようだった。人間は社

会的な動物だ、この言葉の意味をあれほど実感したことはない。確かに我々は戦いを仕掛けた側だ。一般的には悪い奴らと言われてもおかしくない。死んでもいいと思われていた奴らだろう。一だが、私はそう思わない」

男は一瞬、言葉をつまらせた。初めて目の前の男から感情を見た気がする。

「世間では死んでもいいと思われていた奴らでも、私にとつては違つたんだ」

俺は何も言えなかつた。納得はできない、けど間違つているとも断言できなかつたのだ。

男は俺から先生へと視線を動かした。未だにその瞳には怒りが見える。

「金色の魔女……協会からは畏敬の対象とされ、研究所からは憎悪の対象とされる女。復活以前の蛮行すらも神格化される存在。だが、それは復讐に目が眩んだ只の女だつた。目の前で子供たちを殺され、その復讐を果たすためだけに魔法を創始した女。やがて、可憐な運命を辿つた稀代の聖女は金色の魔女になつてしまつた。そして彼女は人々にとつて恐怖の対象に……もう何百年も前の話だがね。キルヘン、何か思うところはあるか？」

先生は何も言わない。男は再び口を開いた。

「私は思うんだ、彼女はただ子供たちと平凡な暮らしがしたかつただけなのでではないかと。けどそんな平凡を願う人間が聖女になるべきではなかつたんだ」

相変わらず先生は口を開かない。彼女からは何の感情も読み取れなかつた。

すると突然、彼女は壁に向かつて石ころを投げ込む。本来ならば聞こえるはずの音が聞こえない。俺もすかさず壁に向かつて矢を放つ。案の定、無音。反射音が聞こえないのだ。

「どういうことだ……」

俺の疑問に答えるように、月光が崩壊間近の建物に降り注ぐ。見ると、男が先ほど目を向

けていた闇には何かがいた。腕も脚もある、黒一色の物体。一瞬、影にも見えたそれは一人手に動いている。俺はすぐに懷から紙を取り出して、矢に張り付けると、そのまま影に向かつて数発放つた。

—あれが何かなんて考へている暇はない!!

見事に矢は命中し、紙の効果で小さな爆発を起こす。だが影たちの動きは止まらなかつた。しかも、先ほどの傷も治つていて。瞬間再生だらうか、いずれにしても奴らが普通の人間でないのは確かだ。

「どうやつて倒せばいいんだ……!!」

だめだ、落ち着け。まずは冷静に状況を判断しろ。こつちには先生もいるんだ。

俺はちらりと隣に視線をやつた。彼女がどれほど強いか俺は知らない。だが、明らかに俺よりは上だらう。それなら俺は徹底的にサポートナーとして動くしかない。

俺は覚悟を決めて、ナイフを近くに投げた。文字を刻んだそれは、床に刺さるとすぐに青い光を出す。このバフは味方の身体速度を上げるものだ。相手もいち早く文字の内容を理解したのだろう、顔を上げると男はもちろん、影の姿も消えていた。

—どことだ!!

天井を見上げるが誰もいない、後ろにも敵はいなかつた。十五秒間しかない効果の中、無

常に時間だけが過ぎて行く。このままだとナイフを一本、無駄にしてしまつたと同義だ。残り時間は四秒、やつと影の姿を数体捉えた。

俺はすぐさま矢を装填して放つた。普段の速さより数倍も早く矢が駆ける。影は避ける間もなく、俺の矢を受けると再び小さな爆発を起こした。この爆発の明かりが僅かに室内を照らす。

「いた!!

俺は男を左前方の視界の隅に捉えた。そして矢を勢いよく放つ。それは真つすぐと男に向かうが、寸前の所で影がまるで庇うように前に出た。

「くそつ」

残念ながら俺の攻撃は命中しなかつたが、おかげで敵の数は知れた。男と影、合わせて計六人だ。ふと、男は影を押しのけて前に出る。そして、ゆっくりと銃口を先生へ向けた。すぐに俺はボーガンの照準を合わせようとするが……何故か彼女は俺の腕を掴んで止めた。瞬間、先生に向けられていた拳銃の引き金が引かれた。消音機で小さくなつたはずの銃声が、どうしてだろうか、やけに透き通つて聞こえる。

俺の目の前で先生は撃たれた。腕と足、それぞれに真新しい銃痕がいくつもできる。先生の考へている事がわからない……何で俺を止めたんだ……

俺は混乱しきつた頭で、呆然と彼女を見ることしかできなかつた。彼女の足から真つ赤な血液が流れ出る。金色の魔女といえども、その身体は人間だ。痛みもそれなりにあるはず

である。だが彼女の顔は平然としていた。そして、先生は何食わぬ顔で懐から紙を取り出し、傷口へと張り付ける。魔法のおかげだろう、出血は止まつたようだ。今思うと、彼女は残弾を消費させるためにこんな大胆な手段を選んだのかもしれない。

魔女は手当てを終えて一息つくと、一気に前に飛び出した。その直前に一瞬だが、俺に視線を送る。サポートしろということだろう。俺はすぐに予め文字を書いておいた紙を、床にばら撒いた。これは彼女の動きを速める魔術。効果は十秒。このバフのおかげで、先生はすぐに一体目の影へと接近した。そして彼女はポケットから紙を取り出し、何か呪文の様なことを呟く。

すると、どういうことか、無限に再生すると思われていた影が奇妙な音と共に分解され始めて行く。すぐに先生は次の影へと移動した。男もその動きを止めようと先生へ拳銃を向けるが、

「させるかつ!!」

俺は迷うことなく矢を放つた。男は魔女しか見えていなかつたのか、見事に俺の攻撃は男の手首に命中した。

——残り三秒。

先生の攻撃は止まらない。男はなおも彼女の動きを止めようと、今度は左手で拳銃を構えた。瞬間、バフの効果が終わる。先生の動きは先ほどの半分ほどに戻つてしまつた。俺は懐からワイヤーを取り出すと、急いで男の左手めがけて投げた——が、俺の行動を注視して

いた影が男を庇うように前に出る。そしてその影はすぐに俺に向けて飛び出すと、大きく拳を振り上げた。

「ぐつ……」

無様にも真正面から影の攻撃を食らった俺は、大きく後ろへと殴り飛ばされた。衝撃でしばらく体がしごれて動けない。顔を上げると、男は先生の頭に照準を合わせている。彼女も影との戦いを中断して、じっと男と向き合っていた。そして、自身に銃口が向いているにも関わらず、彼女はまっすぐと男に向かつて堂々と歩き始めた。

まるで、そんなものでは自分を殺せない、とでも言うようだ。

男は引き金を引く。先生は腕で防御するも、その腕からは真っ赤な血が流れ出た。男は銃弾を補充して、再び彼女に向けて引き金を引く。先生の真っ黒な服は、彼女の血で真っ赤に染まつていった。それなのに、先生は相変わらず苦痛を顔に出さない。関心すら持つていないうようだ。

所々、紙を取り出して傷口に張り付ける彼女だが、あんな簡易的なものでは傷は癒えないはずだ。表面上の皮膚は再生されたとしても、内部の傷は癒えることはないのだろう。早く手当てをしなければ大変なことになるに違いない。俺は何とか起き上がるうとするが、先ほどの攻撃で骨にヒビでも入ったのだろうか。腰を上げるだけでも精一杯だった。崩れた瓦礫を背に何とか俺は体を起こす。

先生は相変わらず、男の銃弾を受けては自身の傷を癒すことを繰り返している。彼女には全く戦意を感じなかつた。そして、男の方もただ銃弾を消費しようとしているだけにも見える。

しかし、だからと言つて、ただこの光景を見ているわけにはいかなかつた。俺は男の左手に向けワイヤーを飛ばした。

届け、届け!!

後少しのところで、男は拳銃を持つてゐる方ではない、右手を差し出した。手に妙な感覺が伝わる。おそらく、もう少し力を入れれば、相手の右手を落としてしまうだらう。ふと、男はため息を吐いて床に顔を落とした。

「……降参か？」

俺の問いに、男は黙つて首を横に振つた。そして残念そうな顔で俺と先生に顔を向ける。  
「……いくら暴れようと、私は君の目には入らないのか」

「そうだ」

「君がここに来たのも、私と戦う事が目的でもなかつたのだらう  
色々と考えた結果、私はここに赴いた」

「そうか」

男はそう言うと、左手に持つていた拳銃を懐にしまつた。しかし、俺もまだ戦いが終わつたとは思つてない。彼の右手は相変わらず俺のワイヤーでしつかりと押さえていた。すると、男は拳銃をしまつたと同時に、ポケットから青いプラスチックの様なものを取り出し

そして、男はそれをワイヤーに当て、「なつ……」

簡単には切れないはずのワイヤーが切れた。俺ですら絶対に切れる事はないと思つていた代物が。男は当惑した俺の顔を見て、にやりと笑いかけてきた。

「大丈夫だよ、Chaserのワイヤーはかなり丈夫だ」

「その青いやつは何だ!!」

「奴が脱走した後、そのワイヤーは私たちの敵になつてね、それを切る、分解するための爆弾を私は作つたんだ」

男は俺を見ることなく、独り言のように呟いた。そして、先生に振り返る。

「君の顔を見ていると復讐心もどこかに行つてしまつたよ。それでも仕事はしないといけないね——キルヘン、etc の文書を渡せ」

—etc の文書? 何だ、それは。

疑問を浮かべる俺を置いて、話は進められていく。男は、何も言わない先生を見て、一層きつく目を細めた。

「君が持つてているというのはわかつていい、さつさと渡すんだ」

「はあ……」

やつと口を開いた先生は呆れたようにため息を零した。

「全く……どいつもこいつも、どうして私がそんなものを持っていると決めつけるんだろ

うね。持つていらないかもしないだろう。それなのに早合点してこんな騒ぎまで起こして。まあ、協会に無いのなら、私が持つているという考えも理解できなくはないけど……それならこんな回りくどい事しないで、直接私の家に来れば良かったのに」

「キルヘン、ベルコルがくる」

その名を聞くと、先生の顔色が変わった。先ほどまで無感情を装っていた顔に初めて感情が垣間見えた。

「あいつはetcの文書と共に君を狙っている」

「へえ……そう、ベルコルも私を狙っているの。なるほど、互いに考える事は一緒というわけか」

「キルヘン、もう一度言う。文書を渡せ」

「断る」

やつと魔女の化けの皮が剥がれたようだつた。彼女は感情を露わにして笑つていた。

「口ベルト、諦める。このまま何もせずに引き下がつたら、お前の命は見逃してやる」

「それは無理だ」

「気まぐれだ、二度は無いぞ」

男は拳銃を構える。拒否するということだ。それを合図に先生は腰を落として戦闘態勢に入つた。

その時だつた――

「時間だ」

男の咳きと共に、大きな爆発音が起つた。建物自体が揺れ始める。崩壊も間近かもしれ

ない。周囲を見ると、この爆発の影響か壁は大きな穴をあけて冷たい風を受け入れていた。

「久しぶりだね、お姫様」

それは突然、何の前触れもなかつた。

先生の目の前の場所から、一人の男が空間を裂くようにして現れた。そしてそのまま男は彼女を抱きよせる。

「先生っ!!」

俺の叫びも空しく、男はあつという間に先生を連れて再び空間の中へと消えて行つた。

「何が……起こつたんだ……」

「ははっ、そうか」

目の前の男の笑い声で、俺は一気に現実へと引き戻された。

「こいつは俺がやれと。ベルコルのやつも意外と気がきく」

——くそつ、困惑する時間もくれないのか。

\*\*\*

「なに……これ」

目の前で燃えているのは普段から見慣れているビルだつた。周囲には警察が集まり、消防団員は人命救助に忙しく、彼女の傍では互いの安否に泣き崩れる人々。いつもの光景はそこになかつた。

リニアは頬を伝う汗も拭わず、ただ目の前の光景を啞然として眺めることしかできない。何が起こつたのかも、理解し難かつた。

—冷静になれ。

ふと、金色の魔女の言葉が脳内に響く。

「そうだ、目の前の中には惑わされるな。ムードメーカーは当惑してはならない。心を乱すな」

リニアは師匠の教えを口に出して、深呼吸を繰り返す。そして今一度、目の前の状況を整理した。

明らかな事は、この爆発は研究所の人間の仕業。彼らの手口は鮮やかで、痕跡一つ残さず、ただの事故に済ませる事ができる程の腕前である。幸いにもけが人は少なく、この爆発は人命被害よりも一種のパフォーマンスのようなものだと推測される。

リニアは一步、ビルに近づいた。おそらく内部に侵入することはできないだろう。入口が警察官や消防士によつて固められていた。だが良く見ると、彼らは服こそ警察官、消防士そのものだが、彼女が見た事のある顔がいくつかあつた。おそらく協会の人間だろう。政府と結託して、このような非常識な出来事には協会側の人間が処理するようになつてゐる」と噂があつた。

「話したら中に入ってくれるかな」

再びビルに近づこうとした瞬間、リニアは背後から物凄い殺氣を感じ、思わず後ろを振り

向いた。誰かが居る。青い服を着た男だ。一般よりわずかに体格の良い男は何も喋らず、じつと彼女を見つめていた。リニアは直感で男が自身の敵だとわかり、戦闘態勢に入る。「あんたがこの事件を起こした犯人つてとこ?」

「ああ、私がやつた」

「そつか……それなら、先手もらつた!!」

リニアは勢いよく男を目がけて突進。拳を振りかざそうとしたが、いつのまにか男は後方に退いていた。その素早い動きに彼女も驚きを隠せない。

「ただの人間もいる。このような場所で暴れるのは良くないと思う」

男の正論にリニアは拳を降ろした。

「あんたは研究所の人間?」

男は無言で頷く。

「フーゴだ」

「そう……場所を移すわ」

彼女はビルに背を向けて走り出した。目指すはここからそう遠くない場所にある公園だ。普段から人気の少ない場所であり、夜中の戦闘には格好の場所である。リニアが走り出してすぐ、男も彼女の背を追うように移動を始めた。

「速い……私より一枚上かもしねれない。肉弾戦はちょっと厳しそうかな」

不安を胸に抱きつつも、彼女は走り続けた。

先に公園に着いたリニアは、男を迎えて待つ。一秒、二秒、三秒で男は目の前に姿を現した。

「さてと、とりあえず聞きたいんだけど、研究所の人間が何でこんな所まで来たの？」

「……三年前、私は急進派の一人として彼らの行動を支持していた」

彼女の質問にやや間を空けてから男は答える。だが、別に返事を考えていたと言うよりは行動が鈍いといった印象だ。

「私は彼らと行動し、三年前のヨウショツクの時、私は中東にいた」

「ヨウショツク……当時を知る彼女は、その時起きた出来事に思わず視線を落とす。そんな

彼女に構わず、男は続けた。

「君たちがどう思うかはわからないけど。研究所はちょっと変わった奴らが集まつただけの場所だ。私たちはヨウなんてどうでも良かつた。ただ自分の研究を続けたかつただけだ……それでも、そのための手段と方法を選ばないのが急進派だった」

男の独白は続く。

——相手の言葉に惑わされるな、相手の言葉に惑わされるな。

リニアはハンス・ブリーゲルの言葉を必死に頭の中で反芻していた。

「果たして、人というのは何なのだろうか。そこまでの事をして、私たちは何故知識を追いかけたのだろう」

「それで？ その答えは出たの？」

「いや、まだわからない。それに一緒に戦った仲間は全員死んでしまった」

「あらら、それは可哀そうね。残念ながら私の周りの人間は誰ひとり死ななかつたわ」

「……それは運がよかつたな」

相手の空気に飲まれぬよう、リニアは普段通りを心がけていた。そして、彼女は元気に胸を張る。

「そう、私は誰よりも運がいい女!!リニア・イベリンよ!!」

銀髪の魔法士ー、ハンス・ブリーゲルに体術を教わり、金色の魔女に魔法を教わった女。

男はじつと彼女を見据えていた。

「中東で活動していた時、私たちの勝利は確実だと思つていた。その地域の住民も政府も皆私たちを支持していた。私たちはこの戦いに勝利し、私たちが続けてきた学問の極地に至れると思つていた」

「悪いけど、私にはまったく理解できない」

「構わない、理解してもらおうとも思つてない」

「あら、そう」

相槌のように口を挟み続ける彼女に男は不快な表情も見せない。彼は先ほどから、声のトーンすら一切変化を見せずにいた。

「そんなある日、ある男が中東に現れた。そう、君の師であるハンス・ブリーゲルだ」

「へえ……ハンスはそんな所まで派遣されたの」

「たつたひとりの男のせいで、私たちの仲間の八割が殺された」

「うわ……相変わらず、容赦ないな」

「私もその男と対峙した。彼は何一つ表情を見せなかつた  
その言葉にリニアは眉を動かす。

「ちょっと待つて。私の記憶が正しいなら、ハンスは一度狙つた相手は最後まで追うと思  
うんだけど」

「おそらく目標が変わつたのだろう。私は殺す価値もない程の相手だつたということだ」  
「なるほど」

「その後、私が本部に戻つた頃、急進派の人間は本部に残つていた者以外、殆ど亡くなつ  
ていた。そして研究所の実権は穩健派の人間に移つてしまつた」

「ストップ!!」

ぶつぶつと、まるで念佛でも唱えるように咳き続ける男に対し、ついにリニアは我慢でき  
ずに大声を上げた。

「いい加減聞き続けるのも飽きた!! 研究所の事情なんて知らないし、私が戦つた研究所の  
人間つていうのは、目的のためなら手段も方法も選ばない、殺人、密売、人体実験。何で  
もありな連中だつた。被害者なフリなんてしないでほしい!!」

「……そうだな、私たちは世間で言う悪党そのものだ」

「そう、そしてあんたみたいなのは、適当な悪党。大悪党にすらなれなかつた中途半端な  
存在」

「適当な悪党。そんな言葉初めて聞いた」

男は腕を構え、戦闘態勢に入つた。

「私がこの地に来た目的は二つ。一つは、仲間の敵のためリニア・イベリンを排除するこ

と。そしてもう一つは、etc の文書を取り戻すこと

「ちよつ……あんたの仲間を殺したのはハンスでしょ!? 何で私!?!」

「奴の代理だ」

男は笑った。その時、初めて男は感情を見せたのだ。

\*\*\*

「はあ……」

奏はため息をついて窓を眺めた。先生も、鈴木も、リニアも向かつたのに自分だけはここに留まるしかない。そう思うと何故か寂しさがこみ上げてくる。まるで自分は役立たずのようになってしまったのだ。

「ねえねえ、それで私たちは何をしていればいいの?」

「わからない」

「な……何なんだよ、さつきから。敵が攻めてくるんじゃないの!?!」

上の空の奏に、ノエルは地団駄を踏んで話しかけてくる。しかし奏の言う通り、いつ敵が攻めてくるかも分からぬ状況、且つ敵の力量もわからぬままでは対処のしようがないのだ。自分はどうするべきなのかわからない、奏は当惑していた。そんな奏を見て、真田はそつと彼女の頭に手を置く。

「落ち着いて」

「……先生」

「大丈夫、きつと上手くいくわ」

「……本当にそうでしようか」

「今はまだ待ち続けるの、上手くいくと信じて。私はそうやつて生きてきたわ」

そつと笑いかける真田を奏はじつと見ていた。そんな真田の服を掴んで離さないノエル。きつと彼女も現在の状況が非常に緊迫したものであるとわかつているのだろう。奏は意を決すると、自身の部屋を目指して走った。そして、勢いよく筆筒を引きだす。そこには白い着物があった。

「私は……私のやるべきことは」

奏は迷うことなく服を脱ぎ捨て、その着物に腕を通す。奏にとつて、一切の汚れもない純白の戦闘服だ。そして彼女は御幣を手にした。

「たとえどんな敵が来たとしても、私は最善を尽くして阻止する」

一皆に頼まれたから、大切な自分の家を奪われたくないから。

奏は目を閉じ、覚悟を決めた。

「……誰か来る」

瞬間、妙な気配を察知した奏は外に向かった。ノエルと真田も同じく気配を感じたのか、彼らと途中で合流すると、三人揃って外出した。彼らの数メートル先で誰かが立ちつくしている。赤い髪をした男。青年と言うよりは少し

年老いた印象だが、その活き活きとした表情で妙に若く感じられる。

「ここがあの女の家か!!思つたより素朴だな」

男はきよろきよろと顔を動かしながら、奏たちに近づく。

「君、この家の間？」

男の間に、奏は無言で頷く。

「そつか、それじやあ勝手にやつてきて悪いけど、こちらも用事あつてね。魔女が持つて  
いるetcの文書、どこにあるのか知つていてるかい?返してもらいに来たんだけど」  
「……そんなもの知らない」

無愛想に答える奏に対し、男は困つたようにため息を零した。

「知らないか……確かに、簡単に教えてくれるわけないよね。それじやあ、君たちを全員  
処理して、自分で探すしかないのか」

そう言うと、やつと男は奏の後ろで立ち尽くしている二人に目をやつた。

「あれ、良く見たら脱走兵たちぢやないか。こんな所で会えるとは思わなかつたよ」

「……ケラー」

男の名を呴くノエル。彼女の顔は色を失つていた。

「いつから私の名前をそんなに堂々と言えるようになつたんだ」

ケラーと呼ばれた男は、鋭い目つきでノエルを睨みつけた。思わず彼女は真田の後ろに身を隠す。一方の真田は真つすぐと男を見据えていた。今にも戦闘を始められる態勢だ。事実、彼女はノエルと違ひ戦闘を目的として造られた存在。普通の改造人間より、いくらか丈夫に作られていた。

223.psd

「女三人か。仕方ない。礼儀に反しても目的は実現しなければならないからな」  
そう言うと、男は親指を鳴らした。すると男の背後から徐々に黒い物体——影が這い出てきた。

「ノエル、お前の弟たちだよ。感情と思考を制御するより、そのまま人間の形をしたもの  
を量産する方が遙かに費用も安く収まつた結果だ。芸術性は無くなつてしまつたがな」  
恐怖と驚きを隠せないノエルと真田に対し、奏は必死に冷静を保つように努めた。

「だめ、私がここを守らないと。

奏は一心不乱に御幣を振り始めた。

「へえ……これが巫女の力か」

男は興味深げに奏の儀式を眺める。

「けど私の報告書だと、君の力は直接的な攻撃は無理なのだろう?」

男の言う通りだつた。奏の能力は相手の動きを止める事ができるが、それだけである。

「二人とも!!早く!!」

奏の声に、すかさずノエルは懷から拳銃を取り出し、引き金を引いた。男の身体は奏の効果で身動き一つ取れずに、弾丸を受け入れる。真田も男に向かつて走り出し、忍ばせていたナイフを押しこむ。

静寂。

男は拳銃に撃たれても、刃物で刺されても、苦痛一つ顔に出さなかつた。

「そんな……どうして」

驚きを隠せない真田に対し、男は笑っていた。

「既に策は打つてあるに決まっているだろう」

動けないはずの男の身体が動いている。すかさず真田は後退した。

「一種の催眠術だよ。私の友人に空間催眠という能力を持つた奴がいてね、残念ながら私はその才能がなかつたが、催眠について興味を持ったんだ。どのタイミングにどのように行動すれば、相手が催眠にかかるのかを。空間催眠程ではないが、私も多少は魔法を使える身だ。自身の研究結果と魔法を合わせた結果、今君たちは私の術中というわけだ」

話しながら、男の姿はまるで影分身のように一人、二人、三人と増えて行く。影と共に、男はゆっくりと奏たちへ近づいていった。恐怖で真田にしがみつくノエル。そんな彼女たちを見て、一層声高くケラーは笑つた。

そして、拳銃の先を奏に突きつける。奏は緊張と恐怖で動けずにいた。せめて、弾丸だけは見たくないと思は両目をきつく瞑る。

「悪いな、お嬢ちゃん。これも仕事だ」

——パンツ !!  
——パンツ !!  
——パン !!

三発の銃声。

奏はゆっくりと目を開ける。

すると、目の前の男は苦悶の表情で体を押さえていた。そして、奏の背後、攻撃が飛んできた方向を睨みつける。

「つたく、こうなるとは思っていたんだ。リニアに任せたところで、勝手に飛び出していくに決まってるだろ」

「くつ……お前は」

奏も男の視線の先に目をやつた。そこには彼女も顔なじみの男、時宮葵が立っていた。

「ごめんね、全員飛び出してつた時からここにいたんだ。それでコイツを待っていたつてわけ。そうじやなきや、俺も催眠にかかるちやう可能性があつたからさ」驚いた表情を向ける奏に笑いかけた後、すぐに彼は男へと視線を戻した。

「実際に会うのは始めてだね。【若いケラー】……協会内でも有名だよ、三年前の戦いで生き残つてしまつた、可哀そうな人間の一人として」

「これは、これは。Eva ショックの英雄じやないか。なるほど、腹部に水弾三発……中々

のダメージだ、水も侮れない」

「痛いはずだ、それは只の水じやない。かなり圧縮されているからな」

「そう言うと、葵は手に持つていた水筒を軽く振つた。

「空気で作るよりだいぶ効き目がある」

そして、彼は笑いながら男に声をかけた。

「ケラーの催眠は有名だ。三年前にも同じ被害を受けた人間は多かつたからな。だから協会の指針書にも書いてあるんだ。催眠にからないためには戦闘に入る前、「ケラーの声を

避けなければいけない」、「ケラーと顔を合わせてはいけない」、「ケラーの行動を無視しなければいけない」。悪いけど、今回そこの三人には囮になつてもらつたわけ」「そうか……私も有名になり過ぎてしまつたというわけか」

息を荒げながらも、男の闘志は未だに消えていなかつた。彼は葵を睨みつけ、「etc の文書……お前ならどこにあるか知つているだろう」

「残念だけど、俺にもわからな」

「なんだと?」

当惑する男を無視して葵は再び腕を構える。

「そんなことより……他人の家に許可なく訪れるなんて礼儀がなつてないね。それ相応の罰は受けてもらうよ」

「葵……」

ふと、奏が葵の服を引っ張つた。彼女も何か力になりたいようだつた。

「奏、君は戦闘に長けていない。後ろの二人はそもそも相性が悪い。俺一人で大丈夫だ」

その言葉に奏は残念そうに俯く。

「けど、奏。その勇気には感心したよ」

葵は彼女の頭を優しく撫でて笑いかけると、ノエルと真田に目を移した。

「あの男は俺が引きうける。あんたらは奴の背後に控えている影を倒してくれ」

「は……はい」

真田はぎこちなく頷く。一方のノエルは小刻みに首を横に振つていた。

「だ、だめよ。私には……できない、してはいけない」

「……それはお前の意志か。ミス・ノエル」「え？」

再び葵は腕を構える。彼の指の先はケラ一、ただ一人に向けられていた。

「さあ……ケラ一、始めよう。俺を倒してから、好きなだけ文書を探せ」

「ははは、いい度胸だ青年。私も楽しくなつてきたよ」

そしてまた、新たな戦いの火蓋が切られたのである。

\*\*\*

いくら傷を負っているとは言え、相手の力量が知れない。俺は先手を打とうと、男一口ベルトに向かつてナイフを投げた。男は体をひねらせて難なく俺の攻撃を避ける。

「……訳がわからないと言う顔だな」

顔に出ていたのだろうか、見事に男は俺の胸中を言い当っていた。そのくらい彼にはまだ余裕があるのだろう。

「なに、ストーカーが女を攫つただけの話だ」

今度は男の反撃だ。彼は俺に銃口を向けた。すかさず俺は床に紙を飛ばす。青い光が出るや否や、俺はすぐに走り出した。そして、紙をつけた矢を打ち放つ。しかし、相手も手負いの者とはいって、腕前も確かだつた。男はまるで俺の攻撃を見透かしているかのように攻撃を避け、そのまま鉄骨の裏へと身を隠す。

「なるほど……頭の回転といい、根性の強さ、サポートとしての腕は悪くないと思うぞ」

サポートーとして……つまり一対一の現状では俺の方が下だと言いたいのか。

「おい、そろそろ本当の目的を言つたらどうだ？」

俺は鉄骨の影に隠れる男に向かつて声をかけた。

「目的……さつき言つた通りだ。私は仲間の敵を取るために来た。etc の文書も目的と言えばそ�だが、あくまでも私にとつては『ついで』だ」  
「そうじやなくて……どうしてここまで来たのかつてことだ!!その文書には何が書かれている!?それを手にして、あんたらは何をするつもりなんだ!!」

「そういうことか、そ�だな……休憩と称して語つてあげよう」

つい声を荒げてしまつた俺に対し、男は至つて冷静に話を切り出した。

「etc の文書、そこには古代から中世まで、etc と呼ばれた数多くの能力が記録されている。現在でも確認されている、空間創造や憑依、物取りに空間催眠、未来予知なども含めて。そんな文書を手にした暁にはどうなるか、君にも想像できるだろう」

俺が何も返さないでいると、男は小さく笑つて答えを告げた。

「etc という能力が学問化されてしまう可能性が出てくる。その能力を学んだ他人が同じ様に使えてしまうんだ。先ほどから君が使つた文字の魔法、あれも魔女が学問化した一種のetc だ」

「ということは、先生はその文書を知つていた。あるいは持つていたのか」

「彼女が亡くなる前、大量に彼女の著書が消えてしまつたから推測に過ぎないがね。おそらくその中のひとつにあつたのだろう、唯一彼女が書いていない本。作者不明の幻の本がな」

「……etc の学問化、それは悪い事なのかな？」

「協会側は良しとしないだろう。etc の学問化は自分たちだけで秘匿したいと考える連中

だ」

俺たちの声だけが部屋中に響き渡る。改造人間たちはとつくに先生の手で倒されたのだろうか。

「まあ、私はそんな幻想に興味はない。私の研究分野に関係がないからな。だが、他の連中は違う。奴らは本当にその幻想を信じ切つている」

「それで？ あんたらはそれを手に入れて、学問化して、何をしたいんだ？」

「やあな」

男はぶつぶつと答えた。本当に彼は知らないようだ。

「私もどいで、どう使うのか知りたい。いや、奴らもそこまで考えてないのかもしれない。とりあえず急進派の権力を高めたいだけ、協会の動きを牽制したいだけかも知れない。まあ、でも、少なくとも世界征服位の目標はあるんじゃないのか？ 征服して何がしたいんだろうな」

「俺に聞かれても困る」

「そうだな、私も知らない事を君が知るわけがない。よく聞け、青年。君と話すのはこれが最後になるかも知れない。これは私の気まぐれだ。今、この地に来ているのは私を含めて四人。内二人は本当に文書を探しているが、私ともう一人はおそらく違う目的だ。だが、文書を狙っている連中が本当に etc の学問化を為したいだけなのかーその答えを得られるといいな」

そう言うと、男は鉄骨の影から姿を現した。決着をつけようと言ふ意味だらうか。  
俺も再びボウガンを構える。

\*\*\*

「お久しぶりです、姫様」

「随分と立派になつたのね、嬉しくて涙が出そうだわ」

言葉とは裏腹に、彼女の顔は皮肉気に笑つている。

「大いなる風よ!!」

魔女は掛け声と共に勢いよく右手をベルコルに突き出した。周囲の風が彼の頭上に集まつていく。

「O svaté požehná ni!!」（尊い祝福を）

男が声をあげると、その空気の塊は突如現れた閃光によつて跡形もなく消えてしまつた。舌打ちを零し、彼を睨む魔女。一方のベルコルは、非常に嬉しそうな表情を浮かべていた。魔女は周囲を見渡す。そこは先ほどまで自身がいた場所ではなく、別の空間。似通つてはいるが、空気のようなものが違うと魔女は直感的に感じていた。

—人工的なもの、あるいは異次元か。

魔女は周囲の分析を終えると、やつと男へ声をかけた。

「何百年間も生きてきたおかげかしら、空間創造まで出来るようになるとはね。けど、空間創造の能力を持つてゐる人間はまだ生きてゐる。ということは、これは偽物。能力が継承されなかつたという証だ。アルベル、お前は継承者じやない。大方、etc の写本でも見て習得したつてところか」

男は魔女から話しかけてくれたのが嬉しいのか、再び口元を大きく歪ませた。

「そんな無粋な話は後です。姫様、私は何百年もの間あなたを探し続けていました」

「笑わせるな。十五年前、私を蘇らせたのはお前だろ」

「誤解です、それは私がやつたことではありません」

「黙れ、私の目的はただひとつ。お前を倒すためにこゝまで来たんだ」

魔女の言葉に、男はまるでその言葉を待つていたかのように感激し、大きく手を叩いた。

「素晴らしいです!! まさか姫様も私と同じ事を考えていらつしやつたとは!! そうだ、やはり姫様がetc の文書をお持ちになつてゐるんですね?」

「ああ、私が持つてゐる。十五年前に協会の地下から取つてきたよ」

「やはり……やはり姫様だつたんですね。あなたしかいないと思つていました」

胸が一杯になつて話す男。対して、魔女の顔からは一切の感情が読み取れない。

ふと、彼女は大きく息を吐き出した。

「何百年ぶりかしらね、私が死んでから初めて出会つたのが西暦1400年位だつたかしら」  
彼女の言葉を聞く度に男の身体は反応するが、何も言葉を返すことにはなかつた。魔女はな  
おも続ける。

「私の首が飛んだ後、よりもよつて私の弟子たちと協会を作つたなんて今考えても腹が

煮えくり返りそうだわ。そして何が気に入らないのか、協会を脱退した後は新しく研究所なんでものを作りだして……本格的に表に出てきたのは第二次世界大戦後、いやアルジエリア戦争以降か。何百年もずっと見ていたよ、保存液に首だけ浸かりながらも魂だけは残っていた。アルジエリア戦争もプラハの春も、研究所が成長していく姿もずっと見ていた。なるほど、さすがカール四世が信頼していた騎士団の団長様ね』

「そうです!!」

静かに聞いていた男が『騎士団』という言葉を聞くや否や、大声を上げた。

「私は騎士です、あなたの騎士だった。カレル・イルセンの息子のアルベルです!! 私はずつとあなたを……姫様の頃から……魔女になつて死んだ日も、その後も私は……」

「魔女。そう、私は魔女だ。ずっと魔女だった、そしてこれからも私は魔女として生きて行く」

「違います!! キルヘン!! あなたは聖女です!! 魔女なんかではありません!!」

「黙れ、お前の顔は不快だ」

「姫様……」

男は肩を震わせて俯いた。

泣いているのではない、男は笑っていた。

「ふははははは!! やっぱりそうか、天城紫乃の身体が拒否反応を起こしたか!! だから私はお前を復活させたくなかつたんだ!!」

「拒否反応? 残念ながら私は天城紫乃でもある、ちゃんと彼女としての記憶も持つている」「違う!! それはただのお前の勘違いだ!! 記憶がリバウンドしたに過ぎない」

自身が以前仕えていた人物とは違うと決めたのか、あるいは追い求めていた理想が全く違つたものになつてしまつたからか、男は狂つたように笑いだし、彼女に対する尊敬の念すらも振り棄てたようだ。

「いいか、偽物。私の狙いはお前が持つてゐるetcの文書だ。それで彼女……美しい金髪に碧眼の瞳、まるでかの湖の乙女のような聖女を、再びこの目ににするために私はここまで成し遂げてきたんだ」

その姿は神の御前に跪く敬虔な信徒のような表情をしていた。しかし、魔女はそんな男の姿を一笑に伏す。

「何を言ふかと思えば……私の身体を元に戻すつて？笑わせるな、アルベル。お前が望んでいるその身体は、お前自身が無残に切り裂いたんじゃないか」

「違う!!それは……あれは皇帝の計略に嵌つてしまつただけで……私は……。君は私にとつての唯一の、世界でたつた一人の美しき純潔の娘だつた」

「はつ、純潔の娘？600年ぶりだよ、そんな風に言われるのは。けど、やつぱり私には金色の魔女の方がお似合いだ」

「そんなことはない!!正気に戻つてくれ、キルヘン。天城紫乃なんていう醜い体を使つているからそんな風に思うだけだ!!その黒い服も何だ!!君らしくない、君には白が似合う!!それに……そんな腐つた茶色い髪が君の髪のわけがないだろう。君は天城紫乃じやない、君の名前は、皇帝も認めた予言の聖女の名はー、キルヘン・ヒネク・ルドミラだ!!」狂氣さえ感じる男の訴えに、魔女は一息置いて深いため息を零すと、懷から煙草を取り出して火を灯した。

「全く……興ざめだ。アルベル、お前病院で頭を見てもらった方が良いぞ。長生きし過ぎておかしくなつたに違いない。そんな貴族の端くれが養女に与えた名前の何が重要なんだ。私の名は金色の魔女キルヘン・スイートだ」

ふうと口元から煙を吐き出す魔女。これ以上取りつく島はないように見える。それでも男は訴え続けた。

「十五年前の実験……穩健派の連中が私の知らないところで君の魂を他人の身体に定着させてしまつた、それが成功してしまつた!! けど、けど、それは君じやない。今の君には不純物が混ざつている!! そうだ……魔法を体系化してしまつたあの時から、魔女と呼ばれるようになつてしまつたあの時から、私の心にはどこか虚無感が漂つていて。あの聖女がいろんな風になつてしまふなんて……。土地を荒らし、民を、仲間を全て肉塊のごとく惨殺しどうだから私は、そんな風になつた君を止めるために聖騎士団長として君を」

「お前が私に仕出かした事を忘れるつもりか。お前は私の子供たちを、身寄りのなかつた子供たちを城の中に閉じ込め焼き殺した!! 逃げ惑うあの子たちを次々と刺し殺した!! そう、だから私は魔女になつた。予言の聖女? 忌々しい!! そんな名前とつくな捨てた!! 「待つてくれ!! それは誤解だ!! 子供たちは既にペストに感染していた、完治することはないと、カール四世は仰つた!! ……因果律を曲げる魔法なんて、あの時代には厄災をもたらすだけだつた!! 君は子供たちを救うためとはいえ、etc の文書に手を出してはいけなかつたんだ!!」

「違う……それこそお前の妄言にすぎない。私はただ予言された事をそのまま述べていただけだ、だが予言は必ずしも良い事ばかりを伝えてはくれない。だから私は魔女だと決め

つけられた。お前たち帝国の人間に!! 私に魔女の烙印を押し、子供たちを焼き殺し、私の身体を引き裂いたのはー、お前だ、アルベル!!」ついに魔女も怒りを露わにする。

「浮かべ！ 美しい光よ！」

魔女が大声を上げると、彼女の周囲にはたくさんの光が浮かび上がる。そして、それは真つすぐに男へと向かつた。

「無駄だよ、キルヘン。こんな攻撃、私には通用しない」

そう言うと、ベルコルは静かに右手を突き出した。

「O posvátný plamen !!」（聖なる炎よ！）

赤い炎が魔女の光を包み込む。周囲は再び暗闇に満ちた。

「etc の文書に書かれた古代から中世までの記録の数々、その中には死者の身体を復元する」とも書かれているに違いない。私はもう一度、あの美しかった君の傍にいたいだけなんだ」

「魔法を毛嫌いした男が魔法を使っているなんて。しかも母国語で。懐かしい言葉に涙が出そう。けど魔法を使えるんだつたら、ing なんてものは必要ないんじやない？」

「それは違う、魔法は必要だとわかつたんだ。とても便利だ。それに ing も必要だ。あの能力があれば君の身体を戻すことも簡単だ。安心してくれキルヘン。すぐにその人形から出してあげるよ」

「……いい加減にしてくれ。もう懲り懲りだ。お前を信じて戦つた戦友たちも呆れている事だらう」

「そんなことはどうでもいい。私は君さえ取り戻せればいい」  
「……いい加減にしろと言つてるだろ!!」

魔女は鋭く男を睨みつけた。そして、

「開け！開け！絶望を持つ美しい漆黒よ！」

\*\*\*

「うわっ、結構強いじやん」

リニアは腕を擦りながら男——フーゴの顔を見た。先ほどから數十分以上、肉弾戦を繰り広げている二人。相手の拳を避けては攻撃し、相手の蹴りを避けては攻撃する。互いに似通つた戦闘パターンであり、リニアにとつてはある意味やりにくい相手であつた。この戦いででは持久力がいる。どちらかが集中力を切らせば、一気に形勢は偏るのだ。

リニアは心中で舌打ちをしながら、男の攻撃から目を離すことはなかつた。だが、彼女も自身が不利であることは気が付いていた。鈴木たちの前では平気を装つてはいたが、先ほどの銃痕はもちろん、先日の戦いでの傷も完治には至つていないのである。

「単純だが、迷いがない。なるほど、確かにハンス・ブリーゲルの弟子らしい」

「弟子じやない……娘だ!!」

リニアは勢いよく男に向かつて足を振り上げた。しかし、一瞬、傷の痛みに彼女の蹴りは

失速する。その一瞬を男は見逃さなかつた。彼はリニアの足を掴むと、その大きな肩で彼女の身体ごと遠くへ投げ飛ばす。戦いの流れが変わつた。

「ぐつ」

背中に伝わる衝撃に思わず咳を零すリニア。口からは容赦なく真っ赤な血が流れ出ていた。  
「氣絶くらいはするかと思つたが、意外に頑丈だな」

「体が取り得みたいな所はあるからね」

口元の血を拭き取り、何とか根性で立ちあがるリニア。しかし、男は彼女の様子に構うことなく攻撃を再開した。

彼が狙うのは左腕。とつさに反対の利き手でこれに対処しようとしたリニアだつたが、それすらも男は見抜いていたのか、男の肘が彼女の右肩を強打する。まるで電流が流れる様な痛みに、思わずリニアは顔を歪めた。しかし、男の攻撃はそれで終わりではない。右腕の痛みに態勢を崩したりニア、その身体に固い拳が食い込む。全身から血が噴き出す様な痛みをリニアは感じた。男の拳が入つたのは、ちょうど腹部。それも未だ傷の癒えない部分。彼女は気を保つことで精一杯だつた。

「……早くトドメを刺したらどう？」

「断る。何か策があるのだろう、油断できない」

男は一度体を後方に傾けると、勢いをつけてリニアへと突進した。トドメではない、まだ戦闘が続くと思つてゐるからこそその勢いだ。リニアは何とか体を傾けてその攻撃を防ぐが、地面を蹴る振動が衝撃として腹部に伝わつてくる。再び彼女の口からは血が漏れだした。しかしそんな事に構つてはいられない。リニアは精一杯の力で地面を踏みこみ、男の肩に

向けて拳を振りかざす。彼女はそのまま後方に飛んで防御に入ると思っていたのだろう、男は僅かに目を見開いて、その攻撃を受け入れた。そしてその攻撃の勢いのまま、男の身体は僅かに後ろに引き下がる。自身の拳が確かに男の体へ入った感触に、リニアは微かな希望を感じた。

「……もしかして、一対一の戦いって初めて？」

「どういうことだ」

「だから、戦争とかじやなくてこういう個人と向き合つての戦い」

そう言うと、リニアは大きく左足を蹴りあげた。攻撃ではない、彼女の目的は、男の周囲に舞い上がる土埃だ。

「くつ」

男は狭まる視界の中で動く影を見た。それに合わせて、防御を行う。リニアの拳は男の腹部に入る前に止められた。しかし、それで彼女の攻撃は終わりではない。

「命を懸けて戦う……それは相手の命も懸けるつてことだ」

そう呟いて、彼女は閉じていた拳を開いた。そこに握られているのは『雷』と書かれた小さな紙。それを男の身体に張り付けると、彼女はすぐに後方に退いた。

瞬間、眩しい閃光が男の身体を包み込む。

「魔法士が魔法を使わないわけがないでしょ」

男はかなりのダメージを負ったのか、体をよろめかせた。そこにリニアの拳が再び襲いかかる。男は防御することもできず、その身体は先ほどのリニアの様に大きく後ろへと飛ばされた。男の口からうめき声が漏れる。しかし、その瞳は依然として戦意を保っていた。

立ちあがる事もできない男の足をリニアは踏みつける。  
ぎりぎりぎりぎり……

骨が折れる音がした。男は声を上げることもなく激痛に耐えている。それでもなお男の戦意は消えない。リニアはその姿に一瞬戸惑いを見せるが、戦いの結果は目に見えていた。

「私の勝利でいいかしら」

「……君の勝ちだ、さすがハンス・ブリーゲルの弟子」

「だから……弟子じやないつてば」

男は負けを認めたのか、顔を落として静かに語り出した。まるで最後に言い残した事があるとでも言う様に。

「私たちが探していた知識は何だったのだろうか。私たちは一体何のために中東に行つたのか、そこで何を得られたのか。そして何故三年前の戦いは起きてしまったのか」

リニアは静かに男の言葉に耳を傾ける。

「ハンス・ブリーゲルという男にもう一度会えば、答えを得られると思つていた。あの男のおかげで私の人生は、良くも悪くも変転したのだ。だが、その男には会えそうにもない。日本にその男の弟子がいると聞いて、私はやつてきた。そいつと戦えば、或いは答えを得られると思った。何故我々は知識のために命を懸けて戦つたのかと」

「答えは出たの？」

男は静かに首を横に振る。

「そう……それは残念ね。あの……ずっと気になつっていた事があるんだけど、あんたは何を研究しているの？」

彼女の質問に男は思わず口元を綻ばせる。

「敵のお前に話すわけがないだろう」

そして震える手で、彼女を指さした。

「リニア・イベリン。ひよつとしたら、君も研究の対象かもしれない。0.1%に分類される劣等生……君ならおそらく分かるだろう。知識に対する渴きを。そして、それを欲することを」

男の腕が下がる。それ以上、彼の口が開くことはなかつた。死んではいない。おそらく気を失つたのだろう。男はこの後、協会に引き渡される予定だ。そこでどんなことが行われるかは、リニアには想像もつかないだろう。

「……そう、私は〇.一%の劣等生。あんたたちの考えもわかるかもしれない。目の前にあるかもしれないものを掴めないのは、とても窮屈で苦しい」

リニアはボロボロの身体を引きずらせて立ちあがつた。

「でも私はあんたたちの様にはならない——誰かを殺してまで魔法を習いたくはない」

冬の冷たい風が銀色の髪を揺らした。

\*\*\*

「ケラー、そろそろ自分が不利だつてわかつたか？」

「くそ」

元々、ケラーは戦闘要員ではなかった。彼は催眠が専門であり、必殺と呼べる攻撃もないサポートナーのような存在だ。更に連れてきた影たちは、改造人間に抑えられ実質etcの能力者、しかも攻撃型の人間をひとりで相手にしているようなものである。

男は周囲を見回し、残っている影を確認した。しかし、彼らはノエルと真田の相手で手いつぱいだ。

「諦めて退くなら見逃してやる」

「ふざけるな!!此処まで来たんだ!!私の友人も命がけで戦つた!!研究所に私たちの居場所はない、居場所を作るために私はここまで来た!!」

葵の言葉に男は息を荒げて拒絶した。それでも彼は冷静に説得を続ける。

「状況をよく見てみる。本当にここを狙うんだたら、あんたは戦闘要員としての仲間を連れてくるべきだつた。あんな量産品、安く作れる分性能は低いだろ。能力持ちを相手にするには明らかに戦力が足りない」

「ガキが……そこをどけ」

「どけないね、ガキでもここを守らなくちゃいけない。俺もここが無くなるのは色々と困るから」

男の鋭い視線に葵は構うことなく続けた。

「あんたは研究所の人間の中でも賢明な方だと思つていたけど……ケラー、負けを認めて撤退しろ。これが最後の機会だ」

男は怒りで顔をこわばらせる。

現状、彼に勝利の可能性は少しもなかつた。影は同じ改造人間であるノエルと真田が相手だ。弱点をわかりきつてゐる敵と戦つてゐる様なもの。自身の最大の武器である催眠は看破されてしまつてゐる。

「大人しく帰つて研究を続けていれば、とりあえず長生きはできるよ」  
しかし、彼が男の言葉を聞き入れないのには別の理由があつた。時宮葵……協会以上に研究所の人間を嫌つてゐる男だという。そんな人間がここまで説得して自身を生かしたまま帰すとは実に奇妙な話だつた。

「言つておくけれど、これは俺の独断。魔女はこの事を知らない」

「どういうことだ」

「別に気まぐれとかでもない、あんたを生かしておくのもいいと思つたんだ」

男は葵の目を真つすぐと見据える。何か考へがあるのは確かだらう、だがそれが何かはわからぬ。

「早く決める。撤退するか、それともここで死ぬか」

男の頭に合わせて、葵は指をあげる。今すぐにでも力を入れれば、そこから圧縮された空気が飛び出しえるだらう。

男は葵に背を向けた。ここで死ぬわけにはいかないようだ。

「時宮葵……この屈辱、私は絶対に忘れない」

相当屈辱的なのか、彼が噛みしめた唇からは血が出でている。

そして男は影を連れて、静かに幼稚園を後にした。葵は満足げな表情でその背中を見送る。

「若いケラー！……急進派の中でも重要人物のはず、何で見逃したの？」

じつと立ち尽くす葵にノエルが訊ねた。

「さあな。自分で考えた結果だ」

葵は軽く流す。そんな彼らの足元には無残にも倒された影が横たわっていた。

「……ごめん、君たちが私たち以降に作られたのだとしたら本当に姉弟なのに」

ノエルは少しだけ身をかがめて、影の頭を撫でた。真田も悲しげな表情を浮かべている。

そんな彼らを横目で見ながら、葵は口を開いた。

「三年前の事件以降に製造された改造人間はみんなそんな奴らだ。安物の量産品、でも君たちは違うんだる。思考と感情の制約を解かれた改造人間、それはもうただ身体が丈夫なだけで人間と大して変わらない。それなら現実を見る、思考をしろ」

葵の目には、彼らが嘆き悲しんでいるように見えたのだろう。彼はやや強気な口調で叱責する。しかし、すぐにそれは困った様な笑顔へと変わった。

「まあ口ではそう言つても、実際はそんな風に生きられないものだけどね。一回、言つてみたかっただけだ」

そんな彼を見て、ノエルは驚きを隠せずにいた。

「笑うところ……初めて見た」

「そう？」

葵は照れくさそうに頭を搔いた。そんな彼を黙つて見つめているもう一人の少女。

「どういうつもり？」

奏は問い合わせる様な視線を葵に向ける。

「何でのあの男を生かして帰したの？先生が知つたら怒るよ」

「誰も言わなければ大丈夫だ」

「そういう問題じやない」

奏の問い合わせに観念した葵は、やれやれと肩をすくめる。そして真意の見えない、どこか普段とは違う笑顔で、「俺が金色の魔女の指示に従う必要はない」

「え？」

「それにさつきの奴は【若いケラ】っていう異名があるんだ。自尊心と傲慢の塊、そんな奴が敵に情けをかけられて撤退なんて屈辱的だろ？」

意地悪そうな顔で笑う葵。いつのまにか彼は普段の表情に戻っていた。

そして葵は、外は寒いからと三人を室内へと促す。

幼稚園に戻る前に葵はもう一度だけ彼方を振り返つた。

そして黒煙を上げる二つの建物を見て、独り言のように呟く。

「……etc の文書は、予想通り金色の魔女が持つていた、か。これからは研究所より協会の方が五月蠅くなりそうだな」

\*\*\*\*\*

次の一発だ。次の発で俺は決着を終えたかった。これ以上この建物に長居していたら、

それこそいつ崩壊してしまうかもわからない。

「私は何度も悩んだ、何故こんなことをするのか、面倒ではなかつたのか。何度も何度も考え、そして悩んだ。答えはただひとつ「私も人間だつた」

男は戦意があるのかもわからない。まるでネジが抜けたロボットのように、覚束ない足取りで俺に近づいてくる。その姿に何故か俺は恐怖を抱いた。

「く、くるな!!」

自分の言葉もわからないほど、俺は無我夢中でボーガンを放つた。男は避ける事もなく、真正面から矢を受ける。その姿に一層俺は恐怖した。叫び声を上げながら、俺は次々とボーガンの矢を引き放つ。それでも男は止まらない。気づくと俺は、ナイフを片手に男に向かつて走り出していた。

—肉を裂くあの独特の感触。筋肉の僅かな抵抗。溢れ出る血液。

男は俺の攻撃を全て受けた後も、表情ひとつ崩さずにいた。まるで本当にロボットを相手にしているみたいだ。ゴゴゴという重低音と共に建物が揺れる。俺は少し後退して、相手の様子を窺つた。  
「人間も案外、丈夫にできている。それに乱射するなら確実に目標物を打ちぬかないと意味がないぞ」

「うああっ!!」

男の放った銃弾は綺麗に俺の足を貫通した。俺は激痛に声を上げるが、目の前の男の方が

遙かに傷は深いはずである。至るところに矢が刺さり、腹部からは出血している。それに、男は無言で俺を見下ろしていた。

「面倒臭いけど。君一人だけでもやつておけば……仲間に報いることはできるだろう」  
そう言つて、男は傍に落ちていたナイフを拾い上げた。そして俺に向けてゆつくりと振り下ろす。寸前で俺は体を転がせた。本能的に死ぬと感じてしまつたからだろうか。攻撃を外した男は特に悔しがる様子も見せずに突つ立つていた。俺はすかさず懐から麻酔銃を取り出して、男に目がけて放つ。ピシュツという小さな音をたてて、見事男の身体に命中した。

「なるほど、君の武器はボーガン、麻酔銃、ワイヤー……それだけか？」

「悪いかよ」

「いや、あえて拳銃を選ばない姿勢。素敵だと思うよ」

よくわからない誉め方をした後、男は再び俺に向けて照準を合わせる——それは今度こそ、俺の頭を狙つていた。

「これで終わりにしよう」

引き金が引かれる、そう思つた瞬間、俺は自分でも驚くほど物凄いスピードで懐から紙を取り出し、地面に張り付けていた。通常と同じバフ効果、しかし書かれている文字は違つた。

『動け』

男の拳銃が火を噴く。銃弾がまっすぐと俺に向かつてきた。

『動け!!』

瞬間、俺の身体は勢いよく右に飛ぶ。そしてその数倍にも早くなつた体で、すかさずボーガンの照準を男の心臓へ向けて、矢を放つた。僅かに見開かれる目。それは見事に男一口ベルトの身体に刺さつた。

男の身体は膝から崩れ落ち、仰向けに転がる。俺も撃たれた足に上手く力が入らず、その場に倒れこんだ。そして体を引きずつて男の近くにいき、その顔を見ると、男はぼんやりと天井を見ていた。おそらく、もう焦点を合わせることすら困難なのだろう。

「すばらしかつたよ……青年」

「そりや……どうも」

「青年、私は死ぬのか？」

「……このままの状態だと、そうでしようね」

「……そとか」

運が良かつたのか悪かつたのか、俺の腕前が悪かつたのか、それとも、最後まで俺は人を殺したくなかったのか、俺が放つた矢は心臓を僅かに逸れていた。  
彼はおもむろに口を開く。

「爆弾を設置した場所は、市庁舎の地下下水道……そしてその近くの高校、ここからも見える高層マンションの屋上……そして、その前にある工場と……この都市の中央にある博物館だ」

俺はすぐに携帯電話を取り出して、それぞれの場所だけを萎へと伝える。彼もそれだけで全てを理解したのだろう、すぐに通話は切られた。

「随分とあつさり吐いてくれるんだな」  
「私も一応プロだからな……約束は守る」

男は疲れたように小さく笑った。

「鈴木聰太……」

「どうして俺の名前を」

俺の返答に答えることなく、男は続ける。

「君は三年前の出来事を正確には知らないようだな……全く周りの連中も性質が悪そうだ」

「正確に知らない? どういうことだ」

「知りたいか? その真実を」

俺はすぐに頷く事ができなかつた。先生に、葵に、周りに、知らない方が良いと言われて、俺は今まであの出来事についてしつかりと聞いたことはなかつた。それを今、目の前の男は教えてやろうかと言つているのだ。

「ははは、予想通りの反応だ。まあ、これはこれでいい。私の最期の独り言だ……聞くも聞かぬも好きにしろ」

そういうつて男は静かに語り出した。

「君はetcの能力を持つている。確かに多くの人間はその能力を内側に秘めているが、それを開花させるかは本人次第……[Eng]、君の能力を私たちはそう呼んでいる」

「Eng……」

「それは三年前、私たちが最も欲した能力だ。そのために戦争を仕掛けたといつても過言

ではない

「俺の能力が……？」

「全く笑わせる。本人には使い方すら分からぬ能力を大勢の人間が狙つてゐるなんて……私は君の能力のために戦つた、そして多くの戦友を失くした。だから、私は君が嫌いだ」

そう言つて、男は俺の顔を見た。

彼の目は怒りというよりは、俺が困惑してゐるのを見て楽しんでいるように見える。

「ちよ……ちよつと待て!! 俺はそんなこと知らない!! そんなこと俺の記憶にはない!!」

「ははは、そうだ。これは私の意地悪だ。敵の言葉を信じるかは君次第。私だつて何もせずに死ぬのは嫌だからな」

「死ぬ？おい、待て!! わってのは何なんだよ!! どんな能力なんだ!! 何で俺は知らない!! 教える!!」

俺は無我夢中で男の身体を揺らす。

「ああ……死ぬ事は、こんなにも……面倒臭いのか」

「おい!! 教えてくれ!! 賴む!!」

——男の呼吸が少しづつ小さくなつていく。

何かを呟いていたが、あまりにも小さな声で聞き取れない。

—男の瞳から色が無くなっていく。

俺は必死に声をかけ、男の意識を保とうとする。

—やがて男の瞳はゆっくりと閉じられた。

そして俺は絶叫する。

＊＊

彼らの戦いは常軌を逸していた。

魔女が魔法を出す。だが、ベルコルもそれと同等の魔法を使い相殺する。【知識の宝庫】といふ異名がつくほど、彼の魔法は、彼の状況処理能力は長けていた。これも何百年も生きてきたおかげだろう。

「キルヘン!! 諦めろ、大人しくその身を差し出せ!! そんな器に収まっているから、動きが鈍っているんだ!!」

「残念だが、アルベル。私はこの体が気に入っているんだ。それに私は天城紫乃もある。だから、この体を捨てるつもりはない!!」

そういうと魔女は男に向けて腕を突き出した。

「——安らかだと思ひし者は衰える者を蔑み、足のよろめく者を押し倒す」

魔女の声と共に巨大な雷が男に向かつて落ちる。彼は苦も無くそれを華麗に避けた。そして男はすぐに口元を動かす。

「一見よ。束を満載した車が押えつけるように、わたしはあなたがたを押えつける。速く走る者も逃げる場を失い、強き者もその力をふるうことことができず、勇士もその命を救うこと�이できない。弓をとる者も立つことができず、足早な者も自分を救うことができず、馬に乗る者もその命を救うことができない」

神聖な文字の詠唱一過去、聖騎士の身であつた男は、過去、聖女として呼ばれた魔女同様の魔法が使用できる。そして詠唱は長ければ、長いほどその魔法の効果は強まるのだ。魔女は男の紛ぐ異様な詠唱の長さに警戒し、途中で破断させることに決めて、勢いよく男に向かつて拳を振り上げる。男はそれを避けるために後退し、詠唱も途中で終えた。

「野蛮だな、キルヘン」

「黙れ、不愉快だ」

「キルヘン、私が知つてゐる純潔の娘はそんな言葉は言わなかつた」

「キルヘン、キルヘン、五月蠅い。私の名前は天城紫乃だつて言つただろ。この街の戸籍にもちやんと載つてゐる、ちやんとした日本人だ」「違う。お前はキルヘンだ。天城紫乃ではない」

「いや、私は天城紫乃だよ」「静かに男を睨む魔女。対して男は魔女の表情全てを楽しんでいるようだつた。  
「なあ、キルヘン。魔法の原理はどういうものだと思う」

男は唐突に口を開いた。

「君が書いた本には、文字を利用した魔法はその言語に対する完璧な理解、その文章に対する完全な理解、そしてその全てを魔法に変換するための意志と希望が必要だと書かれていた。けど学問で体系化されたものに、人間の意志と希望が含まれているなんて可笑しくないか!? そんなものの学問だとは到底思えない!! そしてその魔法を体系化したのが君。だから私は魔法が気に食わないんだ、純潔の乙女を金色の魔女にした魔法が許せない。私は君を元に戻すためにしなければいけない、魔法を世界に公開しなければいけない!!」

初めこそ、冷静な口調だった男は次第にその顔に狂気を含んだ笑顔を浮かべて叫んでいた。

魔女はその姿をじっと、呆れたように見つめている。

【知識の崇拜】が研究所の主な行動方針。その中には様々な意味が内包されている。【知識は共有しなければいけない】、【知識は広く広まらなければいけない】。だが私たち個人主義の集まりでそれを実践することは難しい。けど【知識は広く広まらなければいけない】、私はこの言葉を気にいっていた。魔法なんてものは協会のように秘匿すべきではない。広く世間に知らしめる必要がある。世界中の内 99%、いや 99.9% はその素質を持つているからだ】

「非常識が常識になる。そんなことになつたら世界中パニックに陥るに決まつているだろ。アルベル、君が理想としているそれは、私が数百年前にやつたことと同じ顛末になるぞ。魔法を使つて町中を破壊して……拳銃の果てに四肢を落とされて火あぶりだ」

「それは中世だつたからだ。今は時代が違う」

「馬鹿馬鹿しい。中世であれ、現代であれ、人間は変わらない。非常識は【非常識】だか

ら受け入れ難いんだ。待っているのは混沌とした世界だけだよ。だから協会は魔法を秘匿している」

「世界がどうなるかなんて知った事じやない」

「なら、とつとと公開すれば良かつたじやない?」

「それではつまらない。何より品位が悪い、私は美しいものが好きだからね」

そう言つて男は魔女を見据えた。

「だから私は君が好きだ。愛している。いい加減、こんな話はやめよう。このままでは君の綺麗な魂まで、その醜い体の汚染を受けてしまう」

男は再び戦闘に戻るようである。

一時の静寂。目に見えない力がこの空間に漂つているように魔女は感じた。気づくと、男の両手は物凄い速さで動いている。そして男の口が再び開かれ——、

「一見よ。わたしの目は、これをことごとく見た。わたしの耳はこれを聞いて悟つた。あなたがたの知つてゐる事は、わたしも知つてゐる。わたしはあなたがたに劣らない。しかしあたしは全能者に物を言おう、わたしは神と論ずることを望む。あなたがたは偽りをもつて上辯を繕う者、皆、無用の医師だ。どうか、あなたがたは全く沈黙するように。これがあなたがたの知恵であろう。今、わたしの論ずることを聞くがよい。わたしの口で言い争うことには耳を傾けるがよい。あなたがたは神のために不義を言おうとするのか。また彼のために偽りを述べるのか。あなたがたは彼を立てるつもりなのか。神のために争おうとするのか。神があなたがたを調べられる時、あなたがたは無事だろうか。あなたがたは人

を欺くように彼を欺くことができるだらうか。あなたがたがもし、ひそかに自己を立てるつもりならば、彼は必ずあなたがたを責められる

「聖書をそのまま詠つてゐる……？」

長々とした呪文を的確に素早く。そして男は完全に自身の世界に入り込んでいた。自身の世界に入り込む、それはつまり自己に陶酔している——集中しているということだ。集中すればするほど、魔法の効果も格段に上がっていく。

魔女は自身の身に感じる力の大きさに驚きを隠せずにいた。

——これは神聖な力、信仰に満ちたものだけが使用できる選ばれた力。それも過去に忘れ去られたもの。墮落した者たちが使う禍々しいものとも違う。何であの男はこれを使える？ 人の首を切り落とした男に神聖な力？ 皮肉にも程がある。

男の頭上で光が収束していく。まるで巨大な球体だ。魔女の使用する抑止力を用いた魔法とは違う、本当に神を信仰する者が用いる神聖な力の魔法。いくら金色の魔女とはいえ、彼女もこれを真正面に食らえばタダでは済まないだろう。

「なるほど、その力を自由に使うために私をここに連れてきたのか。全ての非常識を常識にできる場所が必要だつたのね。けど、アルベル。あなたとても不愉快そうな顔で詠唱するのね」

魔女の挑発に男は一切耳を貸さず、詠唱を続ける。

「荒らす者の天幕はなりえ、神を怒らせる者は安らかである。神がご自分の手でそうさ

せる者は。しかし、黙に尋ねてみよ。それがあなたに教えるだろう。空の鳥に尋ねてみよ。それがあなたに告げるだろう。あるいは地に話しかけてみよ。それがあなたに教えるだろう。海の魚もあなたに語るだろう。これらすべてのもののうち、彼の御手がこれをなさつたことを、知らないものがあるうか。すべての生物のいのちと、すべての人間の息とは、その御手のうちにある。口が食物の味を知るよう、耳は言葉を聞きいれるだろう。老いた者に知恵があり、老いた者に英知があるのか。知恵と力とは神とともにあり、思慮と英知も神のものだ。見よ。神が打ちこわすと、それは二度と建て直せない。神が閉じると、それは開けられない。見よ。神が水を止めるとき、それは枯れ、水を送ると、地をくつがえす……」

男の詠唱は既に終えたのか、後はその光の塊を放つだけの様に見える。魔女は何とかこの空間を破る方法はないかと考えを巡らせていたが、つい先ほどその答えに至った所だった。金色の魔女——だが、彼女も初めから魔女として産まれたわけではない。教皇にも認められた予言の力は明らかに神に近い存在であつたはずだ。おまけにここは異次元の空間。現世の信仰とはかけ離れた場所ということは、彼女にも神を信仰する者としての力が備わっているのではないかと。

そして彼女は男のものよりも数倍の速さで詠唱を行つた。アルベルも少し驚いた表情を浮かべている。

魔女の頭上にも男のものと同じ球体が浮かんでいた。違う点は、色だ。真つ白な男のもと違い、彼女のものは赤と黒。まるで神聖さとかけ離れたその色は、全てを飲みこんでしまった。そうにも感じられた。

そしてついに、その二つの球体は、激しい閃光を放つて互いに衝突した。

\*\*\*

「けほつ」

思わず零した咳には、肺からの空気だけでなく鉄の味をしたものまでも含まれていた。銃弾で穴の開いた足から再び激痛が駆け昇つてくる。あまりの痛みにまるで胃の中身まで昇つて来そうだ。

先ほどから一切、目を開けずに横になつている男——ロベルトを見つめる。彼は俺の問いかけに答えることなく意識を失くした。死んだのか、あるいは氣絶しただけなのか。いずれにしても、この男の心臓にトドメを刺した方が死を確実にできるだろう。俺にそれができるのならばの話だが。

——殺したくない、人を殺したくない。

傍に落ちていた男の拳銃を手にした瞬間、俺の頭は俺の行為を否定する。

——既に死んでいるかもしれない。いや、既に俺は人を殺してしまつているのか？それなのに、俺は死んだ人間に向かつて再び撃つのか？確かに、死んでいない場合にはそれが正解

かもしれないけど、もし既に死んでいたら……

何度も何度も思考が巡っていく。この男が動かない限り、俺は答えを得られないのだろう。

「くそつ!!」  
いつまでも拳銃を構えるのに疲れ、俺は腕を降ろした。ふと、右ポケットに違和感を覚え、俺はゆっくりとそこに手を入れる。出てきたのは未使用のナイフだ。それはちょうど目の前の男の息の音を止めること位は可能な鋭さをしている。

—どうやってもこの男にトドメを刺せつてことか。

俺はナイフを両手で握り、男の身体に今一步近づいた。

\*\*\*

『見てください。生きているということは、こんなにも素晴らしいことなのです』

—これは過去の記憶？

『もう既にあなたもその意味を知っています』

一まるで映画でも見て いる気分だ。

『生き残つてください、私の騎士。あなたが生きている限り、私も生きていけます』  
幾つもの景色が彼女の脳内を流れて行く。まるで分厚い小説をパラ・パラと捲つているかの  
よう、その内容を読み取ることはできなかつた。

「うつ……」

巨大な閃光がぶつかり合つた後、辺りには霧が立ち込めていた。彼女の身体に苦痛はない。  
勝利をしたのかも分からぬ程、ぼやけた視界に、思わず彼女は目を細める。

「終わつたのか？」

「ああ、終わつた」

男の声は彼女の背後から聞こえた。瞬間、彼女の口からは真っ赤な血が飛び出た。

「アルベル……」

「言つただろ、キルヘン。その身体は君の身体ではない。そんな中途半端な存在で奇跡を  
発現することはできないんだ」

ベルコルの頬を涙が伝う。男はその手で魔女の心臓を掴んだまま泣いていた。

「そんな状態の君が私に勝つ事ができるわけがないじゃないか。全ての人間に祝福を与え、  
全ての人間に絶望を与えた君が、私なんかに負けるなんて……情けない」  
やつとの思いで首を回す魔女。彼女の視界には、悔しさと悲しみを織り交ぜた男の顔があ

つた。

「なるほど、この身体じや、あんたみたいな奴にも遅れをとるつてことか。まあ、でも悪くない。人間として死ぬというのもいいかもしない」

「キルヘン……姫様、もう戦いは終わりました。心臓がやられた以上、いくらあなたでも動く事は無理です。私が再び起こしに来るまで、今しばらくお休みください」

丁寧な言葉で魔女に語りかける男に対し、彼女は呆れたように笑みを零した。

「どうしてそこまでする？ そんなに元の姿の私に会いたいのか？」

「はい。その悲願を果たすため私は600年以上もの間、生きてきました」  
600年—彼女が死体となり、魂だけが残されていた長い間。この男はその時間を、彼女を取り戻すために捧げた。

「可憐だな、アルベル」

そう言い残すと、彼女は眠るように瞼を閉じる。

そして、キルヘン・スイートは動かなくなつた。

\*\*\*

ナイフを手にした腕を振り下ろす直前、目の前に巨大な光が現れた。

「何だ!?」

俺はとつさに腕で視界を塞ぐことで、目をやられることはなかつた。そして光が消え、目

を開けると目の前に男が立ち尽くしていた。

「お前は……!!」

「*君の*奴か。ロベルトは死んだか。わざわざ復讐のために残ってきて連れてきてやつたが、自死を選ぶとは」

「自死……？」

「ロベルトが貴様程度に負けるわけがないだろう。手を抜きでもしない限りな。まあ、とにかくそれはどうでもいい。既にこちらの計画は終わりだ。後は貴様だけだ」

「先生はどうした!?」

俺の言つた【先生】という言葉に、男は僅かに眉を動かした。誰だという顔をしていた彼は、すぐに要領を得ると嬉しそうに何かを取り出した。

「キルヘンならここだ」

「なつ……」

自分の目が信じられない。しかし間違いなく彼女はそこにいた。首から下以外は。

「貴様、初めて見るのか？綺麗だろ。目を瞑れば彼女に似ていなくもない気がする。髪の毛の色はまるで違うがな。さつさと魂を別に移さないといけない……理解し難いのか？魂は心臓ではなく頭、脳にあるんだ。だから私は首から上だけを持つてきただけだよ」

乾き切つてないのか、彼女の首からはボタボタと血が垂れている。先生だけど、先生じや

ない。

俺は目の前の恐怖をただ見つめることしかできなかつた。男は脳さえあればいいのか、先生の長い髪を怪訝な顔で掴むと、一気にそれを引きちぎつた。男の力が強く、髪の毛と共に肉も落ちて行く。

「う……ああああああああ!!お前っ!!」

俺は自分でもよくわからない叫び声を上げる。恐怖と絶望と、目の前の非常識に対する当惑を込めて。気づくと、俺は男に向かってナイフを片手に走り出していた。しかし、男は彼女の頬を撫でる事に夢中で、俺の方をちらりとも見ていない。

「くつそおおおおお!!」

あと少しというところで、俺は床に落ちた先生の髪に目を奪われてしまつた。前に進みたいという気持ちと立ち止まりたいという相反する気持ちのせいだらう。俺は肝心な所で躓き、手にしていたナイフは男の頬を霞める程度に終わつてしまつた。

「痛いな」

男はまるで獣を蔑むかの様な視線を俺に向ける。

「ほんたうがなんだらうが、非常に不愉快だ。それ相応の罰を与える」

そう言うと、男は勢いよく右手を振り下ろした。衝撃が頭の中を巡る。頭が真っ白になりそうだ。いや、事実既に視界は霞んでいる。かすかに男が嘲笑する声が聞こえた。

「これで用は済んだ。ロベルトは死亡、フーゴも戦闘不能、ケラーは逃亡か。まあ大方予想範囲だな」

男は左手に提げた彼女の頬を一撫ですると、恍惚とした笑みを浮かべた。そして目の前に倒れ伏しているロベルトに向かい、静かに口を開く。

「ロベルト、敵の手に渡る前に私がしつかりとあの世へ送つてやろう」

「マルゼンはその必要はないと思う」

男が詠唱を唱える直前、どこからか老婆の様な女性の声が聞こえた。

「マルゼンか」

「マルゼンが見るにロベルトはまだ生きている。だからマルゼンが回収する」「勝手にしろ」

男がそういうと、やつと物陰に佇んでいた少女が姿を顕わした。

おそらく鈴木颯太が意識を失つていなかつたのならば、彼女の姿を見た瞬間、大声で叫ぶ

だろうー「ノエル」と。

「それはそうと、未だ元の身体に戻れていないようだが、その身体は大丈夫なのか?」

「それはマルゼンが判断することだ。ベルコルが関与することではない」

「……相変わらず不気味な話し方だな」

「マルゼンの言語回路に異常が生じたのは仕方がない。この身体の副作用だ」

ノエルと同じ顔をした少女はロベルトを抱えると、割れた窓から外に飛び出した。男はそ

の背中を見送った後、再び目の前に倒れる男に視線を戻す。

「inは私が回収していくしかないか。まあ頭だけでもいいだろう」

口では面倒臭そうに言うが、男の機嫌は最高潮である。鼻歌を口ずさみながら、鈴木の方へと歩き出した。その時だつた。

「私を永遠に愛してくれ」

声の様なものが男の耳に響く。

「私を永遠に愛してくれ」

「何だ？」

非常に小さい声だが、音の発生源はすぐにわかつた。この場所には鈴木とベルコルーそして「彼女」しかいない。

男はゆっくりと左手に提げたものへと目をやつた。

「私を永遠に愛してくれ」

確かに彼女の唇は動いた。

男は自分でも知らない内にそれを床に落としてしまう。鈍い音を立てて、転がる女の頭。しかし、声が鳴り止む事はなかつた。

「私を永遠に愛してくれ」

徐々に大きくなる声。彼女の唇は同じ言葉を繰り返していた。  
「この……言葉は……!?」

彼女が死ぬ直前、男に贈った言葉。男の身体に死が訪れない証であり、呪いの言葉である。男は恐怖した。首だけの肉塊が言葉を紡ぐ事にではない。彼女に對して、男は恐怖した。

「私を永遠に愛してくれ」

「やめろ!!」

思わず男は彼女の頭に向けて炎を放つ。  
「しまった!! あそこには彼女の魂が……」

「私を永遠に愛してくれ」

「私を永遠に愛してくれ」

「私を永遠に愛してくれ」

炎に包まれても、彼女の唇はひたすら動き続ける。

瞬間、辺りが眩しい光に包まれた。

「何だ!?」

咄嗟に目を塞ぐ男。その一瞬の閃光が消えると同時に、男は驚愕した。

「有り得ない……」

彼の目の前には、自身の空間に置いてきたはずの胴体が立っていた。そしてそれは、床に落ちた彼女の首を拾い上げて在るべき場所へと戻す。

「数百年ぶりに再会したのに、あんたは同じ事しか話さない。飽きたよ、まさか本当に最後まで同じ事を話すとは思わなかつた」

目の前で嘆息する彼女の言葉を男は聞いていなかつた。彼の脳内は疑問が駆け巡つている。

——何故、蘇つた。彼女も今は人間のはず。心臓を撃ち抜かれ、首を落とされて、生きているはずがない。何故だ。

彼女は男の意を汲んで、自ら説明し始めた。

「今私は人間というよりはゾンビに近いから。痛みはあっても、そう簡単に死にはしない」

「話にならない。それなら、既に人間ではない」

「そう、私は人間ではない。人間でいることは既に諦めているよ」

当惑する男の顔を無視して、女は得意げな顔で続けた。

「十五年前にetcの文書について知ったって言つたわよね？そりやそうでしょ、そういう風な噂が流れるようにしたのは私自身なんだから」

そこで彼女は一息をつく。再び口を開いた時、彼女の声は変わっていた。雰囲気はもちろん、その声は先ほどよりも幾分高いトーンになつていて。

「ああ、アルベル。私はとても悲しいです。まさかここまで思い通りにいくなんて思いませんでした。アルベル、私があなたを忘れた時はありませんでした」

「そ、その声は……」

男にとつて懐かしい声。一番聞きたかった声であり、今は一番聞きたくない声だ。

「十五年前、研究所を脱出する前から私はあなたの事を知っていました、アルベル。私をこんな風にしてしまった、あなた。私はずっと、復讐をしたかったのです」「や、やめてくれ!! その声で話さないでくれ!!」

269.psd

男の絶叫も空しく、なおも彼女は口を閉ざすことはなかつた。

「アルベル、もう遅いです。あなたがそこにいると知つて、私はすぐに協会からetcの文書を取り戻してきました。その時、imgについて知りました。それを保有している人間について。そして、私はあなたを待つことにした。あなたは私の捕虜、私の愛の捕虜。必ず私を元の身体に戻してくれると思つて、ずっと待つていました」

「キルヘン!!」

「三年前のショック、あなたは私が捲いた餌に見事引つ掛かり、imgを口実に攻めてきました。でもあの時、あなたは研究所に留まつていて会えなかつた。だから代わりにあなたの周りの人間を排除していくきました。あなたから全てを奪いたかつたんです。全ての権力を失くしたあなたを後悔させてあげたかつたのです。計画通り、急進派は壊滅状態に陥りました。それでもあなたは私を取り戻しに来ると思つて待つていました。ああ、アルベル……あなたはなんて哀れで愚かな人」

男は何も口を挟むことなく、彼女を一心に見つめていた。ひたすら彼女の言葉に耳を傾けているのだろう。

「四肢を切り落とされて、魂を封印されて目覚めるまで数百年。目覚めてから活動するまで十五年。長かつたけど、ついにこの時が来ました。アルベル、私はやつとあなたに復讐することができます」

「待つてくれ、キルヘン。君はおかしい、人間ということを放棄してまで何故」「おかしい!? そう、私はおかしい!! お前たちが私の子供たちを火あぶりした後、お前は何をした!? ああ……私はこの時をずっと待ち焦がれていたんだ!!」

いつのまにか彼女の声は、以前の彼女のものに戻っていた。

「キルヘン!!」

「『動くな』

後退しようとしていた男の身体が止まつた。いや、動かす事ができないのだ。

「お前が知らない事を教えてあげよう。私がetcの文書を発見して、文字魔法を学問化したのはー、それが最も弱いものだと判断したからだ。魔法は文字より音声で発動するほうがよっぽど効率的だ。けど、私は音声魔法を学問化はしなかつた。これは私だけの特権にするためだ」

「キ……キルヘン!!」

「そう、その顔だ。まさにそれだよ。私はそれを見るために数百年待つていたんだ!!」

狂ったように笑いだす彼女を前に、男の顔は恐怖に歪んでいく。

「『開きなさい』

彼女は静かに呟いた。すると男の背後に空間を裂いて、黒い門が現れた。それは男を歓迎するかのように徐々に扉を開けて行く。

「etcの文書……そんなものあんたにあげるわけないだろ。只の餌だ。私の身体を戻したい？笑わせる、私は天城紫乃でもないし金色の魔女でもない。二人の記憶と性格は既に同一のものになつているんだよ」

男は必死に身体を動かそうとするが、彼女の魔法でびくりとも動くことはない。

「くそつ!!」

黒い扉の中——闇の中から何かが這い出てきた。

「紹介するわ。それはあなたたちが焼き殺した子供たちよ」

黒い物体が、男の身体に覆いかぶさっていく。心では抵抗を訴えるが、依然として身体は固まっている。彼女は爽やかな笑みと共に男へと近づいた。そして耳元で小さく口を動かす。

「ねえ、知ってる？　あなた、自分が本気で私に惚れていると思つていてる？」

「どういうことだ」

「私が首を切り落とされる瞬間、最後の瞬間、あなたの顔が目の前にあつた。だから私は死ぬ前にあなたに呪いをかけたの。私に惚れるという呪いを。お前が私に惚れるわけがないだろう!!　自身の家族も仲間も民も惨殺した私に惚れる奴がいるものか!!　お前は、私に復讐されるために呪われたんだ!!」

信じられないという顔だ。男には到底想像すらできない事実。その顔を見て、ひたすら魔女は笑いつづける。

「さようなら。私の子供たちも大歓迎してくれているわ」

「キルヘン!!　キルヘン!!」

男の断末魔が遠く木霊する。

黒い門は容赦なく男を取り込んで、扉を閉じた。

「『消えて』

魔女の言葉通りに、その黒い門は姿を消した。彼女も疲れたようにため息をつく。

「これで……全部終わったのか」

瞬間、戦場に似合わぬ軽快なメロディが彼女の懐から聞こえてきた。

「もしもし」

電話の主はリニアだつた。彼女は師匠の言う事も聞かずに戦闘に出たようである。やはり飛び出していつたのかと、弟子の真摯さに思わず笑みを零した。話の内容によると、リニアはもう一ヵ所別のテロの処理をしたと自慢をするために電話をかけてきたようである。

「お疲れ様、早くお家に帰つて休んでなさい」

そう言つて、彼女は電話切る。そして魔女は氣絶している鈴木の元へと近づいた。

「御苦労さま。巻き込んで悪かつたわね」

彼女は鈴木の頭を優しく撫でた。

「終わつたわ。もうこれで、全部終わつた」

そう呟く彼女の横顔はどこか寂しげである。

\*\*\*

「へえ……まさか私たちの旅行中にそんな大変なことが起きてたなんて」

幼稚園の職員室。天城遊幽は新聞を読みながら、姉である天城紫乃の話に相槌を打つ。彼

女は数日前までフランスにいたため、この町で起きた出来事を聞くのは初耳だつた。

「読んだ新聞はそこにまとめておきなさい。他の人も読むんだから」

「はーい」

彼女は新聞を読み終えると、やつと天城に顔を向けた。

「それで？どうなりました？」

「とりあえず、私の機嫌はいいわね」

「そんな言い方ではわかりません」

むつと顔をしかめる遊幽に対し、天城はそんな妹の姿を見て涼しげに笑つた。彼女にとつて妹をからかうことは楽しみでもある。

「まあでも皆さん無事なようですね」

「ええ、遊幽の方はどうだつた？旅行、楽しめたかしら」

すると、彼女は突然顔を手で覆う。先ほどまでの和やかな雰囲気が一気に暗雲立ち込めるものに変わつたのだ。

「ああ……姉さん。聞いてしまいましたね。あのバカは一日中、恋に敗れたアンダーソンと飲み歩いてましたよ。おかげで私は……一人でパリの街を……」

「あらあら」

目の前で泣きべそをかく妹を前に、彼女はつい苦笑いを浮かべる。ふと、天城は静かに嘆息した。

「平和ね」

「何がですか？」

「いや、何でもない」

先ほどから何度もひらりと躊躇している感じが嫌なのだろう。ついに遊幽は姉に向かつてずいっと身を乗り出した。

「さつきから何なんですか！！いつまでも適当に流せると思つたら大間違いですよ!!さあ、

姉さんが思っていることをそのまま仰ってください!!

「うーん、そんなことを言われてもな。私もどこからどう話せばいいのかわからないんだ」

「もう!!姉さん!!」

一段と頬を膨らませる遊幽。そんな彼女を見て、天城はまた楽しそうに笑った。

＊＊

「やあ……これは、これは」

非常にかすれた声で、ロベルトは自身を背負つて走る少女に声をかけた。

「マルセンだ」

「知っているよ……君は、今回……積極的に参加しないと、聞いたけど」

「マルセンが行動することはマルセンが決める」

「そうか……そして、私を助けると?」

「マルセンがそうする方が正しいと判断した」

「それにしても……少女におんぶされるというのは、少し恥ずかしいな」

「マルセンは少女ではない。四十は超えている。この体はただの借りものだ」

「そうだね……君の目的は男性に戻ることだつたね」

「マルセンが思うに、君は重傷だ。しばらく休んだ方がいい」

「そうするよ」

そして、ロベルトは再び少女の背中で目を閉じた。

「うわ、久しぶりすぎて誰だかわからない」というのは冗談である。だが、それほど俺は目の前に立つ男——赤城周と再開するのは久しぶりなのである。

「やあ、聰太。たしか半年ぶりかな。元気だつた?」

「元気かと言われても俺もよくわからない。俺は『元気そーか?』

そういうと、赤城は気持ちの良い笑顔で俺の雑な質問に返答してくれた。

「そんな風に冗談が言えるなら、君は十分元気だよ」

「それもそーだな」

しかし、俺が聞き返したのも満更ではなかつた。先日の事件のことがまだ頭に残つてゐる。あの男がどうなつたのかもわからない。俺は気づくと病院にいたのだ。幸い、足に銃弾が貫通したこと以外は大した傷もなかつた。足の方もそこまで重症ではなかつたらしく、この通り俺はすぐに退院できたのだ。

「まあ、でも当分は松葉杖怪人だがな」

「松葉杖怪人」か、なかなかのネーミングセンスだね

相変わらず赤城は楽しそうに相槌を打つてくれていた。そして彼は、思い出したように自身の鞄からたくさんの中身のプレゼントと思しきものを取り出す。

「今回のパリ旅行のお土産だよ、はい」

「ありがとな。いいな、海外旅行」

「うん。楽しかったよ」

ニコニコと笑顔を崩さない赤城。思わず俺は、悪戯心でその笑顔を崩したくなつてみたのだ。

「楽しかつたなら、良かつたな。恋人とも楽しくできました?」

てつくり俺は彼の慌てた顔、もしくは照れた顔でも見れると思つたが、

「友よ……女性は怖い生き物だよ」

何故か赤城は怯えた顔をしていた。

＊＊＊

「パースターハイ！」

ノエルはベッドの上で横になりながら足をバタつかせる。ここは真田のマンションだ。キッチンでは真田がしどろもどろになりながら、パスタを作っていた。

「これ、意外とうまくいかないね」

「ええ？ 頑張つてよー」

「ごめんね、やつぱりまだまだ色々と勉強しなきやいけないみたい」

「せつかくパスタ食べられると思つたのに」

「ごめん、ごめん」

そいつて真田はノエルへと笑いかける。

「じやあ私、お家帰るよ」

ノエルが言うお家とは、先日できた家だ。普段は幼稚園を経営している。真田は玄関で靴を履くノエルに向かい、車に気を付けること、知らない人間には付いていかないこと、とまるで母親のように忠告をしていた。すると、ノエルはむつとした表情で、「私のことお子様だと思つてる!?」

「うん」

真田の回答が気に入らなかつたのか、ノエルはべーっと舌を伸ばして、一目散に玄関を飛び出した。そんな彼女の背中を見て真田は小さく笑みを漏らす。

「だつてノエル、そんな嬉しそうな顔してんのなんだもん」

\*\*\*

「事後処理はどうでした?」

協会の休憩室。葵はからかうように笑い、目の前の男性に声をかけた。男は疲れたように休憩室の椅子にもたれかかる。

「どうもこうもあるか……お前らのせいで過労死するところだつたわ、改造人間の死体はそこら中に落ちてやがるし、マスコミはマスコミで一気に群がつてくるし、警察にも消防にも上手いこと話を言いくるめて」

「完全に権力による暴力だ」

「拳を振るう側にもそれなりのダメージがあるんだよ、馬鹿」

「もう一回こういうのが起きたらどうします?」

「勘弁してくれ……だが、当分はないだろう。核とも言える連中が消えたからな。まあ、

全滅したわけではないが」

男の言葉に、葵は困ったように笑みを浮かべ肩をすくめた。

「一人、生かしてあげた人もいるしね」

「何?」

「一人くらいは見逃してあげてもいいと思つて」

全く悪びれた様子も見せない彼に対し、男は非難するでもない、奇妙なものを見る様な視線を向けた。

「変わった男だ」

「そう?」

「まあいい。本人が自覚していない以上、いくら言つても無駄だ  
そう言つて男は懐から煙草を取り出した。

「おじさん、禁煙」

「うるさい。お前らのせいでコイツの数が増えちまつたんだ」

男は躊躇うことなく煙を吹かす。葵も彼の煙草癖には慣れたのだろう、それ以上何も言う事はなかつた。ふと、男は何かを思い出したかのように口を開いた。  
「金色さんにも今回の報告頼むぞ。あまり暴れるなつて。あと、奏にもよろしく伝えといってくれ。私の娘も奏と同い年でね、今度会わせたいと思つてているんだ」

嬉しそうに自分の娘を語る男。その姿は間違いなく一人の父親だった。

「呑氣だな」

「呑氣で何が悪い」

男はぶかぶかと気持ち良さそうに煙草を吹かしていた。一方の葵は、緩んでいた顔を引き締め、彼に改まつて声を掛けた。

「今回の事件、結局どう解釈すればいい」

男は葵を見ることなく、口元から煙草を取つた。

「私たちが全てを知つてから動いた事件が今まであつたか？私たちはただ、目の前に迫つたものだけを解決してきた。全てを知ろうと思つて前に出てもな、抜き出た釘は撃たれるつてのがオチだ。まあー、」

そういつて、彼は灰皿に灰を落とす。葵は黙つて男の言葉の続きを待つた。

「etc の文書が今後どんな影響を及ぼすかは分からぬ。研究所という脅威が無くなつた今、私たちにとつて邪魔が入る恐れはないからな」

「私たち……ねえ？」

「いいか、研究所と協会ではレベルが違う。悪戯に敵に回すな、私はお前と戦いたくはない」

男は真剣な表情で葵を見据えた後、目の前の男がニコニコと笑つているのに気付いた。どうやら、今の彼にとつてその笑顔は罰が悪いようである。男は葵に早々に出て行くよう促した。

「わかつた、わかつた。もう行くよ。それじゃ、おじさんも元気でね」

「ああ、お前もな」  
ひらひらと追い払うように手を振る男を背に葵は部屋を後にした。そして、一人残った男は、静かに煙草を口にくわえ直す。

＊＊＊

—研究所の次は協会。あいつも大変だな。まあ、研究所も完全に終わったわけでもないか。

「奏は大きくなつたら何になりたい?」

唐突な質問。奏はしばらく何を言われたのか分からないと言つた顔を浮かべていた。

「奏くらいの年なら夢多き少女の頃でしょ? 何になりたい?」

リニアは彼女の様子に全く気を止めることなく、再び質問を繰り返した。  
單なる暇つぶし程度の会話である。だが、やつと奏が意図的に黙つてゐる事に気がついたのだろう。慌てた様子でリニアは別の話題へと移ろうとした所、奏は違うと言つて首をふつた。

「ある。なりたいもの」

「へえ、何になりたいの?」

「……先生みたいになりたい」

少しだけ恥かしそうに俯く奏に対し、リニアは予想外の解答に呆然としていた。

「……それは、ちょっと。もう一回、ちゃんと考えよう、奏。心優しい奏がそんな怖い将

来を思い浮かべちゃ駄目だ、何なら私も相談にのるから!!」

「私も先生のように、堂々と生きたい」

「奏!! あれは堂々って言うんじやない!! あれは只のものぐさ人間だ。何考えているのか  
もわからぬし、たまにヒステリック起こすし、ケチだし、自分の欲しいものはすぐ勝手  
に買うし、奏はあんな大人になつたら駄目!!」

もはや天城に対する愚痴へと化したリニアの発言に、奏はしばらく黙つて聞いていたが、  
やがてすつと彼女に向けて指を指した。だが、それは明確に彼女に向けたものではない。  
その指は徐々に上へと上がり、やがて不思議に思つたりニアも奏の指の先に従い、後ろに  
振り返る。

するとそこには、笑顔の天城紫乃がいた。

「せ、先生」

「元気そうね、リニア。ものぐさでヒステリックで、自分が欲しいものはすぐ勝手に買う  
天城紫乃です」

冷たい笑顔を張り付けたまま、天城はリニアを見下ろす。その寒きについ背筋を凍らせる  
リニア。彼女は勢いよく首を横にふった。  
「ち、違う、違う。今のは冗談ですよ。本気にしないでくださいよ」

先ほどの言葉を否定しつつも、彼女の身体は徐々に天城との距離を開いていつている。

「リニア?」

「はい?」  
「待ちなさい!!」

天城の大声と共に、リニアは廊下に飛び出した。

「ご、ごめんなさい !! 許して下さい !!」

「許さんっ !!」

ドタドタと廊下を駆けまわる二つの足音。

やがてその音が遠ざかっていくと、奏は小さくため息をついて時計を見上げた。そろそろ夕飯の準備を始める頃である。

「今夜は何にしようかな」

「はあ……」

自然とため息が零れていた。

ing……俺が持っているとあの男は言っていた。一体どんな能力だというのだろう。

「ing なんて中学で習った英語以外で聞いた事ねえぞ」

それでも研究所は俺の能力——を狙っているようだ。奴らが欲しがるほどの能力。少なくともそれは平和なものではないのだろう。そう思うと、俺は少し身震いを覚えた。だが、いずれにしても――、

「直接聞いてみるしかないか」

心のどこかで、先生たちが話してくれないのをどこか気にはなっていた。ならばこの機会に、全て聞かなければいけない事を聞かないといけないのかもしれない。

そう思いながら、俺は松葉杖の先を地面で弄んでいた。外は寒い。赤城はスーザーに行くと言つて出掛けた。幼稚園に戻つてもいいのだが、今はそんな気分ではなかつた。一人で考えたい、そんな感じだ。

「助けて!!」

だが、そんな雰囲気も彼女の叫び声でぶち壊された。

「誰か!! 助けて!!」

声の主はリニアだ。彼女は一直線に目の前を横切つていった。そしてその後を、笑いながら追いかける先生。しかも幼稚園のエプロン姿だ。

逃げる外国人に、それを追いかける幼稚園の先生。

そのおかしな光景に、今度は呆れてため息を零した。俺の気も知らずに……。

「まあでも、何か聞くには後ででもいいか。これ以上、非常識なことにも巻き込まれたくないし」

これだけの事件の後だ、そろそろ俺に平凡な日常が帰つてくる頃だろう。明日からまた普通の大学生に戻れる。その事が俺にとつては何より安心した生活だ。

『果たして、誰が被害者で、誰が加害者であるのか』

ふと、あの男の言葉が脳裏をかすめた。

「……俺たちがしていたのは戦争だったのか」

認めたくとも認めたくなかった過去の事実。

思わず見上げた夕焼け空に彼女の顔が浮かんだ。

「なあ……とんび、俺たちは戦争をしていたみたいだ」

言葉が宙に消えて行く。誰も返事をしてくれる人はいない。そんな当たり前の事に、俺は一人苦笑した。

「戦争だつただろうが、何だらうが……俺にとつて大事なのは今、この瞬間か」  
そう呟いて、俺はポケットからイヤホンを取り出して耳に差し込んだ。そして音楽プレーヤーのスイッチを入れる。耳元に流れるのは盛りを過ぎた昔の名曲。

『あなたのために』、素敵な歌詞だ。

「……俺は誰のためにこうしているんだ」

それでもやはり、俺の呟きに答えてくれるものはいない。

俺は仕方なく幼稚園に戻る事にした。

「そろそろ奏が夕飯の準備をしている頃か」

遠くで聞こえるリニアの叫び声を背に、俺は幼稚園のドアを開けた。

「ただいま」

- Track. 5 「Please please please let me get what i want」 End. -

286.psd